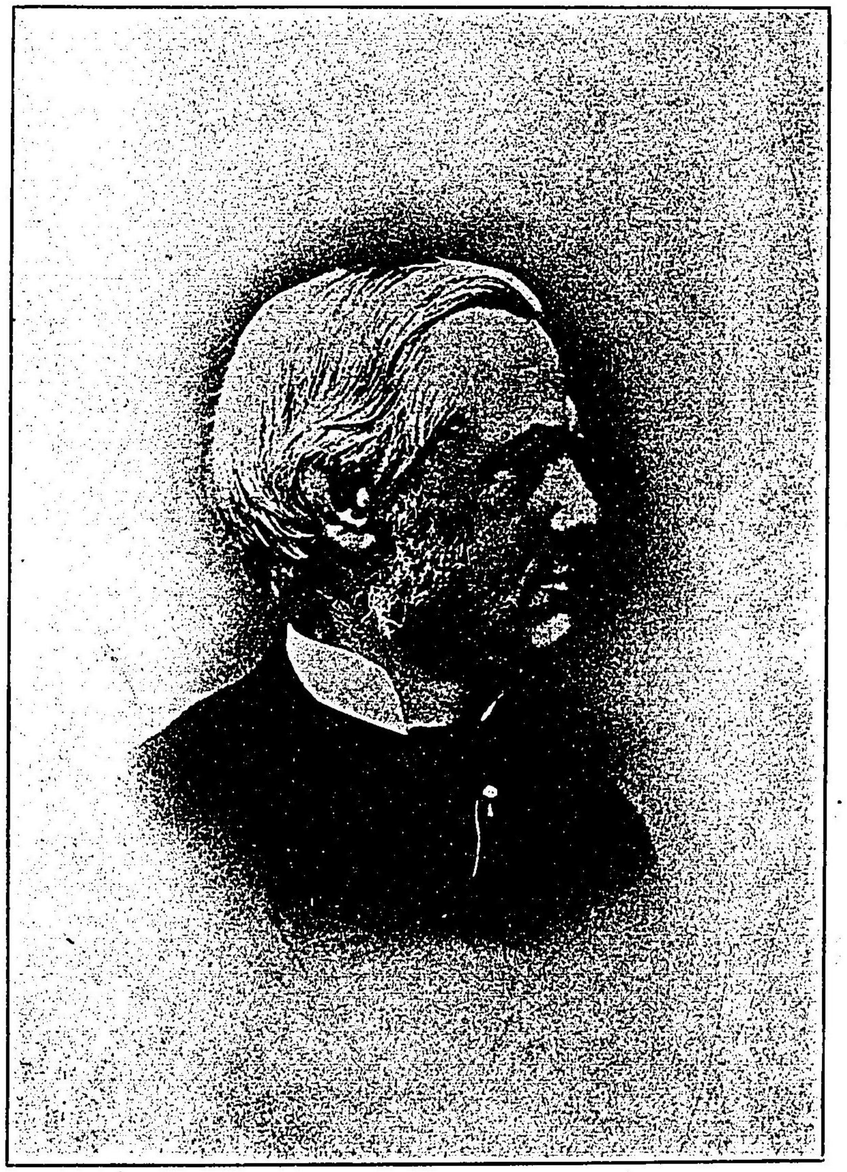
ヱ-2N39
78-3

英國博士マクスミユーレル著
文學博士南條文雄譯

比較宗教學

東京
博文館藏版

明治
40 3 25
内交



著者 マクスミラー博士

序

今譯する所の原書は、西暦千八百七十三年(明治六年)英國龍動に於て刊行せし本にして、同學友人笠原研壽氏の愛讀せし所なり、自序に據るに、千八百七十年二三兩月に、余が恩師馬格師摩勒博士が、英國學士院に於て斯學を講演せられし時は、其講演のまゝを學藝雜誌にも掲載し、佛獨伊等の數國語にも譯せられたれども、其後大に增補訂正せしものを今本とすと云ふ。蓋し馬博士の著書、其數實に六十九種にして、其中宗教學に關するもの八種あり、其外に出版者として署名せられたるものを、東方聖書集四十九册、佛教聖書集二册とす。博士は千八百二十三年(文政二年)十二月六日獨國デッサウ

市に生れ、四十八年(嘉永元年)に英國牛津に移り、千九百年(明治三十三年)十月二十八日午前十一時半に、牛津ノーハム樹園の居に逝去せられき。其居は、余が明治十二年二月始めて博士の門に入りしより十七年三月牛津を去りしまで屢來往して其指導を受けし所の家なり。輓近博文館主此書の譯出を請はる、乃ち自ら揣らず、遂に其業を卒ふ、唯恐らくは譯文明かならずして、能く博士の學說を紹介するに足らざらんことを、此等は更に他日の訂正を期す。今此譯本に缺く所を、最初二十頁と附錄の二論文とす、其譯は博文館關係の雜誌に掲載せしむることあるべし。去年十月恩師の夫人は余の翻譯を許可して懇書を寄せられたり、因りて略して始末を記し、以て師恩の萬一に報ぜんとするの情を陳すること此の如し。

明治四十年三月八日

東京城西爪雪處にて

南條文雄識す

比較宗教學目次

第一章　緒論……一

宗教學の二種――本書の目的――比較宗教學の好望――本學古今の比較――宗教史研究の要點――宗教觀念の變遷――馬哈默奇蹟を輕蔑す――佛陀奇蹟を禁ず――吠陀は四姓を等視す――古今宗教學者注目の異同――佛教研究の注意――宗教學に關する言語學の必要――比較宗教の必要――宗教書の原語を知らずして其宗教を論ずべからず――宗教學の名稱――科學に朋黨なし――階級を認めざる宗教――比較神學――比較研究の結果――言語と思想との密接の關係――古代物語の研究――創世記第一章の說明――古代物語解釋の至難――巴比倫の宗教――巴比倫の創世說――巴比倫創世說の點檢――亞弗利加の言語――ズールー人の言語及び宗教――各國民の祖先の要求――希臘人の祖先――古代傳說研究の

益――希臘の神話――古代言語と宗教との比較の得益――(附錄)

第二章……八九

比較言語學と比較宗教學との比較――東洋宗教の二種の別――經典を有する宗教の僅少――經典を有する二大種族――二大種族の宗教の系圖――六大宗教の關係――佛教の古今――耶蘇教の古今――儒道二教――八種宗教の經典の原語――吠陀――ブラーフマナ註解等――叙事詩等――後世の印度教――佛教――佛教經典と耶蘇教經典との比較――佛教經典の現狀――拜火教――儒教――道教――支那佛教――諸宗教經典蒐集の困難――宗教傳播の區域――亞弗利加の宗教――馬來等諸島の宗教――米國の宗教――亞細亞大陸の宗教――宗教學研究の疑問――宗教學の起點――宗教の分類――自然宗教――天啓と自然との宗教の分類の無價値――吠陀の天啓說――天啓說は今の問題にあらず――比較神學――天啓と自然との分類の誤謬――耶蘇教――舊約全書――自然宗教は天啓教の基礎――自然宗教の新定義――三種の宗教――普遍原始的の天啓は即ち自然宗教――國民的宗教と個人的宗教――多神的と二元的と一神的宗教――單一的神教と無神教

第三章……一二八

宗教と國語と國民性との關係――宗教は國語よりも有力なる國民の原因――希臘國民――猶太國民――シエーリングの說――ヘーゲルの說――法律史學者の說――エッチ、メーン氏の說――太古宗教――言語學と宗教學との關係――諸國語の關係――支那古代の宗教――孔子は述べて作らず――閃族の古代崇拜――阿利耶族の古代崇拜――宗教の三種分類は國語の分類の如し――三種分類以外の宗教――チユーレーニアン族――學者が二又は三種分類以外を發見せざる理由――チユーレーニアン族の研究――亞弗利加の各種方言――亞弗利加人の宗教――米國の宗教――言語學と宗教學との材料の有無――宗教研究者の注意――阿利耶族――家と都

府と王との三語――最高神の語――古代禮拜の狀態――閃族の古代宗教――阿利耶族語學者と閃族語學者との比較――神の名稱――神の名稱の意義――神の最古の名稱――チューレーニアン族の國語と宗教――支那の宗教――支那以外のチューレーニアン族――支那史中の外國傳――土耳其人――蒙古人――トゥングジック及サモエッド族人――芬蘭人――支那と他族との比較――支那語と蒙古語との比較――匈奴の語――突厥――比較の結果――西藏語――支那の神――支那以外の種族の宗教感覺――人鬼禮拜の情狀――此章の結果

第四章……一〇〇

序論的講義の辯解――比較宗教學と理論神學即宗教哲學との前後――結上起下――比較は公平を要す――宗教家の偏見――比較學の好時機――宗教の過去と現在――眞理を含まざる宗教あることなし――比較研究の益――法王レオの說――イレニーウスの說――保羅と彼得との說――公平なる者は引證を要せず――邪惡世界も善良世界となるべし――古代宗教書拔萃の價値――吠陀の頌歌拜火教の聖典の拔萃――佛陀の金言――法句經――佛教と耶蘇教の兩極點――阿難陀と摩鄧伽女――佛經に譬喩多し――新約全書の章句――孔子の語――老子の語――希臘羅馬の宗教と道德に關する高尚なる議論――亞弗利加人の神を願ふ念慮――ファイジの語――虛僞なる宗教は一として存在せず――諸宗教の判斷は其建設者の心を知るべし――宗教の目的は常に高貴なり――宗教的感情の古今――吠陀の頌歌――印度の耶蘇教徒の語――古代國語の困難――宗教の生命――古代の宗教を理解せんと欲せば先づ古代の國語を理解せざるべからず――國語最初の材料――生の從來する所、死の趣向する所を知らず――宗教の方言的生命――天空の語には固より物質以上の意義あり――多名詞――神の名の種々なること――多神教或は神話――神の頭顏口唇息等の語――宗教の幼

稚時代は決して消滅せず――古代宗教の解釋は慈悲的ならざるべからず――結論

目次終

比較宗教學

英國博士　マクスミユーレル　著
文學博士　南條　文雄　譯

第一章　緒論

宗教學の二種

夫れ「宗教」なる語に二樣の意義あるを以て、「宗教學」なる意義にも亦當然二樣の別あり。一は宗教の發達せる形式に關し、彼我宗教の間に歷史的干繫を研究せんとし、他は宗教の依つて生ずる所以の理論を考覈するを以て目的とす。

本書の目的

予は本書に於て先づ「比較宗教學」をのみ研覈することゝせん、蓋し「理論神學」に關する問題の解決は、世界に存在せる諸宗教の比較研究の結果、茲に蒐集せられ、組織せられ、解剖せられたる材料を待つて、初めて完全になされ得べければなり。

故に宗教的見地若くは哲學的見地より立論し、討究せられたる現代の神學も、往々理論の一方にのみ偏するを以て、比較宗教學の發達するに連れ、漸次世人の注意を失却するに至り、恰かもポッシユス、ヘムステルヒユイス、バルケナー、レネップ等の著述が、ボップの「比較文法學」に遇して、殆んど舊時代の思想、舊時代の研究として排斥せらるゝに會せるが如く然り。

比較宗教の好望

「信仰」の因つて生ずべき內的及び外的境遇を解剖し、其理論を考覈せんと試みたるは、これ理論神學者の好んで爲せし所なりしと雖も、比較宗教學の研究は之に反し、現今に至るまで學者の指頭を之に染むるもの極めて少なく、寥々曉天の星に似たり。斯の如き現象は一見甚だ奇なるが如きも、其理由は次に述ぶるが如く極めて簡單なりとす、即ち往時に於ては、人類の宗教を比較的に研究すべき材料を蒐集する方途頗ぶる困難にして、自ら比較宗教の攻覈盛大ならざりしと雖も、現時に於ては此不便著るしく減少し、材料又豐富なるを以て、却つて之を悉く利用し整頓するに苦むに至りしかば、勢ひ「比較宗教學」の勃興も、今後日を期して待つべきなり。

本學古今の比較

嘗てアクバー大帝（一五四二―一六〇五年）は宗教の研究に熱中し、自己の朝廷に、猶太教、耶蘇教、回々教（ヘヘイツト）、婆羅門教並に拜火教（ゾロアストリアン）の信徒を招致して盛に宗教の教義を攻覈せしめ、且つ大帝の力の及ぶ限り諸種の經典を飜譯し、以て自家の研究に便ならしめき。然りと雖も大帝の熱心に蒐集し、飜譯せしめたる經典の數に至りては、決して多きを以て誇るに足らず、之を現今の宗教學者の書庫に藏する經典に比すれば、素より同日にして語るべきならざるなり。以て當時經典飜譯の至難並に蒐集の不便なりし證左とするに足りなん。現時に於ては、嘗てアクバー大帝が之を婆羅門教徒より强奪せんと擬して或は賄賂を以てし、或は脅迫を以てして尙且つ獲收し得ざりし其貴重なるベーダ經典の原本すら容易に見閲することを得べし。大帝の所持したるものなりと云傳ふるベーダ經典の飜譯書は、所謂「アタルバ、ベーダ」の飜譯書にして、單に神秘的なる、哲學的なるウパニシヤッドのみを包含せしに過ぎず、蓋し此「アタルバ、ベーダ」を、其眞正なるベーダ經典の如き古代的韻文に比せんか、到底同一の論にあらざること猶ほ「タルムット」（ヘブリユの經典）が舊約全書に於けるが如く、「サツイズム」（回々教の高等神秘派の

經典)が、コーラン(回々教の經典)に於ける干係に似たり。

拜火教の聖典たるアベスタ聖經及び其飜譯本は今尚ほ存在す、而して現時に存在する此等の經典は、アクバー大帝がキルマンより印度に招聘せしアードシエルなる該教信者の所藏せるものに比すれば、遙かに正確にして且つ完全たり。

或點に於ては、確かに婆羅門教、拜火教、回々教等に比して、一層主要なる彼の佛教に關する記事は、デルヒーの宮殿にて毎木曜の夜間に開廷せられたりし其宗教討論中に裁錄せられあらず。夫れ斯の如くなるを以て、アクバー大帝の師たる、アブルファズルも亦佛教研究に關し、自己の質疑を正すべき高僧知識を其佛教信者の中に見る能はざりしなり。大帝當時に於ける佛教の位置又以て知るべし。然れども今や佛教の經典は、意外に多く各國語を以て飜譯せられ、パーリ語、緬甸語、暹羅語、梵語、西藏語、蒙古語及び漢語等の經典、手に從つて蒐集せらるべく、佛教研究上、その材料に乏しとせず。然るに此等の貴重なる佛教經典が今尚ほ完全に歐洲語を以て飜譯せられざるものとせんか、是れ全く歐米人の其責に任ずべきものにして空しく珠玉を抱きて其價の高きを知らざるの遺憾なしとせず。

古代支那に於て行はれたる孔、孟、老子の說の如き、巧妙なる譯書によりて之を伺ふを得べく、又以て支那思想界の勢力を有する此等の信仰の如何なるものなるかを考覈するに足るべし。以上述べたるが如き宗教的信仰は、唯その一端を說示したるに止まれども、ベーダ經及び孔孟の說に比して文明の遙かに劣等なる種族間に發生せし宗教的信仰と崇拜とに至りては、其研究、前者に較べて遙かに困難なるものあるに拘らず、今や其一端を發表し得るに至りしもの、主として是れ耶蘇宣教師研鑽の賜に歸せざるを得ず。阿非利加及びメラネシア人の信仰は、時代の前後を標準として論ずる時は、事態近代に屬すと雖も、發達の淺深を標準として論ずる時は、甚だ古代的にして且つ原始的狀態を有せり、されば此等の非文明的種類の宗教研究は、言語研究と共に宗教研究者に執り好箇の問題たらん。

予が玆に述べたる此比較的幼稚なる宗教研究は、實に宗教史研究者に執りて最も緊要なる問題なりとす。凡そ宗教を研究し之を比較せんには、宜しく嚴正

公平なる學究的態度を執りて、冷靜に批評解釋せずんばあるべからず。此故に今日宗教的研究をなすに當りては、勿論、又一般の科學を考覈する上に於ても、吾人は須らく次に述ぶるが如き諸點に注意を拂はざるべからず。著者は何人なりや、著述の年代は如何、著述せられたる場所は如何と云へる簡單なれども而も重要なる問題を嚴格に解決せんを要す。加之らず、著者は果して身躬ら親しく之を目擊して該記事をなせしや、又は自家之を目擊するとなく他人より傳へ聞きて之を筆にせしや。又他人より傳聞して記し留けるものとするも、件の記事の出來事は、該著者と少くも同時代のものなりや、將た黨派的感情に支配せられ筆を枉げて其意を通ずるにあらずや、他の勢力に感化せられ、爲めに事實の正確を失却せるにあらずや否や、著者は又一時に此著述をなせしや否や、又は著者は、年代を異にして二著述を合成したるにあらざるか非か、若し前後時代を異にして著者が此著述をなせしものとする時は、吾人は此著述より果して其比較的前に書かれたる記事を分離することを得るや否や等の諸種の問題を提供せずして、焉んぞ能く大膽に其經典、其著述等より引證し取材するを得んや。此研究方法を採取せんには、世界の主要なる宗教の研究も正確なるを得べく、從つて現今の有名なる學者中にも何れの宗教が舊古のものにして、又孰れの宗教が比較的近新のものなりしかを區別し、且つ又孰れの部分が祖師家の說にして何等の部分が門弟の意見なるか、さては又後世如何に此等の宗教觀念が變化し來たるかを區別し觀察することを得る人少數ならざるべし。

宗教觀念の變遷

斯の如く比較的後代に發達せし宗教觀念の研究は、常に特殊の快感を覺知せしめ、尙ほ之に伴ふ實際的教訓も亦少々にあらざらん。吾人が茲に言語の比較研究を開始せんには、先づ各國語の最古の形式を考覈すること必要なると等しく、宗教的信仰の狀態を比較し、宗教の價値を斷定せんには、須らく先づ各宗教の最も原始的なる發達變遷を知了せんを要す。例へば回々教の正教派（オーソドックス）の經典は、其教祖モハメットの爲せし奇蹟的記事を以て充たさるゝも、而もモハメットは其經典「コーラン」に於て『予は他と等しく、又一個の人間なり』と明確に宣言せり、即ちモハメットは奇蹟的行爲を輕蔑して、一に神（アラー）の偉大なる作業に信賴し、太陽の出沒、降雨、植物の繁茂、生物等、悉く是れ上帝の作業なりと唱說したりき。

馬哈點奇蹟を輕蔑す

佛陀奇蹟を禁す

佛教の傳說に之を見るに、佛陀及び其弟子等の行ひしものなりと云ひ傳ふる不思議なる種々の奇蹟を載す、而して此傳說の奇蹟たるや、恐らく佛教以外の宗教中に見聞する所の奇蹟と同日にして語るべからざる程、實に荒唐無稽のものに似たり。然りと雖も佛教の經典中には、奇蹟をなすことを其門弟に禁ずるの意味顯然たり、これ蓋し佛世尊が、多數信徒の熱心に信仰の標的を示されたしと懇願せるをも顧みず、決然荒唐無稽の奇蹟を以て、信徒の希望を滿足せしむることをせずとの意なり、然らば則ち佛陀が其弟子衆に敢てせよと命ぜられし奇蹟は、夫れ果して如何のものなりしぞ、世尊宣はく、『汝の善行を秘せよ、而して汝が犯せし罪は、之を公衆の面前に於て懺悔すべし』と、是れ謂ふ所佛陀眞正の奇蹟なりとす。故に知る、世の所謂奇蹟なるものは、佛世尊の好む所のものにあらざりしことを。

佛陀は四姓を等視す

近代の印度教は階級制を固持し、其堅固なること尙ほ大磐石の上にあるが如く、如何なる議論を以てするも到底之を打破し得ざりき。されど印度人の宗教信仰の最高標的たる「ベーダ」經典の中には、遂に複雜なる階級組織に關する記事を見出する能はず、是れ正に「マヌ」法典と大に其趣を異にする所とす。即ちベーダ經に於ては、印度に於て通常行はるゝ所の階級、僧侶、武士、市民、奴隸等の四種の階級も、等しく是れ一切生物の根源たるブラフマンより出現したるものなりと云へり。

古今宗教學者注目の異同

宗教を研究するに際し、前代學者の試みたる批評的研究や、未だ以て正鵠を得たるものと斷言すべからず、故に各宗教の自由討究の餘地は、前途尙ほ遼遠なりと云ふべし。然れども前人の試みたる研究中、時に多少成功したるもの無きにあらず、而して其研究の成績は、偶々以て後人の宗教研究上、大に參考とせらるべきもの少しとせず。即ち吾人がベーダ經の原始的宗教を研究せんとするに當りては、宜しく注意してリグ、ベーダの頌歌及びサーマ、ベーダ、ヤヂュル、ベーダの中に蒐集せられたる頌歌と、アタルバ、ベーダの頌歌の差違を區別せんを要す、されど批評的學者は又これと同樣なる注意を以て、リグベーダ中の古代の頌歌と近代のそれとを明白に區別し、進んで其中に現はれたる言語表示の方法、文法の關係、又は韻の附方等を詳細に攻覈する所なかるべからず。

アフラマズダ崇拜の宗教を開始したる其祖師の動機と刺撃とを明かに觀察せんには、拜火教の聖典中、最も舊古の言葉を以て書かれたるガーター語のゼンダベスタ經の文句に就き、主として研究せざるを得ず。

佛教研究の注意

佛教を公平に觀察し、世尊を正當に批評せんとす、三藏法（ツーピタカルマ）の實際的部分と阿毗達磨（ダルマ）の哲學的方面とを混同すべきにあらず。この兩方面の經典は、共に是れ佛教の聖典なりと雖も、その經典の依つて生ぜし根源に至りては、大に宗教思想を異にするものありて存す。

吾人が佛教史を研究する中には、多數經典の結集統一せらるべき時期の必然に來るべきことを看知せらるべし。佛陀在世の時代には、世尊の演說を編纂したる經典も其用なく、又佛陀の經歷を記るしたるものも、當時の人々には其要なかりしならん。何となれば佛在世の砌りには、親しく佛世尊に接して其法教を聽聞することを得たりければなり。されど佛陀一たび此世に永く在さずなりてより其教法を未來に傳へ、特に世尊の偉大なる感化を將來に傳へしめんとは、これ正に佛弟子等の心中に湧出したる報恩の感想にぞありける。されば佛弟子等が其永訣を愛惜して措く能はざりし法友、恩師の言行を後昆に傳へんとて、やがてそが經典の編纂に着手せしは、正しく佛入滅の以後に起りたるものなり。當時に於ては、佛陀の偉大なる功勞を示さんが爲めに、多少信認すべからざる過重の讃辭も、喜んで歡迎せられたりき。勢ひ斯の如くなりしを以て、其不正確なる佛陀の記事を排斥し、批評して、佛世尊の神聖なる價値を毀傷せんと試みたる人々の言論ありしならんも、此等は當時の人々の耳を傾けざる所にぞありし。然れども佛陀の威名も久しからずして漸く衰へ、これに關して甲論乙駁、頻々として群がり出て、遂に「不信」（ナースティカ）並に「異教徒」（パーシャンダ）なる字句すら世上に行はるゝに至りぬ。斯くて佛陀に對する信徒間の信仰、又動搖して統一を缺き、あはや佛燈將に消えなんとす、茲に於てか諸王諸侯相議して佛教統一の計を劃策し、又分派の合致、正教信條の設定、及び聖典完成の爲めに會議を催さしむ。セルークスと同時代なる阿育大王が使節を長老の會議に遣はして其當さに採るべき方針を指示し、將來用ゐらるべき佛教聖典中には、嚴かに異教的性質を帶べる記事、經典を入るべからざることを以てせり。

宗教學に關する言語學の必要

こは獨り佛教に於てのみ然りしにあらず、何れの宗教に於ても、該宗教の聖典と稱せらるゝものゝ中には、時に宗教研究者の爲めに、最も正確且つ最も舊古の事實を提供するもの往々にして之なきにあらずと雖も、而もこれあるが爲めに一斑を以て其全豹を稱讃すること能はず、何ぞや、此等の經典中には、間々信用すべくもあらぬ事實を載するものあるが故に宗教以外の歴史的著述に比して、一段の攻究的批評と、一段の嚴格なる調査とを要するあればなり。經典中に存在する此等の點を發見せんには宜しく言語學の輔助を仰がざるべからず、實に言語學は此場合に於て最も有力なる輔助科學なりとす。たとひ歴史家が充分攻究するを得ざる彼の古代の思想や、多少後世の者をして摸倣せられ得べきも、獨り古代の國語の摸倣に至りては、容易の業にあらずして、到底熟練せる文法家の眼光を瞞過し去ること能はざるなり。僞本「エーズル、ベーダ」の如きは能くボルテーアをすら欺き、爲めにボルテーアは、これを以て西洋諸國が東洋より恩惠を蒙りたる最貴重の賜物なりと感歎したりき。されど現今の梵語學者は、大に進歩せるを以て、決して之が爲めに欺かれざる至れり。所謂東洋より西洋に與へたる最も貴重なる此贈物は宗教研究者の讀破すべきものゝ中にて、殊に無價値なることを載せたる書籍なりとす、されば之を辯護する人々も此經典を恐らく僞本なりとは思及ばざりしなるべく、ボルテーアが之を用ゐたる目的にて決し

イ此書を著はさざりしならんと云ふに止り、最早これ以上何等の言を弄することを得ざるべし。近時世人の注目を牽きたるジャコリオー氏の著述にかゝる「ラ、ビブル、ダン、ランド」の如きも亦「エーズル、ベーダ」と同種類の書籍ならんと信ず。婆羅門の聖典に見ゆる所の章句は、もと原本に存在せるものならずして、單に佛闍西語を以て譯せられたる詩中に存するものなり。乃ち梵語學者は、誰とて此等の書籍を目して僞本なることを公言するに躊躇せざるべく、ジャコリオー氏の如きも亦欺かれたる一人なりと云ふを憚らざるべし。夫れ「ベーダ」中には幼稚にして且つ愚鈍なる記事を見るべしと雖も、其見ゆる所の次の如き文句、即ち「女性は人類の山羊なり」と云へる言葉を讀むならんか、一見直ちに十九世紀の悪論なることを認定するに難からず。ジャコリオー氏の結論と理論とは、氏の立論せる件の材料より當然來るべきものなりしならん。

比較宗教の必要

近時漸く明かに認めらるゝに至りたる、人類宗教の歴史を研究するに必要なる眞正の材料記事、及び全世界に彌漫せる宗教思想の最奥義を考覈するに必須なる東洋諸國の國語等は、茲に又宗教の比較研究上、實に缺くべからざるものにして、此等の材料の蒐集と同時に、比較宗教の研究は漸次須要のものたるに至りぬ。吾人は進んてこれが研究に從事せざるべからずと雖も、若し夫れ吾人にして此研究を擔當せざらんか、吾人以外の國民並に吾人以外の宗教者來りて此事業をなすに至るべし。近時アーヂサマーヂユの長老が、カルカッタに於て演說したりし『印度教が一切現存の宗教に優絶せることに就て』と云ふ論旨によれば、其能く全般の宗教に超越する所以は、他なし印度教は人間の開始せるものにあらず、人間の命名せしものにもあらざればなり、神と人との間に調停周旋すべき仲介者なければなり、印度人は靈魂の靈魂として、熱烈なる犧牲的精神を以て神を尊敬すればなり、印度人のみは勞作をなす時にも、愉快を執る時にも、將又他の何れの場合に於ても、總べて等しく唯だ神のみを尊敬すればなり。若し夫れ諸他宗教の經文によれば、敬虔、尊神の行爲は畢竟自己永遠の幸福を欲する爲めに希求せらるゝと雖も、印度教の經文は、唯だ神を尊敬すべきが爲めにのみ神を尊信すればなり。印度教は世界的恩惠を主とす、されば他教の信仰に至りては、只だ人間の恩惠を眼中に置けばなり。印度教には教派の別なく、改宗の事なく、時間と感覺とより精神を完全に抽象して以て、これに絶對の服從をなし、且つ此精神を神聖なる上帝に合一せしむ。之に加ふるに此印度教は、大は國家の政事より小は一家の細事に至るまで一切を支配し、古往今來、綿々連續して信仰せらるゝを以てなりと。

宗教世の原語なるがゆえに其宗教を論ずべからず

顧ふに公平且つ科學的に比較研究せらるべき宗教學は、是れ眞箇に現代の要求に適合せるものたり。夫れ宗教學は、名聲嘖々たる人士等によりて研究せらる。而して此宗教學たる名稱は、猶未だ完成の域に達せず、寧ろ未熟の時代に屬するものにして、獨逸、佛蘭西、米國等に於ては、多少人口に膾炙せらるゝ所なりとす。宗教學の重要なる問題は研究者の耳目を聳動し、其結果、或は希望を以て豫見せられ、或は失望恐怖を以て豫見せらる。この故に世界の主要なる諸宗教を、其原本に就きて研究し、宗教の價値を批評し、これを尊敬せんとする人々は、當さ

に眞正なる科學的見地より之を考覈し、彼の諸宗教の依つて起りたる各國語を知了せずして、唯だ徒らに甲論乙駁せんとする所謂古代派宗教家の容喙を許すべきにあらざるなり。何を以て之を云ふか、此等の國語を研究するの勞を取らざる人々は、婆羅門教にせよ、拜火教にせよ、佛教にせよ、猶太教にせよ、耶蘇教にせよ、能く之を完全に、且つ公平に攻究するを得ざればなり。希臘語を知らずしてホーマーの宗教を論じ、ヘブリュー語を解せずしてモーゼスの宗教を語らんとする哲學者ありとせば果て奈何。

宗教學の名稱

予はマシュー、アーノルド氏が「ラ、スシアンス、デ、レリジオン」即ち宗教學なる名稱につき非難せしことを驚かざるべし、而して予は氏と共に斯くの如き名稱が、平凡なる文學者の膽を奪ふに價するものなることを是認せんとす。さあれ此等の名稱は、果して如何なる學者によりて支配せらるゝや。ベーダ經若くは新舊兩約書を其原本に就き讀み得る人にして、誰か能くアーリヤ族の神聖なる教說が、波斯、印度より、パレスタインに入り、而して遂に耶蘇教を起し、聖ポール、聖ジョンの如き有名なる十二使徒を生ぜしことを唱導せしものありしぞ。誰か又

このアーリヤ族の教說が一層完全となり、且つ耶蘇教寺院の長老が漸次改良せしが如く、これをして超絕的哲學の性質を帶ぶるに至りしことを說明せしものぞや。アーリヤ族たる耶蘇教徒等が、その耶蘇教はセミテスより進步せしものにあらずとし、並にあらゆる宗教の根源が耶蘇教の經典中に存在せずしてベーダの頌歌中に存在せることを承認し、以て能く心密かに滿足するものと云はるべきや、蓋しコレブルーク氏、ラッセン氏、又はブルヌーフ氏の如きは、斯からん思想を以て、吾人が滿足するものとは夢想だもなさゞりしならん。加之らず同氏等は果して耶蘇教の教說がベーダのアグニ即ち「火」の教說なること、耶蘇教の「人體(カーネーション)」を受けたること、火の產出物をベーダにて莊嚴に云ひ表せしことを意味し、又耶蘇教の三位一體即ち父と子と聖靈との一體なる說は、ベーダ教の太陽、火及び風の三位一體なること、並に神は宇宙統一の主體なること等を吾人耶蘇教徒が承認するならんと夢想せしや否や。アーノルド氏はブルヌーフ氏の名を揭ぐ、然れども氏はユーゼネ、ブルヌーフが其後繼者及び子孫を遺し置かざりしことを知らずんばあるべからず。

科學に明瞭なし

この比較研究の方法を應用して以て宗教を研究せんとする學者は、宜しく常に公平の地位に立ち、獨り耶蘇教を賞讃せんが爲めに他の諸宗教を貶し、又は他の諸宗教を擧げんが爲めに耶蘇教を落すべきにあらず、他なし科學には彼我の朋黨與派なるものなく、他まで、も公平不偏なるを要するが故なり。

予は曰はんと欲す、眞正なる耶蘇教は、予の見解を以てすれば、世界の輕蔑せられたる諸宗教中に包含せらるゝ眞理が發見せらるゝこと多きに從ひ、又吾人が此隱れたる眞理を賞讃することを得るの多きを加ふるに從ひ、漸次其特色を發揮し來りて、他の宗教に卓然超越することを承認するに至るならんと信ず。然りと雖も耶蘇教が畢竟斯くの如き地位に立てることを自覺せんには、公平に他の諸宗教を批評するに使用せらるべき標準を並用したる後に於てせざるべからず、若し然らずんば此自覺は空中の樓閣と等しく取るに足るなきの見識なりと云ふべし。實にや耶蘇教にのみ特殊なる待遇を賦與せんとするが如きは、他の宗教に於けると一般、これにも亦許すべからざるの見解なりとす。耶蘇教はこれを世界の最も舊古にして且つ最も有力なる諸宗教と對立せしむる場合に

階級を認めざる宗教

於て、獨り卓越なる地位を占め、特殊の權利を占有すべきにあらず。現今に於てすら耶蘇教は世上より毫も殊別の待遇を受けず、而して又同時に耶蘇宣教師が世界到る所に逢着する人士より殊別の厚遇を受くるなし。されば將來各宗教の間には、公平なる批評あるべく、耶蘇教が現在及び過去に有せし勢力を失却し果てゝ無用の宗教たるに至らざる限りは、進んで諸宗教と大に健闘論爭せずんばあるべからず、否寧ろ獨り此健闘より退き、そが比較神學の研究を忽諸に附すべきならんや。

古代の佛教を除外して、何れの宗教も皆世界宗教の公平なる比較研究上、敢て助力せるものなく、又吾人の研究せんとする宗教學に資せしものなかりしことを、一言茲に注意し置かん。全人類の宗教として、階級を認めざるの宗教として、將た特殊の人々に限られざる宗教としての耶蘇教は、人類の歷史を考究する上に就き、吾人に有力なる唯一の宗教なり、即ち世界のあらゆる人種の發達中に起りたる其神聖なる知識と愛との形跡を知悉する上に就き有力なる唯一無二の宗教たり、加之らず若し能ふべくんば、宗教的信仰の最下層に於てすら、猶且つ神

聖なることを云ひ表はせるものを認めしむるに足る唯一の有力なる宗教は實に耶蘇教なりとす。實に耶蘇教は、聖ペテロの云ひけん如く、『神は不公平なる判斷者にあらず、苟も神を恐れ、正道を履むものは、何れの國民たるを問はず、神と共に住むことを得べし』とのことを承認する唯一無二の有力なる宗教たるなり。

宗教の多き何ぞ限らん、然れども比較神學をして發達せしめんと欲す、我耶蘇教を措て他に一層善良なる材料なしと云はざるべからず。耶蘇教が其頭初より猶太教と相關聯しつゝ保有せる地位は、比較神學上第一の好資料たるべく、而して其無學のものをだに能く此二宗教の比較研究に注目を拂はしむべし。蓋し此二宗教は神の觀念、人類の尊敬、道德の動機、不死の希望等に於て、大に異るところありと雖も、其類似する所却つて多く、かの舊約全書に於ける祈禱讃美歌の中にて耶蘇教の夫れに一致し得ざるもの、其數僅々二三に止り、且つ今日耶蘇教徒が服從するを肯ぜざる舊約全書の道德も、その數僅かに二三に止れり。猶太の排他的宗教中にも已に全人類に行はるべき普遍的宗教の基礎あることを知らば、猶太教以外の諸宗教中にも亦隱れたる目的の存在せるを承認する上に於て、さしたる困難を感ぜざるべし。蓋し沙漠の中を彷徨するは、是れやがて希望の彼岸に到達せんとする準備たり、基礎たりと云ふを得べく、其基礎的、準備的宗教に於ても亦復同一の希望なしと云ふべけんや。

猶太教と耶蘇教との二大宗教の研究は、夙に碩學の士によりて攻究せられ、同時に希臘及び羅馬の神話の考究を促致したりき。然り而して此二宗教の闡究は、其結果一層精緻なる攻究の最も必要なる準備をなしたるものと云ふべし。されば前代の學者によりてなされたる或種の誤りたる研究と雖も、猶且つ後代の研究者にとり有益なる効果なしと云ふべからず、而して一たび此誤謬の訂正せられたる以上、最早再び此誤りを繰返さるべきにあらざるなり。例せば諸種の異教は、もと是れ單に舊約全書の宗教の變形をなせしものに過ぎずと云へる說は、嘗て第一流の學者によりて唱導せられたりしも、今や希臘語及び拉甸語はヘブリュー語の變態せるものなることを說明する方便として使用せらるゝ底の用をなすに止まれり。

人類の祖先には、唯一の原始的異常の天啓賦與せられ、而して異教に於ける偶

像の寺院を探見するに當り、吾人の注目する種々なる眞理の細粒は、もと是れ共に彼の神聖なる相續財産の分布せる細末斷片なりてふ見解は、今や唯だ二三學者によりて主張せらるゝに止まる。蓋し予の見る所を以てすれば原始に唯一の完全なる國語存在したりしが、後に至り漸次分裂散在して、遂に世界の無數なる國語となれるなりとの見解に歸着するの外なし。

比較研究の結果

吾人の此研究に關し、甚だ有力なる材料を吾人に與ふる所の希臘及び羅馬の諸宗教と、猶太教並に耶蘇教とを比較研究して以て、茲に幾多の主義は唱出せられたりき。例へば古代の國語は現代の國語と同一ならざると、並に東洋諸邦の國語は、西洋諸州の國語と同じからざること、さては若し吾人にして此等の事實を承認するにあらざるよりは、人類最古の詩人及び聖賢の言語を誤解せざらんとするも能はざるなり。アングロサキソン語と英語、並に拉甸語と佛蘭西語とに於て、そが同一の語は同一の事物を意味せざるもの多し。近代に於ける各國の言語は、舊約全書に於けるヘブリユー語の如き、古代のセミテック語と全然相等しきものなることを信ずるを得ず。

言語と思想との密接の關係

舊約全書に表はれたる往古の言語と往古の思想とは、猶ほ未だ自然的若くは超自然的の勢力を代表するに、多少人間の形體を以て示すより以外の抽象的階段に達しあらざりしが如し。吾人は內部又は外部より來る所の誘惑と言ふと雖も、古代の人々にありては、人間の形態を具するか若くは動物の形狀を具ふるか、何れにもせよ、「誘惑者」なる思想を有したりしに似たり。吾人が神の常住なる救濟と云へることも、彼等古代の人々は、神を稱するに彼等の岩石、彼等の城塞、彼等の高塔なりと云へりき。彼等は更に進んで、『彼等を生むの岩石』なる文句を用うることすらあり。蓋し、此句の意味はホーマーが人の生出せし岩石と云へる意味と異れる意味に使用せられたるなり。吾人の所謂天使又は神の使者は彼等の所謂「道を彼等に案內すべき雲の柱にして、且つ光明を彼等に與ふる所の光の柱」なりとす。加之らず、彼等は「嵐の避難所」、「熱より避くる影」なる意味に此神の使者なる語を了解せり。實に我等の思ひ設けし思想と彼等の思想とは同一なりしも、唯だ眞正なる古代詩の言葉中に其面影を殘すに止り、今や殆ど吾人の了

解以外に屬する如き方法を以て國語が其具體語と抽象語とを區別し、並に純粹なる精神言語と粗雜なる物質言語とを區別すること能はざりし以前に當り、此等古代の演說者は、具體的なる語をも抽象的なる語をも了解し、且つ物質的なる語も精神的なる語をも、共によく了解し得たりしことを忘却して、若しも吾人が恣に古代の豫言者の使用しけん言語を誤解し、猶ほ此等の語を理解するに、或一言語の外部に表はれたる的質的方面のみ觀察するならんか、その罪過は彼等にあらで寧ろ吾人に存すと云はざるべからず。吾人にして斯くの如き精神的視差を承認するにあらずんば、古代の國語てふ天空に横はれる氣象の觀察は必ずや誤解を招致せん。要するに宗教思想史中に存する所の困難なる問題の過半は、其原因たる、主として古代國語の誤解及び古代思想の誤解に基くものなりと云ふを得べし。

古代物語の研究

印度、希臘又は伊太利の神話の中にて、一見道理に合致せざるものゝ如く吾人も認め、又古代の人々も思ひたる物語は、多く比較神話學の研究によりて除去せられたりき。搗てゝ加へて比較神話學の研究盛大に趣くに從ひ、古代の幼稚なる神話はもとのまゝの幼稚なる意味にて今日再び閲讀せられ得るに至りぬ。斯の如き誤解を招致するに至りたる國語は、實に最古の文學的記錄よりも一層舊古のものなりと云ふて不可なし。アリヤン語を以て記されたる神話はベーダ時代以前並にホーマー時代以前既に已に存在し、且つ其影響、後世にまで存續したりき。

豫め之を注意するも、而も何等の効用あるべからざる所謂幼稚なる病氣とも稱せらるべき國語の性質と、其發達中に固有せる變遷の影響とを不思議にも免れ得たるものは、セミチック族の各國語殊にヘブリユー語なりと云ふ、可なるか非か。

創世記第一章の說明

夫れセミチック語は、予が前に說明しけん理由により、アリヤン語に比して一層輕微なる影響を神話より受けたるものと信ず、されど吾人が、古代の思想に古代國語の影響ありたることを承認するにあらざるよりは、決して古代の國語を正當に理解すべくもあらず、而して此事實を知らんと欲す、舊約書創世記第一章を讀破すれば明了せん。例令ば最初の人間が創造せられたる後に、此人間の一

肋骨引き拔かれて玆に一個の婦人と變化せりてふ記事を見るに當り、此物語が其儘の意義を有せるものならざることを、古代國語の研究者は容易に察知するを得べし。吾人は玆に男子と女性との創造に於ける不思議なる事實の創世記第一章中に存在せしことを主張するの要を見ず。次に述ぶるが如き事實より簡單にして且つ更に眞實なるものなけん、曰く『斯くして神は其形に似して人間を作り、男女の兩性を造り給へり、而して神は彼れに幸福を與へ、且つ告げて宣はく、汝等豐饒なれ、成熟せよ、而して地上を充たし世界を征服せよ』と、此句最も簡明にして能く創世の有樣を表言せり。又次に來るべき疑問は男女が創造せられたる此物語の後、否寧ろ更に人間なるもの創造せられて、エデンの園に寂しき獨生活し、自己の肋骨を一枚拔取りたりしことの物語ありしが、此肋骨が變して其人間を援助する爲めに變生したるなりきなどゝ云へる第二の創世記なるもの更に存在し得べきや如何と云ふにあり。

古代ヘブリューの事情を知れる人々は、斯般傳說の本來の希望に關し、決して何等の疑義をも懷抱せざるべし。現代の國語にて、そが同一事物を表言するにもヘブリューにては「骨」と云ひ、アラビヤにては「物の目」と云ふ。是れセミチック語の有名なる熟語なりとす、而して他の國語にも亦これに類似せるものなきにあらず。彼の所謂「骨」は、吾人が身體內部の心髓を稱するに使用せらるゝ語たるが如く、其所用たる「目」は、吾人が事物の精神若くは事物自體を稱するに使用せらるゝ語たるが如し。ベーダ經の古頌歌中にも亦詩人の之に疑を抱きて云へることあり、曰く、『無骨即ち無形なるものが、有骨者を生みたる時に、その最初に生みたる人間を見たる人は誰ぞ、換言せば形なき者が、形を有し、心髓なき者が心髓を有せし時に、其最初に形を有し、心髓を具へし者を、頭初に見たる者は何人ぞや』と更に詩人は語を繼ぎて疑ふらく、『生命、血脈、並に世界の精神は何所に存在したりしや。此事實を知れる人より此事實を聞かんが爲めに、何人が自己を產出しけるや。』と。ベーダ經の古語に於て、骨、血、呼吸等の文字は、吾人が指示する物質的意義よりも更に廣肝なる意味を有せしなり、然れども時を經るに從ひ梵語の「アートマン」なる語は、もと呼吸を意味したりしに拘らず變じて單純の代名詞となり、遂に「事物自體なる意義を有するに至り、ヘブリューの「エトセム」なる語も亦同

じ。此語は本來「骨」てふ意味なりしも、遂に單純なる代名詞狀の形容詞として使用せられ、事物自體又は同體なる意味に用ゐらるゝに至りぬ。

前述せる所の敘言により、吾人は近代の國語をかりてアダムがイブに「汝は予と同一なり」と云ひ得る思想は、ヘブリュー語にて「汝の骨は予の骨なり、汝の肉は予の肉なり」と云へる字句なるを了知せん。斯からん文句を數代用ふるに及べば、物質的、欺瞞誤解は忽然として發生し、後人遂に信じて最初の婦人は、最初の男子の骨より作られ、又は肋骨より造られたるものなりとなすに至るべし。茲に肋骨より作らるゝと云へる所以のものは、肋骨のものたる他の部分の骨に比して一層愛惜せられ、保護せらるゝ緊要の者なればなり。斯の如き誤解が一たび唱出せられたる以上は、其勢力容易に衰頽せず何となれば奇を好み、異を求むるは人情の常なるが故に乃ち斯からん傾向は夙に古代發生し、且つ此傾向あるの結果、上古の人々の中に、其簡單たり、自然たり、健全なるが如き事柄を眞率に評價し尊重するの力を普く打破し去らんと脅したればなり。以上述べたる所によりて之を見れば、創世記第二章に記されたる事實は、第一章の事實とは正反對なるも、而も女性創造の物語は、第二章中に述べられたる所以の理由、蓋し明白ならん。

古代物語解釋の至難

此等の古代の物語を解釋することは、もと至難のことに屬し、前代學者の試みたる研究の結果概して正當を失せずんばあらざりき。予が辯護せんと欲する唯一の主張は次の如し。此種古代物語の誤解は、古代の國語に於て到底免れ難き所にして、セミチックの宗教並にアリヤンの宗教中に於ても、同じく亦此誤解發生せざる能はずとのこと即ち是れ。

巴比倫の宗教

予は次にセミチックの他の宗教即ちベロススの記錄に謂ふ所のバビロンの古代宗教と稱せらるゝ宗教を研究せん。此バビロンの古代宗教と猶太人の宗教との間に存する類似點は明白なれども、耶蘇教聖典の言語の簡單なるものと、バビロン神譜の誇大なるものとの間には、甚だしき相違あり、即ち此相違を知らんには、惡むべき牽强附會的の諷刺畫の背後に潛める原始的略圖を想像すべき多少の勇氣なくんばあらざるなり。

ベロススの記述したるバビロンの宗教は、少くとも彼の生存せし時代の記事

なれば、其正確なるや疑を容れず。彼はバビロニアに生れ、ベルースの寺院の僧侶にしてアレキサンダー大王と同時代なりき。彼は希臘語を以てカルデアンの歴史を著はし、其材料は主としてバビロンに保存せられ、二十萬年の時代を通して記されたる天文、年譜の記錄より採取したることを、其第一卷に記し置けり。

ベロススの著作せる歴史は爾後消滅せり。此歴史の拔抄は殆ど一世紀前、アレキサンダー、ポリヒステル氏によりて試みられたりき。然るを此編述も亦消滅し了りぬ。されど此書はユーセビウス(二七〇年—三四〇年)が「クロニコン」を著作せる時に存在し、ユーセビウスがバビロンの歴史を編纂するの資料として採用せられたりしなり。然るに亦氏のクロニックルも消滅に歸しぬもとベロススの著作せしバビロン史に關する事實の記錄は、多くユーセビウスのアルメニアン譯に於てのみ、之を窺ふことを得るに止まる。此アルメニアン譯は、千八百十八年に出版せられ、其主要の書たることはニーブール氏によりて初めて指摘せられたりき。吾人はコンスタンチノープルの副長老たるジオヂウス、ゼ、シンセルスの保存せるユーセビウスの著作の拔抄を所有せるを以て、原本の希臘語とアルメニアン語とを比較することを得、斯くして以てアルメニアン譯の信用せらるべき價値を判定することを得べし。

巴比倫の創世說

ベロススの記したる創世に干するバビロニアの傳說に曰く、『嘗て暗黑なる四面皆水を以て圍繞せられたる時代ありき、而して奇怪なる動物は此時代に於て發生す。此時の男子には二翼又は四翼、一面一體兩頭(女性の頭と男性の頭)を有し、男女兩性の性質を兼有し、中には又山羊の足と蹄、馬足、馬の後部の形狀人間の前身を持する男子もありて、恰も半身半馬の怪物(ヒポセンタウルス)の如きも多かり。人頭の牡牛、四體の犬の後部に魚尾あるもの。又は犬頭の馬、馬の頭と身體と魚尾とを有する人間、其他の動物亦少からざりし。猶ほ魚、蛇、其外奇異なる動物は各自外形を異にし、奇怪の形容頓になし易からざるもの多く、此等の形像は今尙ほ存してベルースの寺院にありと云ふ。一切動物の頭上には一人の婦女あり、是れ即ちオモルカ(アルメニア語にてはマルカヂヤと稱せられ、カルデアン語にてはタラッツ、希臘語にてはタラッサ「海」と呼ばるゝものなり。此等のもの總べて附着せられたる時に、ベールス來りて件の婦人を兩斷し、其半身を以て

大地を作り、他半部を以て大空を造り、斯くて該婦人中にありし一切の動物を悉く壞破せり。されど此物語は諷喩的に理解せざるべからず、如何となれば一切の者尚濕潤し而して、動物が此水中に於て生れたる時に、神即ちベルースは自らの頭を切り、神々は其頭より落つる所の血を大地と混じて人間を造出したるを以てなり。故に生れたる人間は理性に富み、神智を享くることを得たるなりけり。彼等が呼んでゼウス(アルメニアン人はアラマズト)と云へる所謂ベルースは、件の暗黑界を兩箇に切斷し、天と地とを互に分離して秩序よく世界を整頓せり。乃ち光の力を保持する能力なき動物は茲に消滅したるなりき。ベルースが不毛の沙漠と豐饒の地域とを發見しける時に、神々に命じて自己の頭を切りこれより落つる血を大地と混ぜしめて、その光の力を保持し得る人間及び動物を生出せしめぬ。斯くしてベルースは更に星辰を作り、日を作り月を作り、且つ五個の遊星を作出したりき』と。

一見すれば此バビロニアの人間及び地球の創世記ばかり荒唐不稽にして、且つ雜然たる說話殆ど他になかるべし、然れども今之を子細に點檢し來らんか、此

巴比倫創世說の點檢

中より次の如き要素を區別することを得ん。

一、宇宙の原始は暗黑と水とを以て圍繞せられたりき。即ちヘブリューに於て、暗黑は深き水面の表にありきと云へるもの是れなり。

二、天は地より分かたれたりき。即ちヘブリューに於て『水の中央に天空あらしめよ、而して此天空によりて水と水を分たしむべし、斯くて神は此天空を天と云ひ、乾きたる土地を地と呼べり』と記せるもの是れなり。

三、星辰は作られ、日月及び五遊星次で造られき。ヘブリューに於て『斯くて神は、二個の光を作り、其大なる光は日中を支配し、小なる光は夜間を支配す、神は更に星を作り給ひき』と記せるもの即ち是れに相當す。

四、諸種各樣の動物作らる。

五、人間造出せられぬ。

バビロニアン創世紀の盛に想像を逞うして誇大なる考を起したりしは、殊に各種動物の創造にあり。此等の各種動物の形體は、今尙ほベルースの寺院に於て見るを得べく、且つ英國博物館に保存せる神及び偉人の肖像と此等の記事が

調和し、一致する點あるを以て、此等有翼怪物の創生に關するバビロニアの說話が、バビロンの寺院に存する古代偶像の熟考より起因したりとの事は、蓋し蓋然性の說なりと云ふべし。されど斯の如き怪獸を最初如何に思想したりしかてふ問題は今述べたる所の創世紀の記事のみにては說明せらるべくもあらず。

然りと雖も、バビロン人が人間を表示するに、神聖なる神の智力を與へられたるものなりと云へるは、最も重要の點なりとす。バビロン人が此思想を表言するに記號的國語を以てし、而して此記號的國語は恐るべく且つ嫌惡すべきものたり、されどヘブリューの記號『即ち神は人間の鼻より生命の呼吸を吹入れ給へり』との字句も亦畢竟バビロン人と同一の思想を表示するに使用せられたる薄弱の方法たらずんばあらず。實に此思想は如何なる國語を以て云ひ表はさんとするも、損失若くは毀傷を伴はずして之を表示し得べきこと難し。

古代傳說の本來の意味を充分明白に想像せんと欲す、必ずや斯般傳說の依つて生じたる所の國語の心髓を會得せざるべからず。例へば文法的に男女の性を示すこと能はざる國語は、梵語、希臘語及び拉甸語中に必然存在せる彼の神話

亞弗利加の言語

物語を組成すること不可能たらん。亞弗利加の諸國語を熱心に研究したりしブリーク博士は、屢々この事實を主張したりき。氏が千八百六十二年に出版したる南弗に於ける諸國語の比較文典の叙言中に述べて曰く、『國語の形式は、或程度まで其國語の表言する人心の骨格組織を構成する者なりと云ふを得んか。例せば人心の最高產物即ち極めて進歩したる文明國民の宗教的思想及び感情は、此種の表示方法と密接關係を有するものなり、マクス、ミューレル氏の比較神話學の論文を見れば、此關係の如何なる程度まで密接なるかを窺知するに足りなん。此事實は更に亞弗利加の國語を研究すれば一層明白となるべし。或種族（カフィルス、ニーグロス、ポリネシアンス）の祖先崇拜に於ける動機及び星宿崇拜の起因並に他の種族（ホッテントット、北亞弗利加、セミチック、アリヤン種の國民）等の天體運行より生じたる宗教的崇拜は、各自國語の形式によりて供給せらる。男女の性を表示する國語を使用する諸國民は、高尙なる詩的感想によりて特に顯著となれり、即ち人間の作用は、此詩的感想によりて他生物の作用に移されれ、時としては無生物を生物の如く活動せしむる爲めに使用せられ、これが爲め

ズールー人の言語及び宗教

に此等の無生物等を人格化し、殆どあらゆる神話的傳說の起原をなすに至りたるなり。斯の如き人格化せしむる技能は、カフィル人の心に發達せざりき、何となればカフィルの國語は、兩性を區別する國語に於けるが如く、人間の名稱と人間以外の無生物の名稱とを同一の種類又は同一の姓に混同せしめざらん國語の形式により供給せられざるが故なり』と。

亞弗利加のズールー人の國語を充分了解せずして、該人種の思想と國語とに起りたりし創世の物語を解釋せんとせば、その結果斷として正確なる研究を遂成する能はず、單に野蠻人の宗教と雖も亦セミチック及びアリャン國民の神聖なる傳說に適用せらるべき同一の取扱を受くべきものなることを、少くとも一例によりて示さんが爲め、大に躊躇するなきを得ざるなり。予が提供せんと欲する試驗的解釋が、若しもズールー方言研究者により到底固報するに足らざるものなりと斷言せられたらん場合には、予は之が爲めに毫も驚くを要せざるべし。而して此等野蠻人の國語の研究を措きて、他に野蠻人の宗教の研究に鞏固たる基礎なしと云へる確信を失ふよりも、予は一層容易に自家の見解を捨つるに吝ならざらんとするものなり。

野蠻人の國語を正確に理解することなくして、此等野蠻人の宗教的感情を正當に理解せんとする、如何に至難の業なるかは、全く宗教思想絕無の人種ありや將たなしやてふ、古來よりの議論によりて遺憾なく說明せらるべし。宗教的感情なるものが或理由のもとに、人間の性質上、固有のものたらざることを主張する人々は、自己の學說を支持せんが爲めに旅行家及び宣教師の說を採集するに、些の困難だも感ずることなし、これに反して宗教心は人間本有のものなりとの說を主張せん者は、又斯の如き他人の說を排斥するに困難を感知せざるべし。予輩が今此兩種意見中の何れかを採用せんとするに際し、先づ決定し置かざるべからざる點は、茲に引用する所の人々の說は、果して如何なる程度の權威を有するや否やにあり。彼等說者は、實際其國語を知れりや、果して彼等は、その普通の話題につき、充分よく會話し得るのみに止らず、充分教育を受けたる人々若くは時として往々誤解に陷り易き問題に關し、腹藏なき親密なる會話をなし得るや否や。吾人は喜ぶ、一面學者なると同時に一面また哲學者たるカラウエイ博

士並にブリーク博士等の人々の報知を得ることを。野蠻人は白人の面前に於ては耻しげに默々たり、而して其神及び英雄の名稱をすら記載するに對し、迷信的嫌惡の念を有す。數年前まではズールー人は全然宗教思想なきものなりと想像せられつ。今や歐洲の僧正等は、其神學的攻究によりて侍の論爭全く閉止せり。

千八百三十五年に企擧せられたるズールー國旅行記事中に於て、ガルヂナー氏は次の問答を試みぬ。

『汝は此世界の創造者の力を認むるや。太陽の出沒、樹木の生長するを見て何者が之を作り、何者が此等を支配するやを知れるか。

ッバイ(ズールー人)は、一時深く考ふる、さまなりしが、軈て答へけらく「否、我等は知る、山川草木、日月の存在するをされど此等のものが如何にして出で來りたるかを告ぐる能はず、此等のものは唯彼自身に生じたるものなりと想像す」と。

果して然らば、汝等が戰爭に勝ち又は負けたる時、其禍福を何人の所爲に歸せんとするぞ。

ッバイ曰く、「我等不幸にして一敗地に塗れたらん時は、これ我等の父(イトンゴ)が我等を見守り給はざりしものと思考す」。

此世界を汝の父の靈(アマトンゴ)が造りたりと思惟するや。

ッバイ曰く、否。

人間の靈魂なるものが、肉體を離れて何所へ行くと、汝は思考するぞ。

ッバイ曰く、我等は語るところを知らず。

汝は其靈なるものが、永久不滅のものなりと考ふるか。

ッバイ曰く、知らず、只我等の祖先の靈魂が、我等の戰場に趣きし時に守護するものなりと信ず、されど戰爭以外の場合に於ては、斯くの如き考へ起るとなし。

かの日月を汝の思ふがまゝに支配する能はざるは汝等の知る所ならん、否汝の毛髮一筋だにも新に生ぜしむること不可能なるべし、汝は斯の如きことをなし得る力あるものありや否やにつき、何等かの考なきか。

ッバイ曰く、否、我等は斯かる力を知らず、只だ知る、我等が此等のものをなし能はざることを、而して此等の作用は、此等自身より來るものなりと信ず」と。

此問答に畫かれたる所のものは、最も宗教的暗黑の深き陰影を抽寫したるものにして、恐らく此以上のものを見出する能はざるべし。然りと雖も吾人は更にカラウエイ博士の尊敬すべき說を聞かずんばあるべからず。氏はズールー人の諸部落に永く住居して充分其國語を理解し、且つ此等の部落中に存する自信を研究したる後、そが基礎的宗教思想は、以て此等部落の老男老女中より發見し得べきことを主張せり。彼等人民は、殊に各家族、各部落の祖先を信じ、又人類全體の共同なる祖先をも信ず。祖先のことを彼等は稱して「ウンクルンクル」と云ふ、蓋しこは大々祖父の義なり然らば則ち此大々祖父の父は何者なるかと此等の種族に詰問せんに、其答は通常左の如し、「彼は蘆より分れ出でたり、彼は蘆の床より生れたり」と。

茲に於てか國語は神話を作る基礎なりとのことを云はざらんと欲するも能はざるなり。梵語にて「バルバン」と云へる語は、もと蘆、竹等の關節の意味なりしが、後には手足若くは環等を意味するに至り、更に一轉して家族の名稱に使用せられ、根本莖より出でたる嫩枝の意味となりぬ。梵語にて「バンシャ」と云へる語は、種族、家系等を意味し、元來蘆又は竹の莖の意味なりき。ズールー語にて蘆のことを「ウトランガ」と云ふ、こを嚴格に云はゞ、もと嫩枝を芽むことを得る蘆の意味にぞありし。此等の語は、生物の起源、人類の創生を說明する時に使用せらるゝ比喩詞なりとす。即ち父は其生みたる子孫の「ウトランガ」にして、此等の子孫は、その父なる根本の莖より分出したるものなり。カラウエイ博士述べて曰く、『古代の人民に用ゐられたる國語は今なほ其面影を傳へて後代に殘存すれども而もその意味に至りては全然異なれるものなり』。と

ズールーの神話に關し、予は次の如く解釋せんとす。ズールー人は總べて一本莖の蘆より出でたる嫩枝なりと思考したりき、是れ宛として梵語にて蘆のことを解釋せるに異なるなし。故に彼等は總べて皆一人の父より生出したる子孫にして、一種族より分出したる人員なりと考へたるなり。蘆のことを「ウトランガ」と云ひて、この「ウトランガ」なる語を人格化し、斯くして以て人類の神話的祖先は即ち此「ウトランガ」なりと思はるゝに至れるなりけり。「ウンクルンクル」が最初の男性たりし種族の中に於ては、「ウトランガ」は最初の女性となりたりしなり。

各國民の祖先の要求

各國民、各種族、各家族は、共に皆早晩各自の祖先を要求す。比較的近代に於てすら、ブリトン人即ち大英國の住民中には一人の祖先なくして可ならんやとの思想行はれ、ブルーツスより降下せる子孫なりとの自信を抱持するに至りぬ。又ヘレネス人即ちヘラス人の舊古住民は、ヘレンより降れる子孫なりてふ自信を懷抱したりき。ヘレネスなる名稱は、もと嚴格にテッサリーに住せる一種族に限られたる語なりしも、後には全國民の名稱となり、エーオリアン人の祖先たるエーオロス、ドリアン人の祖先たるドロス、アケーオス及びイオン人の祖先たるクスートス等は、總べて皆ヘレンより出でたる子孫なりと認めらるゝに會せり。以上述べたる希臘語は、在昔希臘に於て或部落の用ゐたる語なりしことを注意して思考せんには、以上の事實自ら明了となるべし。

希臘人の祖先

されど然らば、何人が希臘人の祖先たるヘレンの父なりしか、又當時の希臘人の智力によれば、必ずや何人が全人類の父なりしかとの疑問直下に生起し來るべし。若しヘレンが全人類の祖先たり、最初の人間たりしとせば、彼は正しく最上の神即ちゼウスの子たるに違あるべからず、茲に於てかヘレンは、ゼウスの子なりと唱出せる有名の學者少からざりしなり。然るに他の學者等は又これと異なりたる解釋を執れり。希臘に於ては其他の諸國に於けるが如く一の傳說あり、昔者大洪水ありて、之が爲めに一切の生物悉く滅却し、僅かに小舟に乘じて逃れたる二三の人々のみ此世に殘存するを得、而して此二三の逃れ得たる人々は、件の大洪水の引終りたる後、再び此世に住したりきと。斯の如くして救助されたる人は、希臘の傳說の如くば、デユーカリオンと稱するものにして、これプロメチユースの子、セッサリーの支配者にぞありける。プロメチユースはデユーカリオンに告げて曰く、『汝は一艘の船と食料とを具へ置けよ、而して洪水の起り來る時には、これにて逃るべし』と。デユーカリオンは乃ち此船に乘りて、父の敎の如く、自己と妻との唯二人逃れ去りたるなり、妻は則ちピラと呼べるものなりき。

以上の物語によれば、希臘人は人間の祖先としてヘレン及びデユーカリオンの二人を有せるに似たり、然れども斯からん問題を解決せんには、ヘレンはデユーカリオンの子なりと說明するの外、他に道あるなけん。吾人が果して古

代の國語を話し、且つ考ふるを得ば、以上予の述べたる説明は、悉く是れ明了にして、その誤りなきを知るべし。

予は次に如何にしてデユーカリオンが全人類の父となりたるかを説明せん。デユーカリオンと其妻ピラとは、各自背に石(又は地球の骨)を投じ、其石嚏て變じて男女となりぬ。これ既に一の奇蹟なり。若しピラがデユーカリオンの妻たりしならば、ヘレンは彼等の間に産みたる子なりと云ふ、必ずしも排斥し去るべきことにあらざらん。吾人此物語の説話せらるゝ希臘語を研究せんか、予の説明は明了となるべし。ピラとは赤色の意味にして、本來地球を指して云ひたる語なり。ヘレネスは希臘人の住したる土地より生れたる土着の人民なりと信ぜられ、ピラ即ち「赤き地球」は、もと彼等の母と稱せられ、即ちヘレネス人の母なるが故に、ピラはヘレネスの父たるデユーカリオンの妻たらざるべからざる、論理の必然にあらずや。然れどもデユーカリオンは、もと印度のマヌの如く、唯一人大洪水より逃れたる人なりと信ぜられたりしを以て、如何にして彼は妻なきに人民の父となり、子孫を生出し得たりしかとの疑問起らざるを得ざらん。斯の

古代傳説研究の益

如き疑問の起るあるを以て、彼が自己の背後に石を投じ、而して此等の石が地球上の新住民となりたりとの奇談勢ひ起らざるを得ざりしなり。希臘語にて人民のことを Λαός (ラオス) と云ひ、石のことを Λᾶας (ラース) と云ふ、故にデユーカリオンの人民即ち Λαός は何所より生出したりしやてふことを兒童の尋ねたる時に際しては、彼等人民は石即ち Λᾶας より生出したりと答ふるに優して自然的なる答辭恐らく無かるべし。

予は此外猶ほ他にこれと類似せる例話を舉示することを得べし。凡そ此等の神話的物語は殆ど無意味のものなるが如きも、その中には大に意味の包含せられあるものにして、現今猶未だ意義不明の裡に埋沒せられつゝある此等の傳説すらも、此等の國語が其傳説に覆ひたる外被を剝奪し去りたる時には、更に簡單明了なる意味を有すべく、時としては極めて美はしき性質をすら具しあるを見るべし。古代の神聖なる傳説の最も熱心なる希望は何ぞと云へる事實を研究するを得ば、以て吾人は古代の傳説につき、大に學ぶ所あるべく決して損失する所なけん。

ヘフエーストスが其斧を以てゼウスの頭を割り、アセーネが夫れより武裝して生れ出てたりてふ物　を見る時は、吾人は玆に此未熟なる想像の背面に潜在せる事實を察知し得べし。此物語の中に表はれたるゼウスは、天空にして其額は東を指しヘフエーストスは青年を指し、尙ほ未だ東天に昇らざる太陽を意味し、而してアセーネは、大空の娘たる曉天を指し、總べて此等は、ゼウスの光頭より生れ出づるものたり。此一場の物語を考量するも益する所鮮少ならずして、損失とてはなかるべし。

Γλαυκῶπις（グラウコーピス）	梟の如き眼を持てり。
Παρθένος（パルセノス）	處女の如く純白なり。
Χρύσεος（クルセス）	黄金色
Ἀκρία（アクリア）	山頂を照し、アセンの都にある美しき拜殿を照らす。
Παλλάς（パルラス）	光箭を旋轉す。
Ἀλέα（アレア）	朝晨の溫暖。
Προμαχος（プロマコス）	夜と晝との戰爭に於ける大將軍

Πανόπτλος（パノプロス）	光の甲冑を以て間隙なく身を堅め、夜の暗黑を放逐して、人民を其輝々たる生命と輝々たる思想及び輝々たる企圖とに醒覺す。

希臘人がアポロン及びアルテミスがニオベの小供十二人を殺したることを信ぜずしてこのニオベなる語は、もと雪又は冬のことを云ひ、而して春の神即ちアポロン及びアルテミスが、年毎に美しく輝く雪の可憐なる小供等を板箭のもとに殺害せざるべからずとのことを思ひ設けたる外に、何等深き考を古代の詩人は有せざりきと云へることを是認したとせば、則以て希臘人が神々を尊信する念を減少したりとの確證となすに足らざるべし。アリヤン族の分離の前、梵語、希臘語又は拉甸語の存在せし前、ベーダの神々が、尙ほ未だ崇拜せられざる以前、ゼウスの神殿がドゾナの神聖なる樫の木の間に存せし以前に當り、既に已に一の最高なるデイチイ（上帝）は發見せられ、我等人類の祖先によりて此神の名は讃美され祈求せられたりしなり。此神を稱するに、或はヂアウス、ゼウス又はヂユピター、チイル等を以てせり、蓋し此等の名稱たる、何れも光明、空豈等を意味するも

古代言語と宗教との比較の得益

のにして、此等の意味を表示するに此名稱より勝れたる好辭他になかりき。この唯一最高の神を既に四千年若くは五千年の夙昔に認めたる事實を、後世の吾人が之を推知するを得る、豈無用の研究なりとせんや。

吾人の信ずる宗教に關する古代國語を比較的に研究する結果にして、若し之を古代の希臘、印度の化石し去れる國語の詳細なる解釋より生ずるが如き研究の結果に比し、毫も不良なる成績の擧示せられざる限りは、吾人茲に何等懷疑の要なけん。何ぞや、吾人は此古代研究にして新知識を得ることそすれ、決して損失を招致する所なければなり。古代宗教は恰かも貴重なる舊古の寶玉の如く、年所を經由して積着せる塵埃を拂拭し去らんには、そが本來固有せし純白の光輝粲然として發揚するを見ん。而して其宗教中に抱容せられたる形像は實に人類の父祖、世界全國民の父祖の形像なりとす。吾人にして若し猶太語のみならず、全世界各種族の國語にて記されたる宗教的表題を今再び讀破するを得んには、その表題たるや必ずや「神」てふ語なるべし、實に此語は、深く人心の底に潛在する思想の發露せるものに他ならざるなり。

第一章　附錄

アクバー大帝は、世界宗教の比較研究をなせる最先登者なりとして信ぜらる、されば次に擧ぐる所の「アイン、イ、アクバリ」、「タワリクのムンタカブ」、「ダビスターン」等より拔萃したるもの、趣味甚だ多かるべし。次の記事は、ブロックマン博士が新に譯出し、カルカツタにて出版したる「アイン、イアクバリ」の拔萃にして、印度圖書館に寄贈されたる最貴重の書籍たり。吾人が東洋史中に於て、なほ現存せる其皇帝に關する意見を發表する兩々相反對せる證人、殊に同時代の證人を對照せしむるの機會に遇す、これ實に偶然のことならずや。即ち次に採錄するが如きアクバー大帝の宗教的意見が、反對の考を有せる同代人士によりて傳へらるゝが如きことを見るは、東洋史上稀に見る所也とす。「アイン、イ、アクバリ」の著者アブルファズルは、アクバー大帝の國老として且つ同帝の親友なりき。又バダーオニーは、アブルファズルの公敵にして、大帝の宗教觀念と正反對の意見を抱持し、其大帝なるの故を以て毫も恐るゝ所なく謗々の主張を敢てしたりき。バダ

ーオニー著書、タワリクのムンタカブ」は秘密に保存せられ、ヂャハーンギールの治世まで世に公にせられざりしなり。

予は先づ、次にアブルファズルの著作中より拔萃したるものを紹介せんとす。

アイシ、七七。

人民の精神的指導者たる皇帝。

智力を授け事物を創造し給ひし神は、人類を作出するに己が嗜好のまゝにし、而して或者には理解力を與へ、又或者には偏狹なる性質を賦し給ふ。故に人間の中に存する反對傾向の起源茲に生じ、或種の人は宗教に傾き、或人は又世俗的思想に傾く。此等の兩派は、各自相異れる指導者(豫言者は寺院の長、帝者は國家の長たり)を撰定す。而して一方が他方を排斥せんと試むるの結果、茲に不和を生ずるなり。斯くてぞ人智の愚なる所以、顯然として認められ、相互の尊敬慈惠等の美德極めて稀少なることも亦明白に認めらるゝに至る。

さはれ人間の宗教的及び世俗的傾向の間に、果して共通なるものなきや如何。世には隱れたる場所より顯れ出づる同一の喜ばしき「美觀」なきや否や。夫れ寛大公明は神が地上に擴布し給ひし絨氈にして、そが美麗なる色は神が之に色彩せる俗界の美觀たり。

走者も被走者も、實際に於ては一人のみ。

愚なる人は婆羅門と其偶像と相違すと云ふ。然れども此家の中に唯一の燈明あり、今此燈光をもて自己の周邊を廻視すれば、光明普ねく自己の全身に觸着せん。

或者思考すらく、神を崇拜せんには、自己の感情を抑制せざる可らずと。又或者は思惟す、國民の運命を監視するは、是れ自家の訓練修養なりと實にや千差萬別なる多數人の宗教は、必然唯一の思想に密着して作らる、彼等は自己を自身にて判斷する場合に不適當なること、且つ遲鈍なることを以て却て幸福なりとなす。さあれ一たび反省の時來りて獨斷の弊を除き去らば、茲に宗教的盲目の網目は裂け、調和的光榮の燦然たるを見ん。

されど斯の如き智慧の光明は、總べての家を輝かす者にあらず、何人も皆

斯の如き智力を有するものにあらず。即ち或人は高尚なる思想を有すれども、或人は又他より狂熱信者と呼ばれんを恐るゝが爲めに、努めて沈靜寡默を裝ふものあるべし。充分なる勇氣を鼓舞し、而して自己の高尚なる思想並に敬虔なる愚論を、臆面なく發表するものあれば、人々は之を呼んで狂なりとなし、共に語るに足らざるものとなして排斥するならん。又意地惡るき人々は、徒らにも彼を目して異教徒となし、狂信者なりとして、之を殺害せんとの心を起すものなきにあらざるべし。

都合よき境遇のもとに、或國民が其眞理を如何に崇拜すべきかを知るの時期到來すれば、其人民は自ら其帝王を尊信し、帝王は是れ俗界と出世間界との指導者なりと思考するに會せん、何が故ぞ然る、帝王は常に人間を超脫したる神智的光明を有し、その爭鬪者をば此光明により排斥し去るを得べければなり。茲を以て帝王は往々にして無數なる事物萬有の中に、調和せる統一的素要を認め、時に又夫れと反對に單一無雜の外觀を呈する者の中に、無量無邊の事物を認むることを得べし、他なし帝王は王位に坐して人民の一喜一憂に對し、等しく共に心を傾くるものなるを以てなり。

予が今茲に述べたる事實は、正しく現代帝者の事實と契合す、而して予の此著作は即ち該事實の證明たり。

世にも巧みに未來の事態を豫言する人々は、帝王の誕生せし時に、夙くも件の事實を洞見し、而して此秘密を認知せる總べての人々と共に喜んで此事實の發生せんことを希望したりき。されど陛下には、恰かも自身に此等の希望に副はざる門外漢の如く、暫し面服を纏はれたりけり、これ實に陛下の賢なるによる、然しながら神の意志は人力の能く抗すべき所にあらず、陛下は當時の豫言を聞きし時に、始めは殆ど驚倒せられんばかりなりしも、何時までか自己の希望を實行せでや止むべき。世人の評判は日を追ふて益々盛り行くものから、さすがの陛下も英志遂に默だしがたくぞなりし。今や陛下は、實に國民の智的指導者となり、此義務を實行することは、纏て神を喜ばしむるの方便たるを了知し給へり。茲に於てか陛下は、正道導致の門を開き、眞理を渴仰する道者に對し、其渴を醫せんとは決心し給ひぬ。

爾かく陛下が、人民の願を容れたるにもせよ、又は自己の門弟たらんとする人民の乞を卻けられたるにもせよ、陛下は常は人民を導致して幸福の樂土に遊適せしめられたりしなり。陛下の智識の光明に照輝せられて、熱心なる研究者は、廓然開悟し、四十日間或は斷食し、或は祈禱してだに、猶且つ達し得ざりし境涯に到着するを得たりき。此世を逃避せる人々、サンナーシース、フォーギース、セブラース、クワランダルス、バキームス、シュフィース等の人々及び世俗の業務を執れる人々、兵士、商賈、職工、農夫等の人々も、皆共に留意して修身向上の道に向ひ、爲に彼等の智力頓に增加しけるとなん。老若男女を問はず、朋友たると未知者たるとに論なく、土地の近きも遠きも、おしなべて陛下に叩頭低身するを以て、そが一切の困難を免るゝ方便となし、而して彼等の向上的希望を滿足せしめんが爲めに、陛下に滿腔の誠意を表し頭を垂れつ。又或人々は朝廷に群集せる人々を避けんが爲めに、殊更に朝廷より程遠き家にありて密かに其誓願を成就し、幸福なる賞讃を蒙りつゝ生涯を終りたりき。陛下が地方の狀況を巡視せんが爲め、朝廷を離れて出

御し給ふとき、他の王國を征服し給ふとき、遊獵に出給ふ時などには何れの村落、何れの都府に至るまでも、老幼男女悉く手に誓の供物を捧げ、口に祈を捧げつゝ、頭を地に摺付けて、そが受けたる精神的助力を感謝し、其誓の功驗を賞讃しつゝ集り來らざる所とては絕えてなかりける。又或群集は永續の幸福を求めんとて、正しき心を持たんとて、如何にせば最良に働き得るかを知らんとて、身體の健全ならんが爲めに、智力の進まんが爲めに、子の生れんが爲めに、分離せる朋友の再び交誼を締結せんが爲めに、長命せんが爲めに、長者たらんが爲めに、昇位せんが爲めに、其他種々なる事を希はんが爲めに陛下を煩はせり。陛下は其人相應なる滿足の答を各自に與へ、そが宗教的煩悶に對し、各自の心を醫療し給ひき。かの水杯を持ち來りて、其上に陛下の呼吸を觸れしめんことを願ひ奉らぬもの一日としてなく、陛下は又その幸福なる兩手に杯をとり、世界を輝かす太陽の光線に之を照らし、斯くして以て求願者の希望を滿足せしめんと勸められぬ、望の途絕へたる憐むべき病者の、最早や名醫の匙を投げたるものも、陛下の御恩惠によりて平癒快

全せり。

次に掲ぐるものは、更に著るしき場合なりとす。心狹き遁世者あり、自己の舌を切りて宮殿に之を投じ、且つ呼んで曰く、「予が現時心中に思惟する所の幸福なる思想が、神によりて自己の胸裡に銘せらるゝなれば予の舌は必ずや平癒してもとの如くなるべし、故如何とならば、予の信仰の熱誠なる、確かに以て予を幸福なる結果に招導すべければなり」と。此人の願望其意の如く叶ひたる後、その日は終りたりき。

陛下の宗教的智識と信仰とを能く知れる人々は、一見甚だ顯著なるに庶幾き陛下の或習慣を憧憬するも、更に敢て稀有の感なけん、又陛下の慈惠に富み、正義を愛し給ふことを知れる人々は、此等の行爲が陛下にとりて殊に珍奇の行爲なりとも思はざるべし。實に陛下は精神寛大に在せども、自己の行爲に對しては、絶へず不滿足の感を抱き、尙ほ完全なりと思考し給はず、自ら世界の莊嚴なる裝飾たり、指導たることを、毫も感知し給はざるが如し。故に來りて陛下の門弟たらんとする人々をば常に卻けて容れ給はず、且つ

常に宣すらく、「朕自身すら絶へず指導せられつゝある身の、如何でか他を指導し得べきぞ、朕には諸人を敎導するの謂なきなり」と。然れども若し或熱心なる新來の信者ありて、其額面に熱誠なる目的の眞狀を呈し、日々陛下に懇願するものあるときには、陛下は之を許して、日曜日の太陽將に最高頂點に達し、煌々たる光輝を下界に放射するの時刻を計り、之を引見して敎を垂れ給ひたりけり。陛下が新來の信者の願を許して門弟とするには、這般嚴峻なる拒絶を行ひ給へるにも拘らず、日々陛下に乞ふ信者多く、爲めに漸次信仰の衣を肩に纏ひ、幸福を得るの手段として新信仰に改宗せんとするもの、幾千人の多き、各種類の人間を網羅するに至りぬ。

永久存續すべき幸福を授け給ふ日曜日には、新來の門弟手に帽を携へ、頭を陛下の足脚に置き、歸敬して陛下に順ひ奉れり。手に帽を持ち、頭を垂るることは是れ一の記號にして、その意、幸福と善星の援助とに指導せられ、以て新來の門弟が、衆惡の根本たる不信、私慾を放棄し、心を一にして歸命し、永久不斷の生命を得るの方便を求めんが爲めに來れることを表示せる者な

り。神より選ばれ給へる一人なる陛下は、新來の門弟の尊敬的態度に對して恩惠の御手を伸ばし、求道者を起して其頭上に帽を置き、以て此信者が純粹なる宗教的の人なることを證明し、假裝的生活より實際的生活を爲さしむ。陛下は此新來の信者に「シャシュト」目的の意、又輪の意を賦與し給ふ、この「シャシュト」の上には、陛下の金言たる「アラーファクバー」を刻めり、是れ新來の信者に「純粹なる「シャシュト」と純粹なる觀察とは決して誤まるものにあらず」と云へる眞理を敎ふるものなり。

陛下の日常の習慣を觀察して其傍に侍せる人々は、之を見習ひ、宜しきに應じて自己の行爲を正したり、且つ陛下の與へ給ひし賢明なる忠告に從ひ、明々地に自己の希望を開陳するを得たりき。彼等は、神聖なる恩惠の泉により渴を醫することを得、自己の智慧及び行爲の動機にも革新の光明を得るに會しぬ。又或者は自家の才能に從ひて、各自に忠告を受け、智力を增進したりける。

蓋し陛下が智慧を敎授し給ふ所の方法を、遺憾なく物語らんは容易のわざに非ずと雖も、陛下は則ち此方法を以て危險なる疾病を癒し、激烈なる患苦に治療を施し給へるなり。予にして若し十分なる閑暇あらんか、乃ち此問題に關し、更に別冊をものして、以て世に示さんことを期す。

アブルファズルの著書中に、又次の如き記事あり。（第一卷アイン、一八、四八ページ）

陛下宣はく、火及び光を崇拜するは、正にこれ宗教的義務にして、且つ神聖なる讃美なりと。實に世の愚者は、この拜火のことを以て全能の神を忘れたるものなりと思惟せり、然れども少しく心ある人は、この事の可なる所以を了す、何となれば吾人生活の根源たり、生命持續の要素たるものを尊敬する、毫も不正當なりと云はるべき謂なきを以てなり。若しも光と火とにして全然存在せざらんには、以て食物と藥劑とを得るの道なかるべく、且つ目ありと雖も光を見るの力なく、換言すれば、その力ありと雖も、光なくんば目ありて目なきに等しく、更に目の効用あるなけん。太陽の光は、實に是れ神の主權の炬火なりと云ふべし。

更に同書の一五四頁を見れば、

陛下は熱心に神を尊敬し、眞理を求めんとして、內部外部の修養に心を委ね、時として當代分派の人々の罵詈讒謗の聲を絕滅せんと欲し公衆と共に禮拜をなせり。されど大帝の生涯の大目的は、實に健全なる道德を樹立し聖者賢哲も耻ぢんばかりの莊嚴なる崇高の念を養ひ、滔々たる俗流異教徒の根底を拔除し去らんとするにありしなり。

次に掲ぐる所は、如何に同帝が文學に熱心なりしかを示すもの、同書一〇三頁を參照せよ。

陛下の圖書は之を分ちて數部とす、散文書、詩集及び印度、波斯、希臘、カシュミラン、亞剌比亞等の諸國語に飜譯せられたる經典等即ち是れ。陛下は常に經驗に富める學者を招聘し、其面前に於て書を講ぜしめ、熱心に且つ趣味を以て之を聽講せられつ。

言語學者は陛下の命によりて、絕えず印度、希臘、亞剌比亞、波斯等の書籍を他の國語に飜譯せり。斯くの如くして「ジク、イ、ヂャヂード、イ、ミールザーイー」の一部は、「シラーズのアミール、ブアッラの監督の下に飜譯せられ、又「キシュンジョーシー」、「ガンガーダル」、「モヘッシュ、マハーナンド」等は著者の通譯に由りて梵語より波斯語に譯出せられぬ。印度の古書に屬する「マハーバーラット」は、又印度語より波斯語に飜譯せられ、之を監督するにナギーブ、カーン、バダーオンのマウラーナー、アブドル、カーヂル及びタネーサルのシャイクサルターン等を以てしたり。此等の人々は又「ラーマーヤン」を波斯語に飜譯せり。この書はラームチャン・ドラの生活を記せる印度の古書なるも、而も大に哲學的趣味に富めるものとす。シルヒンドのハーヂー、イブラーヒーム、四大聖典の一たる「アタルバン」を梵語より波斯語に飜譯したりと、これ印度人の說く所なり。數學に關する「リーラヴチー」は實に印度の數學者の著作したる最高名の書籍の一にして、予の長兄シャイク、アブドル、ファイズ、イ、アイジー、と呼ばるゝ人の手にて波斯語に譯せられ、元の印度語の原形を失ひたりき。陛下の命によりて、グヂャラートのムカンマル、カーンは、星學の有名なる書「ターヂャク」を波斯語に譯出せり。殆ど四千年以上の沿革を有

するカシユミールの歴史は、シャーハーバードのマウラナ、シャー、ムハマド
と云へる人によりてカシユミール語より波斯語に飜ぜらる(此書は其後バ
ダオニーが一層平易なる文體に訂正せり)。クリシユナの生活を記せる「ハリ
バンス」なる書は、マウラーナ、シエリーによりて波斯語に譯せられたり。此
書の著者は更に陛下の命を受けて「カリーラ、ダムナ」の新譯を試み、之を「アヤ
ール、ダニシユ」の名稱を以て出版せり。ナルとダマンとの愛の印度の話は、
予の兄弟シャイク、アイジー之を飜譯したりき。

予は猶ほバダーオニーのものせるアブルファズルと反對なる記事を茲に紹
介せざるを得ず、而も此記事は、アクバー大帝の性質を讃歎して記載したるアブ
ルファズルの記事を承認したらん如きふしなきにあらず。バダーオニー、アブ
ルファズルのことを語りて曰く、

彼はシャバーヒースの光をともし、よつて以て嘗て或人が自家の爲すべ
き所を知らざりしが故に自ら白晝に光を擧げつゝ、あらゆる宗派に反對せ
んとして、遂に所謂反對するものは勢力を得と云へる話を說明し、且つあら

ゆる宗派に從ひ反對せんとして、其胸の周圍に堅固不易の帶を結びたること
とありきてふ物語を說明せんとしたり。彼は皇帝の前にコラーンの細釋
なる「アヤット、ウルクルシー」の註釋を捧げき。世人の傳ふるが如くんば、此
書は彼の父のものせる所のものなりしとぞ、されど彼は、これが爲めに大に
皇帝に賞讃せられたり。「タフシール、イ、アクバリー」(アクバーの註釋)なる書
中に記されたる文字は、當代に持映され、その文章は「九八三年」なる年代を殊
更に劃したりき。皇帝は時に此書を見て大に喜び斯くてアブルファズル
は頗ぶる皇帝の信任する所となれり。

彼の好んで論議し、且つ其堅固不拔なる意志を主張する理由は、實に次に
述ぶる所の如し。蓋し宗教的革新を敢てせんとするものを殺戮し、若くは
捕捉せんとするは當時の習慣なりしが此時に當りて、シャイク、アブヅンナ
ビー、及びマクヅーム、ウル、ムルク其他在朝有識の士は、異口同音、皇帝に奏問
すらく、「シャイク、ムバーリクも亦「マーヂー」なりと宣言するが故に革新者の
一人なり」と、茲に於てか彼一人のみならず、他の人々も共に連累捕縛せられ

たりき。彼を許すとのと傳へらるゝや、そが在朝の人々は警官をして彼を捕縛せしめ、皇帝の前に連れ行かしめんとせり。然るにシャイクが二子と共に身を隱したるとを知り、彼等はシャイクの祈禱室にある演臺を破却したり。初めシャイクは、名聲當時に隆々たりしファトプルのサリーム、イ、チシュチーの許に身を寄せ、仲裁の勞を執られんことを乞へり。然れどもシャイク、サリームは彼に送るに金を以てし、且つ告げて曰く、「汝はグヂュラートに逃るゝ方一厨好都合ならん」と。サリームが、自己の爲めに周旋の勞を執り呉れざるを知るや、シャイク、ムバーリクは、アクバーの乳兄弟たるミールザー、アジーズ、コカーにたよりぬ。ミルザは、シャイクの有識なること、窮困なること、二子の優秀俊拔の士なること、且つシャイクの信用するに足るものなることを皇帝に奏聞し、加ふるにシャイクが決然として土地の贈物を受けざりしことを奏上し、そのシャイクが何故ぞ斯くも朝廷より迫害を蒙るやの理由を解するに苦むことを訴へたり。茲に於てか皇帝は、遂にシャイクを死罪に問はんとの考へを全然放棄したりき。暫しが程に更に好

箇なる機會は到來しぬ。アブルファズルが盛に皇帝と談笑を交へ、只管阿諛を呈せるの時に、彼は最も嫌ふべく耻づべき方法を以て、多少讃稱に價する宗派を罵倒し、且つ經驗に富める人士を根絶せんとして、神に仕ふる人々、殊に敬虔なる、賴りなき殆ど孤兒とも云ふべきシャイクの如き人々を絶滅せんとする黨與の味方をなせり。

次に皇帝の宮殿に於ける宗教的、哲學的爭論の起源に關するバダーオニーの說話を述べん。

回々教紀元九百八十三年にアクバー大帝は禮拜堂を夥多建築せしめたりき。其理由は以下述ぶる所の如し。九百八十三年より以前數年の間皇帝は引續き顯著にして且つ國運を左右すべき重要なる戰爭に大勝を博せり、皇帝は日一日その領土を擴張し、國運亦日一日に隆盛を來し、全領土中誰一人の皇帝に反對を試むるものなきに至りぬ。今や陛下は少しく政務に餘暇を得て、ムイーニャ派の門弟隱遁者等と更に密接關係を締着するとなり神の語即ち「コラーン」及び豫言者の言「ハヂース」即ち傳說を討議研究す

るに、多くの時間を費せりき。シューフィズムの疑問、科學の研究、哲學及び法律の研究等は當時盛に行はれ、陛下は終夜神を思ふて　慮し、絶へず「ヤー、フー」及び「ヤー、ハーヂー」(ヤー、フーはおゝ神よ、ヤー、フーヂーは、おゝ指導者よの意)なる語を唱へ給へり。而して陛下の一念は、眞に幸福を與へ給ふ天部を尊敬するの心に滿てりき。過去の成効を感謝するの餘り、獨り　かに宮殿の近傍なる一寂所に建つ古建築物の扁平なる大石上に膝坐し、仰頭以て早朝の幸福を祈らるゝこと、毎朝に亘ることあり。

毎木曜日の夜招集せられたる會議には「サイイッド」「シャイクス」「ウラマース　公等順次に列席す。然るに此等の人々が、その席順を爭ふの場合には陛下は太公の東部「サイイッド」の西部「ウラマース」の南部「シャイクス」の北部に坐するとを命じ給ふ。斯くて皇帝は議場を巡回して各自の意見を徴せらる。或夜議論風發、議場爲めに紛然として「ウラマース」の頸の血管激動したりきとぞ。陛下は彼等の粗野なる行動を見て逆鱗甚だしく、乃ち予に告げて宣はく、「朕は將來粗野なる行爲なく、又恐論を吐かせざるやう、「ウラマース」のものは將來一人と雖も列席せしめず、此議場を退去せしむべし」と。予が何を云ひたるかを、俄然として陛下の諮詢し給ひし時に、予は靜かにアーシャフ、カーンに云へりき、「若し夫れ予にして此命令を實行せんか、「ウラマース」の大部分のものは、概して此議席を退去せざるべからざるに至らん」と。陛下は予の答を聞きて大に滿足し、其側に侍せる人々に向ひ、予の言を述べ給ひたり。

此會議の開かれける時に、嘗て陛下の諮詢し給ひける「一人の男子が法律上自由の身に生れたる幾人の婦人と「ニカー」によりて結婚することを許さるゝか」と。法律家は答へぬ、「四人は豫言者によりて制限せられたる故なり」と。茲に於てか皇帝は、朕は結婚年齢に達せし頃ひとり四人の婦人を娶りたりしに止らず、自由民及び奴隷の婦人の多數と關係を結びたりしが、今ぞ朕はこれを制限するに、如何の法律を以てせば可なるべきかを知らんとす」と述べ給へり。斯くてシャイク、アブヅンナビーが嘗て皇帝にムヂュタヒッドの一人、九人の婦女を有せりと述べたることを語り給ひし時に、列席者は

各自皆その意見を申出てぬ。席にありしウラマースの或者は、かの暗指せられたるムヂユタヒッドとはイブン、アビーライラなりしことを答へ、又彼等は飜譯されたる「コラーン」の文句よりして、或人は十八人をも娶ることを許したりと答へたり、コラーンの文句に曰く、「汝が好むまゝに婦人と結婚せよ、二と二、三と三、四と四と、されど此文句は不正當なり。乃ち陛下はシャイクアブヅシナビーの許に使を遣はし給ふ、彼答て曰く、「予は陛下に答へんとす、斯く議論に相違ある所以のもの、法律家の間に論議せらるゝの點に存せり。然れども予は不正當なる結婚を正當となさんとしてファトワを與へざりきと。」此答は大に陛下の心を苦しめぬ。曰く、「シャイクは今朕に物語る所と大に異なることを、當時朕に告げたり」と。陛下は決して之を忘れ給はざりしなり。

此點に關し甚だしき議論を交へたるの後、ウラマースは此問題に關する各傳說を蒐集し、先づムター（ニカーによらずして）によりて、一人の男子が自己の好む限りの婦人と結婚され得べきことを判決し、次にムターの婚姻は、イマーム、マーリクによりて許可せられたることを判定せり。世人の熟知するが如くシーアースは、ムター婚により生れたる子供等を愛せしこと、ニカー婚の婦人の生みたる子供を愛するよりも更に甚深なりき。これ恰かもスンニース及びアール、イヂャマートと正反對の習慣なりとす。

予は更にムター婚なるものを研究し、「ナヂャートゥルラシード」と名づくる自著を讀者に紹介せんと欲す。ナキープ、カーンは、イマーム、マーリクの「ムワッタ」の復寫を持來り、該書に存する傳說を擧示して之に反對せり、此傳說はムター婚の法律上正當なることに反對する證據としてイマームの引證したるものなり。

カージー、ヤクープ、シャイク、アブルファアズル、ハーヂー、イブラーヒーム其他の人々は、或夜アヌープタラーオの地の近傍なる家室に於て皇帝に謁見せり。シャイク、アブルファアズルは反對者として擯ばれ、自家の父シャイク、ムバーリクの蒐集したるムター婚に關する數種の傳說を皇帝に奏聞したり。陛下は予に意見を徵せらる。則ち答て曰く、「蓋し矛盾せる數種の傳說及び宗派的

習慣より歸納せらるべき議論は正に次の如し。イマーム、マーリク、とシーアースとはムター婚を法律上正當なりと認むる上に於て一致すイマームシャーフキーと大イマーム(ハニーフアー)とは之を不當なりとせり。されど若し時ありてマーリキー派のカージーがムター婚は正當なりと判斷せば、シャーフキース又はハナフキースにすら此ムター婚は普通の信仰に從ひ正當となるべし。此問題に關する他の人々の意見は概して恐論ならざるなし」と。此議論は甚く皇帝を喜ばしめぬ。時に皇帝の宣すらく、「朕は其人の前に我妻に關する此問題を提供せんとするカージーとして、マーリキー、カージー、フサイン、アラブを指名す。而して汝ヤクーブは今日より停職せしむ」と。此命令は直ちに行はれ、カージー、ハサンは即時ムター婚を正當たらしむる命令を與へたりき。

マクヅーム、ウル、ムルク、カージー、ヤクーブ其他老練の法律家等は、此等の命令を聞き一同悲哀の顏貌を呈しぬ。是れ正に彼等が隆々の名聲漸く衰へんとする序幕にぞありける。

此結果や如何に、即ち此會議の終れる後、ムルターン、ノ、マウラーナー、ヂャラールヂーンとなん呼べる甚だ有識の士は、アーグラーより「ブアトブールシークリー」に命ぜられ、王國の「カージー」に指命せらる。而してカージー、ヤクーブは、地方の「カージー」として、ガウルに送られぬ。

此日より異見紛糾、反對百出、陛下が帝國のムヂユタヒッドにせ任命らるゝまでの間停止する所を見ざりき。

この九百八十三年の間、ハキーム、アブルフアト、ハキーム、フマーユーン(其後名をフマーユーン、クリーと變じ、又ハキーム、フマームと變ぜり)及びヌールヂーン、(カラーリーなる名の下に普ねく知らるゝ詩人)等來れり。彼等はもと兄弟にしての　傍ギーラーンの地より來れるなり。舉動態度の、能く人目を引くに足る長兄は、暫して勢力を皇帝に得るに至り、阿諛以て皇帝に仕へ、其宗教的思想を變更せばやとの機會を捕捉せんと勉めぬ。斯くして彼は、暫しの間にアクバーの最も親密なる朋友たるに至りたりしな

其後間もなく、波斯よりヤズトのムラーム、ハマッド來れり氏はヤジーヂーなる綽名を有し、皇帝に謁見して公然シャハーバーを罵詈し始めて(シャハーバーとは十二のイマームスを除きムハマッドを知れる人々なり)そのシャハーバーに關する奇妙なる珍話を試み、極力皇帝をシーアーたらしめんと昂めたりき。されど直ちにビールバー、シャイク、アブルフアズル、バキーム、アブルフアトの爲めに退けられき、此等の人々は都合よく皇帝を回々教より改宗せしめ而して皇帝をして感應、豫言者たる事、豫言者及び聖者の奇蹟を排斥し、法律までも顧みざるに至らしめしが故に、其後は予は其集會に列すること能はざりき。

同時に皇帝は、カージー、ジャラールヂーン及び其他のウラマースに命じて、コラーンの註釋をなさしむ、此問題は甚くも彼等の間に爭論を惹起するの基とはなりぬ。

其後直ちに五個の祈禱法及び斷食の習慣並に豫言者の言を信仰することはタクリーヂー即ち宗教育なりとて排斥せられ、人間の理性こそ一切宗教の基礎たらざるべからずとせらるゝに至れり。又葡萄牙の法教師も屢來ることありき。陛下は理性の上に立てる彼等僧侶の信仰や如何と質問し給へり。

陛下は回々教紀元九百八十六年までの間、只管眞理の探究に熱心したりしも、其教育や猶未だ十全ならず、陛下の周圍には卑劣なる異教唱說者多く群集し、回々教の眞理を疑ふべく迫まられ給ひき。陛下は諸說紛々たる間に彷徨し、爲めに自家の眞正なる目的の光明を失ひ、且つ眞理の研究を失却せり。我が回々教の明確なる法律並に卓越せる信仰の堤防一たび破壞せし時、感情まず〳〵冷靜となり、未だ五六年を經由せざる間に、回々教的感情の形跡、毫末だも陛下の胸裡に存せざるに至れり。茲に於てか天下の形勢將に一變せんとす。

次に記する所は、陛下を正道より誘致し出せる主要の理由となす。予は之を詳述せざるべし、されどそが二三の理由を示さん、如何となれば小

は大を生じ、人に驚怖の表示あれば罪人として、世人より注目せらるべしと云へる諺あるを以てなり。

あらゆる宗派に屬する有識者等の、諸國より該朝廷に集り來りたるものが、總べて謁見を賜りたるの事實は、これ其主要なる原因の一たり。人々は昼夜他事なく質問し研究せり。科學の深遠なる、聖書の微妙、且つ歴史の奇異なる、自然の不思議なること等に關し、絶へず攻究せられたりしも、而も其大冊を以てするも猶能く此等の一部分のみを窺ふに過ぎざりき。陛下は各人の見、殊に回々教徒ならざる人々の意見を問ひ、自家の承認するものを徴して自家の意見に反するものを退け、自家の希望に異なるものを棄つ。その幼時より老年に至るまで、あらゆる範圍と境遇とを經驗し、あらゆる宗教的實驗及び宗派的信仰を經由して、苟も書籍中に發見せらるべきものは、そが特殊なる才能を以て總べての事柄を拾集し給へり。或至要なる主義に基ける信仰は、擧げて皆陛下の心鏡に映じ、その蒙りたる各種影響の結果として、各宗教には賢明の士、各國民中には頭腦透徹せる思想家、不可思議力の學者等存することを自覺せられぬ。若し眞正なる或知識にして、斯くの如く到る所に發見せらるゝものとせば、何故眞理は一の宗教に限り、又はイスラームの如き比較的新らしく、未だ千載の星霜だも經閲せざる宗教の信條に限らるべきぞ。又何故一の宗派が他の宗派の拒否することを承認し、特に優越せるにもあらずして獨り其或宗派をのみ優絶すと誇稱するの理ありや。

且つスマニース（沙門ならん）及びブラーミンスは屢帝見ることを得たり。彼等は德性を論し、物理並に宗教の學に於て他の學者より俊秀なりしを以て未來を知察し精神作用を論證する點遙に卓絶せり、されば彼等は其理性と實驗とに基きて自家の眞理を證明し、之と同一方法を以て他宗教の誤謬をも證明したり、加ふるに彼等は自家の教義を説明すること甚だ確固にして巧みに論議しけるものから、何人も自己の疑問を提出したるの後に於て彼等の爲めに屈服せられ、遂に陛下の前に於て疑問を提起すること能はざるに至りぬ。

茲を以て皇帝はイスラミナツクの復活に關する天啓、裁判の日、其裁判に關する詳細なる記事並に我豫言者の傳說に基ける一切の敎義を排斥し、其朝臣が吾人の光榮なる純粹なる信仰の上に試みたる罵詈に傾聽して、皇帝がもと信仰し給いし宗敎の朝臣の手によりて取扱はれたる其取扱方に滿足し給へることを言行に示し給ひぬ。監督者が其愛すべき子に「薔薇が和風を受けて常に微笑するが如く、何人の顏を見ても絕へず笑ひ與ずること勿れ、即ち何人に對しても一樣に微笑すること勿れ」と云いたる敎訓は實に適切なりと云ふべし、されど此敎訓を授くるの時業に已に遲かりしかば、遂に何等の効力なく監督者は爲めに大に落膽したりきとぞ。此物語は偶々皇帝の上に移さるべく、皇帝に此忠言を呈するの日既に遲れ去りて、對手の何人たるを問はず其說く所を信じ遂に其宗敎を改め給へる事にて、今更如何ともする能はざるに至れるなり。

斯くてブツコータムと稱する婆羅門を招致し、其生存せる一切のものに各自梵名を付せよと命じぬ。又デービーと呼べる或婆羅門は、チャールバーイの上に端坐しつゝ宮城の高層に引上げられ、常に皇帝の横臥し給ふ張出し椽の側近くにまで達したりき。斯くして彼は印度敎の敎義を陰密に皇帝に授け、陛下は又深く靈魂輪廻の敎說を信じ、苟も靈魂を否認して採らざる宗敎は、一として存するなしとのことを確信し給へり。眞面目ならざる阿諛者は、此說を證明せんが爲めに論文を草し、陛下は又此等の不信心者の宗派の研究を殊の外に嗜好し給ひしが故に、伴の嫌惡すべき樹の果實の熟成せざる日とては一日もなく、皇帝の趣味は、津々として此方に傾向したりき。

又デリーのシャイク、ダーヂユヂーンと云へる者ありて皇帝に侍せり。此シャイクは、アヂョダンのシャイク、ザカリヤーの子なり。當時の主たるウラマースは、彼を稱して「ターヂユルアーリフキーン」即ちシユーフキースの冠と呼びぬ。彼は「ラヴーイ」の註釋者にして、其他著名なる書籍の著者たるバーニーバットのシャイク、ザマーンの下に敎へられ、シャイク、イブン、アラビーを除くの外、シユーキズム及び萬有神敎に於て第一流の人たり。彼は又ヌザッ

トウラルワーの明了なる註釋書を作りぬ。彼も亦デービーの如くに城壁に引上げられ、陛下は終夜そのシューフキクの巨細なる物語に耳を傾けられき。シャイクはもと我宗教的規則に從つて活動するに、すべて嚴格に過ぐるが如き人にあらざるが故に、盛に萬有神教の說を唱導し、シューフキースの愚なる物語に熱中しつゝ、皇帝をして遂に法律を無視し、純然たる異教徒たらしむるに至らしめたり。皇帝は又ファラオーの信仰により、最後の救濟として教論をなさしむ。ファラオーの信仰は、「フシューシュ、ウルヒカム」の內に記さる。蓋しファラオーの信仰とは、恐怖を超越して希望を抱持し、人その性質の薄弱なるが爲めに、得て傾き易き失望より勇氣を鼓舞し、確然拔くべからざる理由あり、又明々白地なる宗教的命令の存しあるをも顧みず、事每に心機を一轉せしむるもの是れなり。シャイクこそ主なる罪人の一人にして、實に皇帝の信仰を薄弱ならしめたるものは彼なり。彼の言に曰く、「信心なきものは墮獄せざるべからざると云ふを俟たず」と。而も地獄の刑罰の永久なることは、彼に信用せられず、又證明せられざりき。彼がコラ

ーンの詩を說明し又わが豫言者の傳說を說明せるとは殆んど牽强附會なるのみ。其他猶ほ彼は「インサーン、イ、カーミル」(完全の人)なる言を以て、時代の支配者を意味すとなし、王の位置の崇高なる所以なりとなせり。斯くの如く彼は常に皇帝の好むらん如き物語をなし、當然の語をなすといと稀にして、寧ろ自己の正當なりと信ずる反對の事柄を說話す。「シヂュダー」(伏祈)は、人々之を呼びて「ザミーンボフス」(土地に接吻する)と云ふ、然るに彼はこれをしも猶ほ且つ「インサーン、イ、カーミル」即ち彼の所謂皇帝に歸せんとしたり。彼曰く皇帝に　ふべき尊敬は是れ宗教的命令なり」と、即ち「皇帝の玉顏は「カバー、イ、ムラーダート」と稱せられ、又「キブラー、イ、バーヂャート」と稱せらる。彼は其信用すべからざる物語を引證し來り、又印度諸宗教の首長の弟子等によりて爲されたる實地の經驗により支持せられつゝ斯からん罵詈を逞うせるなりけり。

碩學の僧侶は歐洲より來朝し「バードル」なる名稱を有す。乃ち上に堅固なる首領を戴く「バーバー」とは其首領の名稱なり。この首領は其忠告すべ

きものと認定したる場合には、以て宗教の教義を變更することを得、而して皇帝は悉く彼が威權のもとに屈服せざるを得ざりき。此等の僧侶は携ふる所の福音書により、皇帝に三位一體の說法をなせり。陛下は確かに基督教の教義を信仰し、此教を擴布せしめんが爲めに王子ムラードに命ずるに、熱心に基督教の教を受くべきを以てし、アブルフアズルをして福音書を飜譯せしむ。「ビスミラー、イラーマーン、イラヒーム」の代りに次なる言は用ひられぬ、即ち

「アイ、ナーム、イツ、ヂエースス、オ、クリスト」（おゝ汝その名はヂーサスクリスト）

なる語には、「その名光榮に滿ち、幸福に充てる、おゝ汝」との意味を含めり。シヤイク、ブアイジーは此歌を完からしめんとして、他の半分を附加したり。

「スバーナカ、ラー、シワーカ、ヤー、フー」（我等は汝を讃美す、汝の外何ものも存するなけん、おゝ神よ）

と云ふ歌即ち是れなり。

此等の呪はれたる僧侶は、その呪はれたるサタンの性質の說明を、あらゆる豫言者中の最良なるムハメツトに寄せたり。即ち「神の幸福は、彼の上及び彼が一切の家の上に宿れり」と云へること是れ、此は如何なる惡魔と雖も如何ともする能はざる所なりとす。

ビール、バーも亦太陽は一切萬有の起源なる所以を說き、皇帝に深き印象を與へたり。野生穀物の生熟すること、果實、植物の成長すること宇宙の明徹なること、及び人間の生命ある、何れか是れ太陽あるが致す所にあらざるべき。されば此の太陽を尊敬し崇拜する素より、其處にして其祈を捧ぐる場合には、宜しく東天に對向してなすべく、決して日沒方面に對向してなすべからずと。且つこれと同一理由のもとに說明をなして曰く、「人間は火、水、石、樹木、その他全一切のものに尊敬を拂はざるべからず、たとひ牝牛及び其糞より額印、婆羅門の絲に至るまで、一として之を尊敬せずして可なるものあるべきぞと。」從來朝廷に來集せる哲學者及び學者等は、これが爲めに大に面目を失ひ、勵めて其證據を擧揚せんと努力したりき。彼等曰く、「太陽は

最大光明なり、實に主權の起源なり」と。

火の崇　ユラートのナウサーリーより來集せり。彼等は拜火教の教義を説明し、拜火を以て「最大なる崇拜」なりと稱し、以て深く皇帝を感激せしめ、斯くて皇帝は彼等より古代のパーシーの宗教的儀式等を習ひ、アブルファズルに命ずるに古代波斯王のなせし習慣に從ひ、晝夜朝廷に於て火を燃き、その神聖なる火を絶へざらしむるを以てす。所以如何となれば、火は正しく神の表顯たるものにして、實に神光の一なりと信じたるによるなり。

皇帝は幼時よりしてホーム(拜火の一種)を祭ることをなされたりき、是れ皇帝が彼の後宮に在る印度の王女を寵愛せられたるによれるなり。

皇帝の治世二十五年(九八八年)の正月元日より、皇帝は公然太陽を崇拜し、火に對し伏して祈られき。朝臣は宮殿に點火せらるゝや、直ちに此儀式の爲めに起立せざるべからず。ビルゴの八日の祭典には、帝は印度人のなすが如く其額に印を表付しつゝ謁見室に出御し、時に三四の婆羅門は、世にも熱誠の風を裝ひつゝ其手の周邊に寶石を乘せたる絲を結び、太公は又皇帝に奉るべき眞珠寶石を携へ來りて此謁見式を輔翼す。ラーキーの儀式(呪符として布片を腕の周圍に纏付すること)は普通に行はれたりしなり。

回々教に反對して他宗の信者が、自己の教義を引用しつゝ論じたる時に、印度教は實際一も頼むに足るべき教義を有せざる宗教なるに、却つて彼等の説く所は信なりとの感覺を深く皇帝に與へたり。吾人の信仰の祖、亞刺比亞の聖者等は、擧げて皆姦夫たるか、若くは公道の强賊なりと稱せられ、回々教徒は總べて非難さるべきものなりと宣告され、遂に皇帝はコラーンに云へるが如き種類の人間に屬せざるを得ざるに至るまで、大に攻擊せられぬ。コラーンに曰く、『汝等は其口をもて神光を吹消さんとす。されど神は、その光を益々明かに完からしめんとし給ひ、如何に不信心者の反對するあるも、敢て顧慮し給はず』と。回々教に關係せる事項を全廢せらるゝに際し、最早や何等の證明も、將た論證も些の要を見ざるばかりに其勢力衰へ、事態漸く一變し去らんとするに會したりき。

マクドウーム、ウル、ムルク及び、シャイク、アブドウンナビーが、九百八十七年に於てマッカーに向ひ、宮城を見捨てたる後、皇帝はコラーンの創世記に關し質疑を試み、以て人々の信仰を誘出し、又回々教の儀式を司る傳、及び豫言者に關する事項につき、彼等の胸裏に疑惑を起さしめ給へり。皇帝は顯然として天使（チン）の存在を否認し、其他確知すべからざる世界の他の生物、並に豫言者、聖哲等の不可思議的出來事なども全然否認し去られぬ。皇帝は吾人の信仰の證據を排斥し、コラーンに記されたる眞理の證蹟中唯吾人の理性に合致するものゝみを採りて、他は悉く排斥し給へるなりけり。

此年ナーゴルのシャイク、ムバーリクは、ビール、バーの事に關し帝前にして述べて曰く、「陛下の神聖なる書籍中に挿入せることあるが如く、吾人の經典たるコラーンにも亦爾かく挿入せられたる記事あり、されば以て何れを正しと信ずること能はず」と。

無恥にして心ざま惡しき人々は、皇帝に問ふて曰く、「かの千年（ミレニユム）の將に終らんとするに會し、何が故ぞ最有力の證據たる劍を使用し給はざる、何故に波斯のシャー、イスマーイルが曾てなせし如くに斷乎劍を用ひ給はざるや」と。

然りと雖も皇帝は遂に良心と自信との命ずる所は、正に是れ時代に適應せしむべき指導者なるを以て、劍は必ずしも用うるに及ばじと信ずるに至りぬ。實に若し皇帝にして自己の要求に着手し、そが改革を斷行するに當り、費すに少量の銅臭を以てしたるならんには、朝臣及び俗民の多數を容易に邪網裏に吸收するを得たりしなるべし。

帝國の宗教を改革すべき會議に於てラーヂャ、バガバーン述べて曰く、「予は好んて信ぜんとす、印度教徒及び回教徒は、各自互に惡的宗教を有すと、されど予が信仰を起し得る如く、何處に新宗派存在し、又如何なる意見を彼等が抱持するかを我等に告げしめよ」と。陛下は少しく反省する所ありて、ラーヂャを勸むることを止めたりと雖も、吾人の光榮ある信仰の變更は、依然持續せられたりしなり。

當時公の祈禱及びアザーンと稱する祈禱即ち國會の祈禱會に於て一日

五たび歌ふべき祈禱は廢せられぬ。アーマッド、ムハマッド、ムジュタフア等の名稱は皇帝の嫌ふ所にして、外には異教徒、內には後宮の王女等を喜ばしむることを好み、遂に朝臣の中にて此等の名あるものは、餘義なく改名せざるを得ざるに至れりと云ふ。又ヤール、ムハマッド、ムハマッド、カーンの如き名は、ラーマットと名を變じたり。然り、吾人の幸福なる豫言者の名を以て、斯般の惡人を呼ばんは實に善事にあらざるべし。彼等の名を換ふることによりて、その改良せらるべき餘地殆どなかりしなり。然れども彼等の名稱を變ずることは、勿論必要なりと云はざるべからず、他なし豚の頭に寶石を置くは惡きことなりと云へる諺あるを以てなり。

ミール、プアトウラーは、九百九十年のラビー、ツッサーニーにダキンより來れり。彼はもと宗教に關し嚴格に過ぐるの人たらざりしシーラーズのミール、ギアースディーン、マンシュルの門弟たり、茲を以て皇帝の思考すらく、このプアトウラーは、自家の宗教的見解と一致すべきものならんと。圖らざりき、彼は極めて頑迷なるシーアーたりしと同時に、財寶、權貴を崇拜し

世俗の官職を崇拜する熱心家なりしかば、かの頑迷極まるシーイズムの意見を捨つることを肯んぜざりしものならんとは。國會の議事堂に於てすら、彼は泰然自若としてシーアーの祈禱をなしき、斯の如きことは彼を措て何人も敢てすることを得ざりし所なるべし。爾かく彼が頑迷なる人なりしを以て、皇帝は之を頑迷徒の種類に加へられたり。然れども彼の學識と實際的才能とを深く惜み給ふが故に、皇帝は寬大に彼のなすがまゝに放任し給へり。或時皇帝は、プアトウラーの面前にてビール、バーに告げ給はく、「朕は疑ふ、何人か能く其五官を以て一瞬間に自己の臥床を離れ、天に昇りて神と九萬の會談を爲し、而も歸り來りて猶ほ臥床の溫氣を見るが如き人あるべきを信ずることを得るやを」と。且つ一方の足を擧げつゝ、「朕は他方の足を如何にするも擧ぐる能はず、然れば人々の信ずらん如き物語は、實に愚なる者にして、何故に世人が斯かる愚なるとを信ずるかを訝かるのみ」と續けぬ。ビール、バー及び其他の痴漢は答へたり、否々、我等は信ず、我等は信用す」と。此足の經驗は繰返し演ぜられつ。されど陛下はプアトウラーを凝視

し給へり。これフアトウラーは新來の客なりしを以て、何事をか物語らせんとし給ひしなりける。然るをフアトウラーは總べての談話を瞳聽せしにも拘らず、一言だも吐出するなくして止めりき。

最終に臨み、ダビスターンより數言を採つて述ぶる所あらんとす。

サラームラーも亦云へりき、「神の代表者たるアクバーが涙を垂れつゝ、「朕の身體が、一切のものゝ身體を積集したるものより更に一倍大となり以て世界の人民が、他の生物を害することなく、朕の身體を以て休養し得たらんことを庶幾ふ」と物語れること屢々なりき」と。

アクバー帝の賢明なりし證據は、帝が各階級、各種類の人民、例へば猶太人、波斯人、トウーラーニー人等を集合し給ひしこと是れにして、若し或一種の人民にのみ限られたる時には、往々にして他の種族を排擊し、その結果紛爭を惹起し、王位を侵奪せんとしたる、波斯のウヅバクス、及びキジルバーシエスの如き場合の生ずらんことを恐れ給ひたればなり。茲に於てかサルタ

比較言語學と比較宗教學との比較

ーシ、グダーバンダー、イシヤフアピ」なるものゝ子、シヤー、アッバースは、アクバーンの行爲を摸倣し、グルヂース(ヂョーヂアンス)を喜ばしめたりき。アクバーは又世襲の勢力、家系、名譽等に尊敬を措かずして只管知識と行爲とに卓越せる人士のみを、喜んで採用し給へり。

第二章

宗教學を研究する學者には、其材料乏しからず。比較言語學者の研究せざるべからざる言語の數と比較する時には、宗教の數少きこと素より是れ事實なり。然れども國語を比較研究するに當り、其材料たるや多く自家に使用し得べき如くに準備せられたることを知了せん。吾人は既に文法書及び辭書を備へたり然るに世界の主要なる宗教の文法及び辭典を探尋せんか、未だ以て既に之を備へられたりと云ふを得じ。問答示教法(カテキズム)、條項(アーティクル)又は所謂信條(クリード)と稱せらるゝもの、若くは信仰の告白等の中に於て、言語の比較研究に於けるが如き材料を發見することを能はざるなり。かの信仰の告白等の如き、誤つて其教義を吾人に告示する

東洋宗教の二種の別

ことなしとせんも、而も吾人に與ふる所のものは、畢竟該宗教の片影に過ぎずして、決して宗教そのものゝ精神、實質を與ふることなし。然りと雖も、時に或は稀にして此等の助力をすら發見することあるは輕ゆべくもあらず。

東洋諸國に於ては、經書記錄によりて建設せられたる宗教と、何等證據のものを缺如する宗教との間に劃然たる區別を畫くもの頗る多し。其書籍に基きて建設せられたる宗教は大に尊敬せらるべきものと思考せられ、設令其中に誤謬の教義をものしあるものにもせよ、他の書籍なく文字なき風俗の宗教中にありては、優然として貴族的地位を占取しつゝあるなり。

經典を有する宗教の僅少

顧ふに宗教研究者にとりて、經典こそ實に最も必要なるものなるべからんも、此經典と雖も亦一の新宗教を創設せる人の眞正なる教義の反映形態を帶び、而して此形態たる、そが通過しけん中間の物體によりて汚され破壞せられたりしことを注意せざるべからず。而も猶實際に神聖なる經典を有する宗教極めて少く、世界歷史中の眞正なる書籍によれば、宗教の數や甚だ僅少なりとす。

經典を有する宗教二大種別

所謂世界歷史なる大戲曲中に於て、そが主なる役者を勤むる所の二大種族、即ちアリヤン人及びセミチック人につき研究せんか、此等の各種族に屬する二員のみ能く神聖なる經典を有するものなりと主張するを得べし。アリヤン人の中にては印度人及び波斯人の二者是れにして、セミチック人の中にてはヘブリュー人及び亞剌比亞人の二者即ち然り。アリヤン中の印度族と、セミチック中のヘブリュー族とは、各自二個の經典的宗教を發生せしめつ。印度族は婆羅門教並に佛教を產し、ヘブリュー族は猶太教（ユダイズム）並に耶蘇教を起せり。斯くてアリヤン族とセミチック族との中に、各自第三の經典を有する宗教獨立して存在するにあらずやてふ疑問起るべし、されど此第三の經典を有する宗教とも稱せられん如くに考へらるゝものは、その實前二者の獨立せる宗教と異り、全然第一の經典的宗教に於て薄弱なる重複をなしたるものに過ぎざるなり。即ち拜火教（ゾロアストリアニズム）は吠陀教の一層深く且つ廣き流域を培養したる同一の地層より出でたるものにして、回々教（モハメダニズム）は其最も活氣ある教義に關する範圍だけに於て云へば、實に唯一眞正の神を崇拜し、此神の友人たるアブラハム教の古代水源より湧沸し出でたるものゝみ。

二大種族の宗教學の系圖

次に示さん圖を一見すれば、諸君は直ちにアリヤン國民、セミチック國民の宗教思想が、幾百年の久しきに渉りて流れたりし所の河系を了知し得べし。少くとも神聖なる經典を有する國民の宗教の、依つて湧き出てし源泉を察知し得べきなり。

- アリヤン族
  - 吠陀……婆羅門——三藏……佛教 → チューレーニアン
  - ゼンド、アベスタ……拜火教
- セミチック族
  - 舊約書……猶太教——新約書……基督教 → アリヤン
  - コラーン……回々教

六大宗教の關係

佛教は婆羅門教の子孫なりと雖も、又同時にこれが敵者たり、拜火教は寧ろ古代吠陀の信仰の卒直なる方面を徑路に踏み入りし者にして、佛教と等しく吠陀教の神々を崇拜する古代教義の或者に對し反抗を試みたるものなり。セミチック族の三種の主要なる宗教の間に存在する關係は殆どアリヤン族の宗教と同一にして、唯之を年代記的に云はゞ、回々教は耶蘇教より晩く、拜火教は佛教に先立てるの差異あるのみ。

佛教の古今

次に注意すべきは、此二大宗教の系統の平行せる分枝線中には、無論偶然なるも符合することあり。印度古代の婆羅門教の子孫たれども同時にまた之に反抗を敢てしたりし所の佛教は、その發生したる印度より星霜の經山すると共に衰微を呈し、他國に移植せられたる後に於て、却つて盛大を致すに至れり。適切に云へば亞細亞大陸の中央なるチューレーニアン種族の中に移植せらるるに及んで大に發展したるなりき。佛教は其生るゝや「アリヤン」宗教なりしも、其終りや「チューレーニアン族の主要なる宗教とはなりぬ。

耶蘇教の古今

之と異なるなき變遷は又第二の宗教系統なるセミチック派の宗教にも起生す。耶蘇教は猶太教より出てたるものなりと雖も、猶太人によりて排斥せられたること、宛として佛教が婆羅門教より出てゝ而も婆羅門教によりて排斥せられしが如く然り。耶蘇教は單に古代猶太教の變形せしものなりとして其目的を達することを誤り、セミチックよりアリヤンに、猶太人よりヂエンタイル人の

間に移りたる以前には、猶未だ眞正なる耶蘇教たるに至らず、且つ世界的宗教たる性質を具足せざりき。耶蘇教は本來セミチック宗教なりしも、變遷して遂にアリヤン族の間に行はるゝ主要の宗教とはなれるなりけり。

儒道二教

アリヤン族、セミチック族の外猶ほ他に一國民あり、此國民は自己固有の宗教として一若くは二の典籍を有する宗教ありと主張せんとす。支那は殆ど同時に二宗教を起し、何れも共に神聖なる經典に基けるものにして儒教及び道教即ち是れなり、前者は四書五經に依り、後者は道德經に依る。

八種宗教の經典の原語

全人類の聖經圖書館は、以上八種の宗教によりて完成せらる。梵語、パーリ語、ゼンド語、ヘブリュー語、希臘語、亞剌比亞語、支那語等を以て記されたる此等八種の經典に對する正確なる研究は、一人の學者にとりて必ずしも非常に怖るべき企圖にあらざるが如し。されど單に耶蘇教のみに就て之を云はんも、その舊約全書の註釋に充てられたる多種多類の文學、福音の歷史、又は教義に關し年毎に爭鬪絶えざる議論の出版せられたる多數の書籍等を見れば、以て八種の神聖なる經典の正確なる學者的註釋に對し、そが必須なる材料を包含すべき神學的圖書館、夫れ果して如何に多數の書籍を收藏すべきかと云へる思想の浮動し來るを覺えずんばあらじ。近代の宗教、殊に少くとも先づ回々教の如き無識の宗教すら、猶且つ其發展頭初の數世紀間に經驗せる信仰沿革の資料頗る多く、此等の資料を悉盡して以て完全に之を會得する底の批評的學者に至りては其數曉天の星も啻ならざるべし。

吠陀

翻つてアリヤン宗教に眼を轉じ、婆羅門の經典一々其の文字に從ひ嚴密に理解すれば、事や甚だ容易なるかの如く思惟せられん。力荷吠陀の頌歌は、吠陀時代の諸仙の舊信仰の眞正なる聖書にして、その數僅かに一千〇二十八首、節數又一萬〇五百八十に達す。此等頌歌の註釋を予は先に四折の大本となし剞劂に附せりき。此註釋は各三十二綴よりなる十萬行を含み綴の總計三百二十萬に達せり。此外三種の小なる吠陀あり「夜殊吠陀」[婆磨吠陀]「阿闥婆吠陀」是れなり。此等は宗教的教義の研究上比較的緊要なるものにあらずと雖も、古代吠陀時代の神の尊敬者の犧牲並に儀式を正當に理解せんには、必ず缺くべからざるの書たり。

ブラーフマナ

此等四種の吠陀には、各自に「ブラーフマナ」を有す、これ後代に學者がものせし論文の拾集せられたるものなるなり。即ち此書は、決して古代の梵語もて書かれざるにも拘らず、正教派所屬の印度人は、之を天啓的文學の一部分なりと認む。

註解等

此等の論文集は、いと大冊のものにして、古代の吠陀の頌歌の書冊よりも更に大なり。三千年以前より今尚綿々として連續しつゝある神學的文字に環鎖をなせるものは、眞箇に是れ此等無邊の論文、小冊子及び註釋書等即ち然り。而して此等の無數なる註釋書類の本文は、四吠陀及びブラーフマナなりとす。此他猶ほ宗教的文學に隨伴する記事あり、各自相互に正教派なりと主張しつゝ、思想

叙事詩等

及び信仰を異にせる諸學者流の爭論即ち其一にして、又婆羅門教の信仰と其僧侶とに反對し、且つ公衆の意見に反對する著述家の文章亦其一なり。

此外に神聖なる法律書、古代の叙事詩たる彼の「マハーバーラタ」と「ラーマーヤナ」、又「ブラーナ」及「タントラ」と云ふ印度の神聖なる文學（年代は比較的近代に屬すれども）も亦多數幾百萬の人類の宗教上の信仰を研究する上に於て、缺くべからざる材料なり、固より此等の人は吠陀經を以て信仰の最高憑據なりと認定する

後世の印度教

にも拘らず、一句だも其經文を理解し得ず、かの吠陀に比し遙かに近代に屬し、却つて更に廣く行はるゝ此等の書籍より全然彼等日常の生活上の精神的食糧を取りつゝあるを以てなり。

彼れ印度人が、或は生命の大問題を解決せんが爲め、或は又激烈なる難行苦行により現世の誘惑と苦痛とを脱却せんが爲めに、往々神聖なる幽寂の境に逃れたりし其當時にありてすら、吾人は猶充分に之を理解する能はざりき。印度なる國には宗教の分派夥多しく、不思議なる該國の歴史を遡りて研究する時は、其宗教的生命なるもの無數の地方的中心に分裂したりしが故に、苟も教義の類似によりて之を統一せんとすれば、僧侶の天才に兼ぬるに忍耐を要したりしなり。此等宗派の二三のものは、殆ど獨立宗教の名稱を冠して可ならん、例へばシク人の嘗て有名なりし宗派は、其派の神聖なる經典及び僧侶を有し、一時は印度の婆羅門教並に回々教に對し、恐るべき敵手たるに至れることすらありき。其後政治的變遷のありし爲め、ナーナクなる宗派代つて歴史上優勝の地位を占め、比較的最長期に渉り其勢力を持續せり。このナーナクなる宗派は十五、十六世紀の

間に起り、印度教、回々教、の腐敗せるに際し、純粹にして且つ精神的なる崇拜を惹起せしめたる多數宗派の一に居るものなり。シク人の經典なる書冊（グランド）は、全體より見て冗長なるが如しと雖も、處々に深遠なる意味の思想を歌へる箇所なしとせず、ツランブ博士が此飜譯を完成する近きにあらん。此書冊の中にはナーナクの詩句より舊く且つ原始的の宗教詩を採集したる所あり。實に此書冊の最美なる歌は概ね此等の前代に顯はれたるものより借り來りたるものにして、殊にラーマーナンドの弟子カビルより借り來れるもの多し。此書冊には彼の豐饒なる國の自然的花卉よりも更に豐饒にして、且つ異種別樣の智的花卉に充ち、茲にそが宗教研究者の攻撃に便すべきふし少しとせず。

予は未だ印度に於ける第二の經典的宗教即ち佛教につき何等の告示する所あらざりき。今これにつき少しく茲に說く所あらんとす。そもや佛教たるも、と是れ無數宗派の一にして、爾後漸く勢力を占むるに至り、宇内住民の大部分の上に、爵然として大なる樹影を印するばかり、莫大なる枝梢を四方に繁延するを致せるものなり。

佛教經典と耶蘇教典との比較

歐洲の學者は勿論、佛教信者若くは佛教國の人民中、最も有識碩學の士なりとも雖も、何人か能く該教典の註釋及び論文を除外して、經典そのものだけなりとも總べて之を讀破せりと稱し得るものぞ。佛教の經典及び其註釋は、サッダルマ（妙法）アランカーラ（莊嚴）中に記載せる所の如くんば、二千九百三十六萬八千の文字を包含すと云へり。斯くの如き記事は、吾人の心中に確實なる思想を抱懷せしむることは能はず、又如何なる學者にても此記事の絕對に正確なることを斷言さるべくもあらざるべし。然りと雖も耶蘇教の英語聖書は、其文字三百五十萬（この内には、母音は子音に離れて計算せらる）を有す、今此數を佛教經典の大要の計算數と對比すれば、僅々其五分一若くは六分の一に當る。佛教經典の西藏譯は二部より成立し、其數實に三百二十五冊に及ぶ、そが每冊の重量は北京版にて四磅若くは五磅ありとぞ。

佛教經典の現狀

傳ふるが如くんば、佛教經典たるや、その内に八萬若くは八萬四千の法門を包含したりしが、今や其大半消滅し去つて、僅かに六千餘卷を殘存するのみと、こは北方（大乘）及び南方（小乘）佛教の共に是認する所なり。

拜火教

アリヤン族の經典を有する第三位の宗教たる拜火教の聖書は、其分量一見甚だ狹少なるが如しと雖も、そが經典たる「ゼンド、アベスタ」には、往昔の註釋殆ど皆無にして、古代の原本亦甚だ乏しく、爲めに之を完全に理解せんと欲す、勢ひ現代の歐洲學者の忍耐及び天才の負擔たらしめずんばあるべからざるなり。

儒教

今若し支那のことにつき論ぜんか、孔子の教は五經と四書とに基きて建設せられ、其書籍も亦隨つて大に、且つ少からざる註釋書あり。此註釋書にして缺如せんには、如何なる學者なりとも、此聖典に憑據する儒教そのものを了解すること不可能たるべし。

道教

孔子と同時代、否な寧ろ孔子の先輩たる老子は、著作相應に多く信仰、道德、禮拜等に關し、種々なる問題につき、少くとも九百三十冊の書籍をものし、猶ほ他に幻術に關し、七十冊の著述ありたりと傳ふ。さりながら老子の主要著述たる道德經は、その言五千にして約三十枚の書冊に過ぎず。爾かく簡單なる書籍なるを以て、能く之を了解せんには、必ずや註釋書なかるべからず、故にジュリアン氏は、その最も舊きは紀元前一百六十三年に遡る時代より以降、六十幾人に亘る註釋

家の議論を參照して飜譯せざる能はざりき。

支那佛教

支那には又第三の宗教即ち佛（フォ）なるものあり。然れども此佛（フォ）は、畢竟佛陀の支那化せるものゝみ。而して印度より支那に傳來するや、佛教も稍特殊の性質を具し、支那固有の佛教文學を產出したりと雖も、而も支那佛教は到底獨立せる一宗教なりと云ふを得ず。錫嵐、緬甸、暹羅（ネポール）、西藏、蒙古等に於ける佛教だも、尙且つ獨立の佛教なりとは稱することを得ざればなり。

諸宗教經典蒐集の困難

苟も聖書を具ふる宗教の經典及び其註釋を悉く蒐集したればとて、果して吾人は人類の宗教的自覺の發生と衰頽との經過を研鑽すべき必須の材料を悉皆所藏したりと云ふを得べきや。何ぞ然らん。人間の大部分、否な世界の宗教的、智力的格鬪の最も勇壯なる選手なりと稱せらるゝ人類の或者にして、猶未だ此等の宗教的記錄中に表明せられざるものなきにあらざるべし。試みに只だ希臘人と羅馬人とにつきて一考し見よ、チュートニック人、セルチック人及びスラブ人につき一考し見よ。彼等國民の舊寺院は新寺院の起るために顚覆せられ、彼等の神聖なる樫樹は切斷せられ、山徑及び森林鬱蒼たる道側に植置されたる

十字架に變化するに至りたる宗教改革の起りたる以前に當り、彼等の所謂宗教的觀念とは、果して如何なるものなりしやを研究せんには、そもや何れの處にか其材料を求むべきぞ。ホーマーも亦ヘシオッドも共に希臘人の宗教、その眞正なる宗教思想の如何なるものなりしかを吾人に語らざるべし。又彼等の詩歌は、希臘人の中にて最も知力ありたる人々によりて神聖視せられざりしのみに止らず、單に貴重すべき權威あるものなりとしも思考せられざりしなり。「ゼウスの羅馬の狀態を觀察すれば、茲には希臘に於けるが如く、「イリヤッド」又は「オデッセー」の如き詩歌すら存在せず。吾人がチュートニック、セルチック又はスラボニック族の宗教的信仰如何と彼等に尋繹せんに、彼等の信仰しけん神々の名稱は、夙に忘失せられ、永久に消滅し去られあるなり、されば進んで彼等の信仰を了知せんとするには、勢ひ癈頽せる羅馬寺院の敷石より、嘗て其美飾燦爛たりし切篏の破片を拾集するが如くに、彼等の信仰の散在分布せる斷片を集綴して考覈するの外道なかるべし。

若し夫れ一歩を轉じて經典的宗教より經典なき宗教の研究に移らんとする

宗教傳播の區域

に臨み、かのアリヤン族に於て吾人が其代表的憑據（アーソリティー）の缺乏を感じけん如く、又セミチック族の間に於ても之と等しき經驗に遭遇せずんばあらじ。バビロニア人、フエニシア人、カルタヂニア人、亞剌比亞人等は、その回々教に改宗する以前皆共に經典を有するなきの國民なりき。故に彼等の間に行はれたる宗教を知らんと要せば、紀念碑、文字、傳說、固有名詞、俚諺、呪咀、散在せる詞辭等につき研究するの他あるなし、而も此等のものと雖も、適當に之を區別し、好箇に整頓して之を使用せんとするには、云ふまでもなく多大なる注意を拂はずんばあるべからざるなり。

アリヤン人並にセミチック人の思潮滔々として數世紀の間、東南より西北に横溢したる河床も、之を吾世界全面と比較し來れば、畢竟これ狹少なる境域を充すに過ぎず、即ちセミチック族、アリヤン族の思想は、インダス河よりテームス河に至るまで、ユーフラチース河よりヂョルダン河並に地中海に至るまでの地域に傳播したり。吾人は高處に昇登するに從ひ、地平線は其四面に擴大し、而して人類形蹟の存する限り、到る所又宗教形蹟の存するを知るべし。古代のナイル

河沿岸の地を見れば、現今尚ほ三角塔屹立し、ラビリンス象形文字と男神女神の奇異なる形狀とを畫きたる寺院及び迷宮の廢趾の存するを見るならん。荒廢に歸せず今尚ほ現存する所の紙草の卷物を見れば、埃及の聖書とも稱せらるべきものの斷片を認むることを得べし。埃及人の如き奇異なる種族の古代の記錄中に存する事實は、殆ど解讀し得たりと雖も埃及宗教の起源と其宗教の禮拜儀式等の起源とに至りては、今以て不詳に屬す。

亞弗利加の宗教

亞弗利加の全大陸には、到る所茅舍牛屋の散在するを見ん、即ち亞弗利加土人の住居せる所には、地より天に向つて犧牲の煙雲の立昇るを認むるなるべし。亞弗利加人の信仰の古代の遺物は、今や忽焉として消滅しつゝあり。然れども現に猶ほ保存せられあるものによれば、これに依りて以て宗教研究者は甚だ趣味を感ずべく、彼等の蛇及び祖先の奇異なる崇拜、未來の生命の粗雜なる希望、白人並に黑人の父なる最高の神に關する其全く不分明ならざる紀念等は、疑ひもなく研究上に趣味を覺ゆるものたり。

馬來等諸島の

亞弗利加の東岸より海を超へて印度洋、太平洋に點在分布せる諸島嶼を點檢すれば、黑色のパプアン人、黃色の馬來人若くは此等の諸島に散在せる鷲毛色のポリネシア族などに至るまで否な彼等のみならず、人間中には最下位に算せらるべき人間中に於てすら、靜かに之を攻究せんか、確かに神に關し、未來に關する觀念の曙光あるを認むべし。且つ彼等の中に於ては、其形式最も下等なりと雖も、兎に角祈禱、犧牲等あるべく、若し吾人が神に願ひ神を呼ぶ時には、神は吾人の祈に耳を傾け給ふべく、吾人が犧牲を供ふる時は、これを受け給ふ神あるべく、假令其犧牲は罪を贖ふために供へられたるものなるにもせよ、又は歡喜の念に打たれて供せられたるものなるにもせよ、共に神の受納し給ふ所たるべしと云へる觀念の存在せざるもの絕へてあるなけん。

宗教

猶ほ遙に眼を放ちて東方亞米利加大陸の光景を望まば如何、其發見者、その征服者は、最初殘忍橫暴なる非基督教的の行爲を敢てしたりきと雖も、此等最初の亞米利加大陸民の歷史は、優に以て古代の獨立せる信仰を研究する好資料となすを知らなん。不幸にも最初亞米利加土人と接觸せし歐洲人の蒐集に係る宗教的、神話的傳說は、彼等が筆を執りて記せる年代を遡ること久しからず、且つ其傳

米國の宗教

說中には、往々にして土着記者の思想と、之を聽取したる西班牙人の思想とを反映せしむる所鮮少なりとせず。そはメキシコ及びグアテマラの奇なる象形文學の記錄により知り得べき所甚だ少く、且つ彼等の國語を以て夫等土着の人民の記したる記事は、充分注意して參考すべき必要存す。メキシコのアズテック人並にペルーなるインカ人の古代宗教は、又面白き問題に滿てり。なほ北方に進み、赤色皮膚を呈せる住民を觀察すれば、一層漠として知るに由なく、野蠻人のものせる亦更に何等研究上の補足たるべきものなかるべし。然れども「レッド、インディアン」の如き、赤色印度人漸次衰頽減少しつゝある種族間に於てすら、今猶ほ研究せらるべき宗教的信仰の粗野なる、自然的發生の形跡あるものを認知し得らるにあらず。彼等の國語及び宗教を一觀せんか、原始的亞細亞人が、かのアリューティック橋の飛石を超へて北方より進み、又は順風に乘じて島傳へに南方の航路をとりつゝ、亞米利加大陸の海岸に向ひ、歷史以前已に移住したりしことの形跡あるを發見すべきなり。即ち亞細亞人の空舟が、此等の航路をとりつゝ亞米利加大陸の海岸に上陸し、又は破船して其後再び故郷なる亞細亞に適歸する能はず、そのまゝ有史以前に亞米利加に移住しけんものある明白の事實なりとす。

亞細亞大陸の宗教

今再び亞細亞大陸の宗教を觀察せんに、八種の經典的宗教中、その何れかの宗教ありて、殆ど亞細亞大陸の全面積を占領せることあるを知るべし、即ち猶太教、耶蘇教、回々教、婆羅門教、佛教、拜火教等の宗教あり、又支那にては孔子、老子の教行はれたり。此孔老の教を初めとして此等の諸宗教は半ば表面下に、否な時として表面上にすら、一層原始的なる崇拜の形跡殘存するもの多し。蒙古族の黃教、フインニッシュ及びエストニアン族の半ばホーマー的なる美しき神語など、即ち是れ。

宗教學研究の疑問

以上記述したる全世界に行はるゝ宗教のパノラマを見れば、その廣大なるに一驚し、爲めに諸君は恐らく如何にして宗教學は研究せられ、又何處より之れが研究の端緒を開くべきかに迷ふならん。實に科學的に構成せらるべき研究材料は無盡藏にして、一朝一夕に列擧し盡すこと能はざるは、何人と雖も否み得べからざる所なるべし。然らば如何にして此等の材料を統一整頓すべきや。此等宗教の共通的要素、夫れ如何にして發見せらるべきぞ。其各宗教の間に存す

宗教學の起點

る差違や如何に。其各宗教の興敗如何。此等諸宗教の性質並に意義や如何。

古諺に「ディビデ、ヱト、インペラ」なる語あり、今之を譯せば「裂割して統御せよ」となる。かの世界の宗教の迷路よりも一層暗黑なる迷路を通じて以て諸種なる科學の學者を指導しけんアリアドネの古き絲は、此等の宗教的材料を分類したる後に於て、始て捕捉せらるべし。總ての眞正なる科學は、主として分類に基因す。されば其信仰の異なる種々の方言を分類すること能はざる場合に於てのみ、宗教學なる科學は、實に不可能なるものなることを告白せずんばあらず。故にそれまでは宗教學と雖も、必然この分類的方法に準據せざるを得ざるなり。宗教學なる土地、即ち材料が適當に測量せられ、注意して分割せられたる時は、學者は何れも能く自己の持分を耕培するに精力を消耗することなく、又特殊なる研究が附隨すべき全般に亘る普通の目的を、絶へず眼中より放失せずして、能く此目的に從ひ、自己の特殊なる研究を試むることを得べし。

宗教の分類

果して然らば此廣大なる宗教學の領土は、夫れ如何にして分割せらるべきや。如何にして宗教は分類せらるべきや。否な如何にして宗教は今日まで分類せられたりしか。そが最も簡單なる分類法にして、現今殆ど各國に於て採用せられつゝあるは、之を分ちて「眞正の宗教」と「誤れる宗教」となすにあり。こは其國語を分類して先づ自國語と他國語とする方法に髣髴す。即ち希臘人が自國語と野蠻語とに分ち、猶太人が猶太語とヂエンタイル語とに、印度人がアールヤ語とムレッチュハ語とに、及び支那人が中華語と夷蠻語とに分つが如き是れなり。

夷蠻車

予は今更茲に此分類法が、何故科學的目的に不必要なるかの理由を述ぶるの要なしと信ず。

然るに又此方法と比するに、一見稍や科學的性質を與へたるが如き方法あり、されど此方法とても精細に研究し來れば、先の分類法と等しく、宗教研究上無用無價値のものたり。此方法とは宗教を天啓的と自然的とに分類すること即ち是れ。

予は先づ自然宗教なる意味如何につき、茲に一言述ぶる所なかるべからず。此自然宗教なる語は、常に種々異なれる觀念に用ひらる。ある學者は之を宗教の歷史的形式なる意味に用ひ、苟も啓示に基かざる宗教の或歷史的形式なる意

味に使用したりき。此學者の意味に從へば、佛教は婆羅門教の目より見て自然宗教たり。予の見解によれば、耶蘇教及び猶太(ユーデヤ)教を除く外の一切宗教は、何れも皆純乎たる自然宗教なりと分類せざるべからずと信ず。而して「自然」なる語には、もと「誤れる」と云へる意味を包含せずと雖も、茲に所謂自然宗教の「自然」とは、云ふまでもなく眞理の感覺を超越し、又は吾人の內部に潛在する良心の聲を超越したる或る裁可(サンクション)の缺乏の意味なるや明白なりとす。

然れども自然宗教なる語は、これと全く異なれる意味にも使用せらるゝとあり、殊に前世紀の哲學者に於て然りとす。即ち件の哲學者等が、其主要なる歷史的宗教を批評的に分類せんとて、各宗教に特殊なる部分を除去したるの後、單に夫等諸宗教の中に共通せる或原則或要素のみ殘留せることを發見するや、此等の原則、此等の要素こそ、所謂自然宗教の原則なりと想像したりき。

そが超自然なるもの、奇異なるもの、非道理なるものを新約全書中より排除し去るも、宗教なる一種の骨格は猶ほ依然として存在せん、此骨格も亦等しく自然宗教なる名稱の下に採用せられたりしなり。

懷疑と不信心との傳播するに反對せりし哲學者は、前世紀間を通じて此種の自然的、理性的宗教こそ、定んて不信仰を停止せしむる堤防なりと信じたりき。然れども此等哲學者の計畫は、全然失敗に歸したり。デドローが嘗て一切の啓示的宗教は、これを自然的宗教より見れば異端の教のみと述べたることありしが、此語の中にある所謂「自然的宗教」とは、其特殊なる性質及び狀態を分與するが如き彼の歷史的、若くは地方的影響より超然獨立せる眞理を指示するもの。神の存在、神の性質、例へば其全智、全能、遍在、永久、自存、精靈、並に神の人格、統一、善と惡、德行と罪惡の區別の如きは、皆是れ自然宗教の範圍に屬す。所謂この自然宗教と呼ばるゝものを科學的に云ふときは、自然神學と稱するもの是れなり。自然神學なる名稱は、十九世紀の初頭に當り、ベーリ氏の毀譽紛々たる著述によりて有名とはなりぬ。

宗教學にて自然宗教と稱するものは、言語學にて普通文法と呼ばるゝものに相當す、此は自明にして且つ各文法に缺如すべくもあらぬ基礎的原則を集めたるものにして、人間の談話する言語中、斯くらん原則のみ、純粹に、完全に存在する

國語骨て存したることなし宗教に就て論ずるも亦同じ。全然純粹單純なる自然宗教の教義より成立せる宗教決して存在せざるなり。世上偶々或哲學者ありて、自己等の信奉する宗教こそ、徹頭徹尾理性に合一すと信ずるものありと雖も、而も其實これ純粹單純なる「デイズム」（自然神教）たるに外ならず。

かるが故に一切の歴史的宗教を天啓的並に自然的となす分類法に於て謂ふ所の自然なる語の意味如何と云はゞ、單に天啓を否認せしに過ぎざるなり、されば實際に此分類法を遂行したらんには、正に前述せる所と同一の結果に終るべきを了せん。即ち全宗教中、一方には耶蘇教又は或神學者の説によれば耶蘇教と猶太教他方に於ては其他世界中の全宗教が存在し、分類せらるべきや論を俟たざるなり。

天啓と自然との宗教の分類の無價値

茲を以て此分類法は、其實際的の價値如何に拘らず、科學的には殆ど何等効用あるなし。今猶一歩を進めて研覈せんか、かの天啓、啓示なることを宗教に冠するに至りたるは、該教の開祖によりて始めてなされたるものに係り、假令彼等開祖が之をなさざりしとせんも、其後繼者輩によりて冠せられたるものなりしことを知るべし。されば吾人一派の衆を除きたる外の人々は、皆共に此天啓を以て耶蘇教、猶太教の特色なりと稱するに躊躇せず。夫れ天啓的觀念は、耶蘇教、猶太教の辨解的神學者よりも、更に甚だしく吠陀經の信徒により主張せられたりしを見るならん。元來宗教開祖中にて、最も人間的なる其自らを恃む所の佛陀すら、後代の論議にかゝる記錄に於ては、恰も天啓的眞理を有したらんかの如く主張せらる。佛陀はマヌ、ゾロアスター又はモハメッドの如く、自己に自己以上高貴なる精靈の感應ありたることを主張する能はず、又吠陀の詩人の如く、神聖なる感激と神より賦與されたる言語なるものとを主張する能はず。何を以て然る、他なし佛陀の説くが如くば諸靈中に於て自己より偉大に、且つ賢明なるものなく、吠陀の神々も自己の奴隷となり禮拜するに至るを述べければなり。佛陀自身は吾人の稱して内部の光明と云へるものを主張せんと欲せらる。佛陀初めに四個の基礎的教義を述べて曰けらく、『此等の以前に知られざりし教義を、今茲に予が觀ずるを得たるは、目、智慧、知識、明確なる理解力及び光明が予の内心に發達しけるに職由す』と。佛陀は其最初に仕侍せる弟子等によりて「サルバチ（一切）

ユニヤ（智）」即ち全知と稱せられたり。然りと雖も佛陀は當時の國語をのみ使用せられたりければ、從つて又地球の形狀、天體の運行等に關し、當時の人々の間に流行しつゝありし誤謬をも亦衆人と共に免れ給はざりしならんとの說明確なるに至り、佛敎研究者は此點に於て一の緊要なる讓步をなさずんばあらざるなり。彼等の使用する一切智なる語の意味は、佛陀の敎義の主要なる原則の知識に限られ、此等の原則の知識に限り、釋尊は此等の知識に付きての全知者なりとの意味なりき、こは殆んど最近の見解なるが如しと雖も、而も此見解の新しきにせよ又古きにせよ、佛敎學者の此說は、偶々以て此等敎學者の信用するに足るべき證據たらずや。經典の一たる「ミリンダ、プラシュナ」の中に、偉大なる（ナーガセーナ龍）の心中に既に同一の思想あることを知る。佛陀は全知なりやとミリンダ王がナーガセーナに問ひ給いし時に答て曰らく、「然り大王よ、幸福なる佛陀は全知なり、されど佛陀は其全知を絕へず行ひ給ふものにあらず。乃ち熟慮して以て一切の事物を了知し、熟慮しつゝ自己の了知せんと欲する一切の事態を悉知し給ふ」と。此答の中に、感覺と理性とによりて知り得べきものと、畢竟熟慮靜思によりてのみ知られ得べきものとの間に區別を置かんと欲したるや疑を容れず。

佛陀の全知と稱さるゝ所以は、そが感覺と理性とによりて然るにあらず、唯熟慮によりて認めらるべき事物につき爾か呼ばんと欲するなり、語を換へて云へば、ナーガセーナは云はんとす、佛陀は信仰に關する事柄に於てのみ全知なりと。

佛陀の天啓說

予は婆羅門が、佛陀の頌歌より一切の人間的要素を除却し、更に佛陀經の文字の天啓的性質は、云はずもあれ、其有史以前の性質及び現世界以前の性質をすら、明白に斷定せんと如何に熱心に盡力したるかを、茲に一言述べんとす。蓋し佛陀の辯解的記事ほど、天啓說を極端に述べたるもの、世に殆どあるなけん。

天啓說は今の問題に非ず

予が疑問の研究科題中、今先づ茲に揭出せんとする問題は、殆ど世界全般の宗敎開祖若くは擁護者が、自家敎說の眞理を支持せんとて或種の天啓說を主張しけるの時に、吾人が以上敍述したるが如き爭論ある根據に基き分類をなさんとすれば、乃ち以て其必要なる目的に體達すること能はざるべしと云ふもの即ち是れなり。殆ど全般の宗敎が異口同音に主張せんとする自然的天啓又は超自然的天啓說は、設令都合よく成立せられたるにもせよ、又成立せられざるにもせ

比較神學

天啓と自然と

よ、今研究せんとする問題にあらず。天啓の眞正なる意味を說明するは、理論神學の範圍に屬す、何となれば、天啓なる文字ほど曖昧にして、且つ多樣に使用せる文字、他に類似稀少なればなり。神の眞理の光明を一時防障したる覆雲が、如何にして除去せられたるかを說明するは、云ふまでもなく理論神學の範圍に屬すと雖も、此問題よりも更に困難なるかの眞理希求者と眞理との間に、又は信仰者の心と信仰せらるゝ對象物との間に、若くは父と子との間に、如何にして嘗て彼物が存在したりしかてふ問題も亦等しく理論神學の範圍に屬するものとす。

比較神學に於て吾人の研究すべき問題種々あり。吾人は唯單に事實をありのまゝに研究するに止めんとす。若し夫れ自家の宗教を天啓的なりと思考する人々あらんか、其は彼等にとりて一の天啓的宗教たり、故に公平なる歷史家は斯の如き宗教を天啓的宗教なりとして取扱はざるを得ざりき。吾人は何等の研究を經由するなくして直ちに一方の主張を採用し、他方の主張を顧みずして不公平に或問題を解決せんことをば敢てし得ざるなり。

然れども宗教を分ちて天啓的と自然的となす、此分類法の主義は、他の觀察點

の分類の他の誤認

より之を見れば、更に一層誤れる事を知らん。耶蘇教と猶太教とを除きたる其他の宗教は(ベーリ氏の云ふ所によれば)皆予が先に自然的宗教として說明したる所の基礎的主義を呼出すだけの能力を有する其精神的作用に基づくものなりと云へることを假令承認するとせんも、耶蘇教と猶太教とは天啓的にして、他の宗教は皆總べて自然的なりとなす此分類法は、尙ほ不完全たるを免れず、如何となれば假令天啓に基據するものと雖も、全然自然的宗教より分離せられ得べきもの存するなしてふ一の簡明なる理由あるを以てなり。蓋し自然宗教の教義たる夫れ自身のみにては猶未だ眞正なる歷史的宗教を組織する能はずと雖も、而も件の教義は其天啓的宗教にすら其發生し得べき唯一の土地を供給し、此等の天啓教が根を下し、營養物を吸收し、生命を持續するに足るべき根源を供給し得べきものとす。實に自然教は天啓教の依つて起り、依つて發達する根源にぞありける。若し夫れ此自然宗教の土壤を取り去り、又は此土壤も天啓によりて供給せられざるべからざることを想像せんか、嘗に新舊兩約書の文字及び精神に反するのみならず、此眞理を賞讃し、批評し、鑑定し得ざるものによりて受け

耶蘇教

舊約全書

らるべき單純なる法式に此眞理を綴じつゝ、件の天啓的宗教を衰頽せしむるに至るべし。實に吾人は萠芽を有す、然れども天啓的眞理の萠芽が生長し得べき同種唯一の土壤を取り去りたるものなり。

耶蘇教は、猶太人ヂエンタイル人、愚夫、賢士、信者、不信者等を通じてあらゆる人々に行はるべきものにして、此等の人々の信奉する宗教中には、自然教の要素存在し、且つ眞理並に非眞理を區別すべき能力の存在を認むるを得ん。聖パウル保羅曰く、『一切のものを吟味し、其中にて良好なるものゝみを採りて所持せよ』と。以て彼等の間に撰擇の能力あることを了せん。

舊約全書に就て論ずる亦同じ。該書に於ても、等しく亦獨一眞神の信仰並に少くとも其神の敗るべからざる或確固たる性質の信仰は、何人も共に承認するなるべく、放逸なる猶太人をして「耶和華（エホバ）」を禮拜せしめたる豫言者は言へりき、此等の猶太人と雖も又此「エホバ」とヂエンタイル人の神とを區別し、眞理と非眞理とを區別するの鑑別心を有すと。ヂョシュアがイズラエルの種族を悉くシエヘムに集め、そが長老、頭領、役人及び判官等を招ぎて、以て神の前に禮拜したりし

自然宗教は天啓教の基礎

其猶太人の最古の歴史に於ける最緊要なる記錄のみを記憶せよ。さらば此說明も自ら明白なるべし。

豫言者ヂョシュアは集會したる人民に向ひ述べて曰く、『イズラエルの神は宣ふ、汝の祖先は古代に於て洪水の彼方に住居せり、アブラハム、ナコールの父たるテラーすら、洪水の彼方に住居せり、而して彼等祖先は、他の神々に仕へたりき』と。

且つ神が彼等祖先になせし事柄をイズラエル人に懷想せしめつゝ、論結して曰く、『故に上帝（ロード）を恐れ、上帝に忠實に仕へよ、洪水の彼方なる埃及に於て汝等の祖先が仕へたりし神々を捨てゝ只管上帝に奉仕すべし。

若しも汝等、この上帝に奉仕することを肯せざらんには、その仕へんと欲するものを今日直ちに撰擇すべし。即ち汝の祖先が嘗て奉仕しけん、洪水の彼方に於て尊敬せられし神々を撰ぶか、又は現住地方のアモライト人の神々を崇むるか、何れかを擇べよ。然れども、予及び予の一家は、正に上帝（ロード）に奉仕せん』と。

異神及び異信の形式を區別し、撰擇せんが爲めに、何れが天啓的にして何れが否らざるか、又何れが眞理にして何れが非なるかを査定する所の撰擇的能力あ

らんを要す。或基礎的教義は必ず眞正なる宗教に缺くべからず、並に自己の良心又は理性が眞理と矛盾するにより、熱心に反抗する所の主義若くは教義の存在することを注意せずんばあるべからざるなり。之を要するに宗教の祭壇を設け、寺院を建て、教會を興すことを得るに至るまでには、必ずや先づ宗教の基礎及び此基礎を据置く堅固なる大磐石なかるべからざるなり。即ち此基礎にして自然的宗教と稱せらるゝ以上、多少にても此自然的宗教に基かざる天啓教の存在は、到底夢想だもなすこと能はざるべし。

自己獨特の見地より宗教の分類法を案出したる最も有識なる宗教家は、疑ひもなく以上述べたる困難を感じたりしや明なり。故に自然宗教の新定義は、其自然宗教と天啓教との二個の定義の重り合ふことを避けんが爲めに案出せられき。即ち自然的宗教は天啓以前に於ての自然の宗教なりと說明せられぬ、そは族長の間に存したりと考へられ、又は耶蘇教によりて猶未だ光明を與へられず、偶像禮拜によりて下劣にせられたる原始的住民の間に於てすら存したりと考へらるゝが如き所の彼の自然の宗教是れなり。

自然宗教の新定義

三種の宗教

普遍原始的天啓は即ち自然宗教

此見解による時は、宗教を分ちて三種となすことを得べし、原始的又は自然的宗教、衰頽又は偶像教及び天啓教即ち是れ。然れども既に前述しけん如く、原始的又は自然的宗教と稱する者は、古代の詩人及び豫言者よりも、寧ろ近代哲學者の案出せる所にかゝれり。自己より超然として優絕せる力を尊敬する感情は、何れの國民の間にも存在するものにして、此感情が神話的假裝の下に隱れて伏在せざる國民とては、歷史上嘗て見ざる所とす。鋭利且つ堅固なる區劃を以て、斯の如く宗教を三分することは不可能なるべし、何を以て之を云ふ偶像的、衰頽的宗教と純粹的、天啓的宗教とは、共に夫れ自身の中に、必ずや自然的宗教の各要素を包含すべきものなればなり。

此簡單なる自然的宗教の場合に、他の神學者及び哲學者等と共に、若しも普遍的、原始的天啓を承認すとするも、而も宗教學の分類に關する如上の困難は毫も減少するなけん。玆に所謂普遍的、原始的天啓とは、畢竟自然宗教の別名たるに過ぎずして、哲學者の觀察を除きて他に何等の根據なきものとす。國語も亦人間にとりては奇異なる企圖なるを以て、此等の哲學者は直接神が人間に啓示せ

し普遍的原始的國語を必ず承認すべし。寺院の長老中にて且つ近世哲學の始祖中にて最も思慮に富み最も尊敬すべき人は、次の如き考へを懷抱せり。此國語は全知全能の創造者たる神の偉大なる作用と一致せるものにして、此神が已に準備せられたる文法と辭書とを送る代りに、國語の必要なる條件を人間に賦與せられたるなりと、幼兒は大人より果して能く僅かに不思議なるか、槲の實は槲の木より僅かに不思議なるか、將來發達し生長すべき要素を自身に抱含する細胞は、果して生命を有する運動すべき一切の動物に比し一層僅かに不思議なるか、此疑問は又移して以て宗教に適用せらるべし。神が直接啓示したる普遍的原始的宗教、否な寧ろ神が無神論者の一群に啓示せる此普遍的原始的宗教は、吾人々類の知識を以てすれば、即ち是れあらゆる困難を解釋する最良の解決なりとす。然れども吾人々類以上の高尚なる知識は、史蹟の上に於て假令神が吾人より遙かに距たり給はずとするも、若し偶然に吾人が神を求め、神を見出し得たらんには、乃ち茲に吾人は神を求めざるべからずてふ教訓を吾人に與へ、吾人に教ふべきなり。

國民的宗教と個人的宗教

普遍的原始的天啓の假定說と其困難なることに付き、更に論述せざるべからざる所あり。宗教に於ける科學的分類の問題は、他の純粹なる假定說によりて決して解決せられ得べきものにあらざることを說明せば足れりとせざるべからず。

一見更に科學的らしき他の分類法は、國民的宗教及び個人的宗教となすものは是れなり。前者は其宗教建設者が、之を信仰する人々にも亦吾人にも等しく不明なるが如き宗教を指し、後者は此宗教が始めて建設せられたりと想像せらるゝ創設者の名稱を有する所の宗教的組織を指す。吾人が最も能く知る所の宗教に就て云はゞ、古代の婆羅門、希臘、羅馬、チユートニツク、スラブ、セルト等の宗教は前者に屬し、摩西、ゾロアスター、佛陀、孔子、老子、耶蘇、モハメット等の宗教は後者に屬せり。

此分類法は、よし困難なく一般に適用せられ、或目的の爲めに必要なりとせんも、更に比較的の精神にて之を應用せんとする時は、又以て其不可なるを了知すべし。婆羅門、希臘人及び羅馬人等が、その宗教の創設者は何人なるか、何人が最

初にインドラ、ゼウス若くはヂユピターの存在を主張したりしや等の問を發せられたる時に、如何に答ふべきかを知らざるや論ぜずして明白ならん。されど古代の事柄を研究する人々は、古代アリヤン族の崇拜が、印度、希臘、伊太利に於て有したりし所の、種々なる形式の中にも、猶且つ個人的精神、各派及び風土等の影響感化を發見するを得。さりながら吾人が所謂個人的宗教の建設者は何人なりやとの質問をなさんに、其宗教の教義新しく、又其宗教が新しき神を説くとも、吾人は常に否定的答案を受くるを例とす。孔子は斷乎として云へりき、「予は述べて作らず」と、佛陀は又「我は是れ光榮ある先覺者、調御師等の長き連鎖に於ける一鎖たるに過ぎず」と云へり。耶蘇は曰く、「われは法律又は豫言者を完成せんが爲めに世に來れるものにして、これ等のものを破壞せんが爲に來れるにあらず」と。モハメットすら自己の信仰をアブラハムに歸せんとせり。蓋しアブラハムは一名イブラヒムとも呼ばるゝものにして、モハメットが稱してモスリムと名付けて、神の朋友なり、猶太人にもあらず、耶蘇教徒にもあらざる人とせり。このモスリムは即ちメッカに寺院を建立しけるの人なりとモハメットによりて

多神的と二元的と一神的宗教

單一的神教と

主張せらる。宗教に於て想像せられたる創設者の特殊なる點は幾何なりや、彼は其先輩者より幾何の感化を受けしか、又其教義に後の門弟等が如何ばかり添加したりしか等の問題を解決せんは殆ど不可能のことに屬す。否な如何なる宗教と雖も其宗教が根を培殖し、營養分を吸收したる其基礎的土壤を缺如したらんか、決して繁茂し、發達すべくもあらざりしや、もとより言を俟たざるべし。

吾人は以上の分類を以て猶ほ未だ全般を講述し終れるにあらず。或目的上殊に切實にして極めて必要なる分類法は、多神的、二元的、一神的の三種に區別すること是れなり。若しも宗教は、主として「高尚なる力」を信仰する上に基くものなりとせば、所謂この高尚なる力の性質は、世界の宗教を分類するに資用さるべき主要の特質たらざるべからず。斯の如き種類の分類法も亦必ずしも全然無用のものなりと云ふを得ず、或目的の爲めに敢て其用なしとせざるなり。宗教の神の數や一致すと雖も、他の點に於て全く異種別樣なる宗教を分類するに、勢ひ斯の如くせざるべからざるもの即ち此謂なりとす。

此外猶ほ單一的神教と無神教との二種の分類を此上に附加せざるべからざ

無神教

る必要あるべし。單一的神教即ち「ヘノセイスチック」と「ポリセイスチック」即ち多神的宗教とは異なる所存せり。勿論前者も、其種々なる神々の存在を認め、神々の名稱を許すと雖も、各々の神を他の神々より獨立して示し、唯一個の神のみが禮拜及び祈禱に際し、そが崇拜者の心中に描かるゝと主張するなり。この性質は吠陀の詩人の宗教中に於て甚だ顯著たり。假令多數の神が異なれる詩歌に祈求せらるゝと雖も、其何れが優れたるかにつきての順次を、彼等の神々の間に定められあらず。されば自然の變化する種々なる光景により、人心の種々なる懇請によりて、時としては青空の神たるインドラ、火の神たるアグニ、古の天空の神たるバルナ等が示されたるなり。此等の神は何等反對せらるゝことなく、尊上として崇拜せられたりき。斯の如き宗教の特殊なる狀態、斯の如き單一神の崇拜は、恐らく到るところに多神教（ポリセイスム）發達の第一階段をなし、特別なる件の一名稱を要するものなりとす。

無神教は全然不可能なるが如し。然れども佛教が最初より純粹なる無神教なりとの事實は、今に至るも爭論絕へず、尙ほ未だ排斥せられたる議にあらざるなり。佛陀の精神に反對する彼の間斷なき神話的誤說によりて所謂神性（ゴッドヘッド）なる思想は、少くとも習しが間、全然人心の宮殿より排除し去られたりき。耶蘇教の起る、以前に、嘗て敎へられたる最初の道德は、神々を空想なりとして排擊し、祭壇なるものあるなく、且つ知られざる神に對し、祭壇をすら有せざる人々によりて敎へられたりしなり。

予は次の講義に於て、宗教の科學的、原始的分類は、言語に於ける夫れと相同じきことを述べ、殊に人類智力の上古史に於て、言語宗教及び國體の間に最も密接なる關係の存することを論ぜんとす。此密接なる關係は、人類學者が人類を分類せんとして、血液、皮膚、毛髮等の物質的材料を應用したるが如き夫等の材料とは、毫末だも關係なきものなり。

宗教と國語と國民性との關係

第三章

苟も眞理を愛し、科學を研究するものは、宜しく自己の獨斷若くは豫想等を以て輕々しく事物を斷定することを禁ずべきなり。予も亦此方法によりて宗教學を研究するもの、されば、全宗教界が數個の大陸に分類するに足るべき自然的分界線を發見するの、遠きにあらざるを了ぜん。勿論予は茲には唯だ古代宗教即ち宗教思想の古代史を論述せんとするの意なり。此原始時代は有史以前にあらざるや云ふまでもなしと雖も、少くとも純粹なる異教主義(メスニッム)の時代なりと云ふを得べし、何となれば此時代の出來事は、單に國民の一般的運動によりて充され、個人的作用、黨派的作用又は國家的作用等存在せざりけるを以てなり。斯る原始的時代に於ける國民、即ち是れ國語なりと稱せらるるを得ん。古代人類史に於ける吾人の最良著述に於て、國語の地圖は今や國民の地圖の地位に立てり。然れども此原始時代に於ては、其國民即ち是れ宗教なりと稱せらるゝことも亦等しく至當なりとす、何を以て然るや、當時に於ける宗教と國民性との關係は、國語と國民性との關係に比して更に一層密接なる關係ありたればなり。

予の云はんと欲する所を明白に說明せんが爲めに、茲に國語、宗教及び國民性の間に存する眞正の關係につき、或獨逸の哲學者が觀察せし其觀察を、出來得るだけ單簡に參考引用せんとす。斯の如き觀察は近代の人類學者が餘り注意を拂はざりしなりしも、予は之を以て無價値のものとは信ぜざるなり。

夫れ國民(ネイション)を作るに至りしものは何ぞ、人民の眞起原は如何、人類は如何にして人民となりたるかと疑問を初めて提出せしものは、實に獨逸の最も深奥なる思想家の一人たるシエーリングその人なりけり。氏の此疑問に與へたる答案は、千八百四十五年伯林に於て、予が親しく此老哲學者より聽講しげるの際に一驚を喫したりしが、爾來國語と宗教との歷史を研究するに會し漸次感服の度を加ふるに至りぬ。

蓋し人間は群居的動物なり、かの蜂の群、象の群の如く本能的に群居するを常とす、然り而して此本能的性質こそ、人間を群居して人民(ピープル)たるに至らしめたるものなりと云はゝ、猶ほ未だ充分明了に理解せられざるべし。此言は、則ち人類の

一大群居を說明するに足らん、されど決して各個人民の組織形成を說明すること能はざるべし。蜂は各自の女王に從ひ、各自の政府に順ひつゝ、幾多の群蜂に分散集合するが如く、人間も亦各所に群居して以て各自異なれる人民組織をなす者なりと云ふも、而も吾人の解決せんとする問題を解決する上に於て一段の進步を見たりと許すこと能はざるなり。殊に古代に於ける同一政府に對する忠順は、茲に國民性即ち國體の原因をなしたるものと云はんよりも、寧ろ國體の結果たるべし。之に反して書契時代に於ては、野蠻殘忍なる勢力、王朝の結合其他有力なる影響によりて生じたる混亂甚だしきを極め、其勢ひ人民の自然的發展を全然抑壓し、同一人民すら數個政府に分裂し、數個の人民も同一支配者の下に統一せらるゝが如き狀態なりしを知らん。

何者か人間を結合して人民たらしむるやと云へる吾人の疑問は、最古時代に關係して考究せられざるべからず。人間が猶ほ未だ王若くは統轄者を有せざりし以前に當り、人間が結合して人間團體をなすに至りたる原因果して如何。此人民の結合は血液の交通共有によりしや、予は之を疑ふ。夫れ血液の交通共

宗教は國語よりも有力なる國民の原因

希臘國民

有は、家族、部落又は種族を生ずるを得、然れども人間を結合せしめ、之を人民たらしむるに至る所の、かの高尙なる、純粹なる、道德的感情を發生せしむる能はざるなり。

夫れ人間をして人民たらしむるに至る所以のもの、他なし、國語と宗教となり、然りと雖も宗教は之を國語に比す、更に有力なる原因たり。北部亞米利加の原始的住民の諸國語は、もと是れ唯一形式の國語が種々に變態せし各方言たるに過ぎざりき、されど此等の方言を使用したりし人間は、決して一の國民、一の人民に結合するに至らざりしなり。彼等は部落たるのみ、要唯だ水草を追ふて彷徨する所の部落たるに過ぎざりき。彼等の間には一國民たる感情存在せざりしなり、所以如何となれば、彼等は其同一神を崇拜する感情なかりければなり。之に反して希臘人は、各部落の間に甚だ特殊にして、殆ど相互に理解し得ざらんかとまで思はるゝばかり相異なる各種の方言即ちイーオリック、ドリック、アイオニック等の部落的言語を使用すと雖も、彼等は常に一大希臘國民なりと感じたり。此感情は彼等が種々異なる專制者に支配せらるゝに至れる時に際しても、

將た數多の共和國に分裂する時に當りても毫末の變更だもなく、依然として堅固に持續せられたるなり。果して然らば其使用方言異なり、其王朝異なり、其種族の領土異なり、其各國家相互に猜忌するに拘らず、一國民を組織する所の此理想的統一の深き感情が彼等希臘人の心中に保持せられたりし所以のもの、そも何の理由に因るか。曰く、希臘人の結合原因は、其人民間に原始的宗教存したりしによる。其記憶を逸する程の久遠刧より神人の偉大なる祖先に尊敬を拂來れる所の共通的忠順の激烈たる懐想、彼等希臘人の間に存せしによる。彼等がドゾナの舊きゼウス即ちバンヘレニックのゼウスを信仰しけるによるなり。

猶太

國體即ち國粹の基礎をなす者は國語ならずして宗教なりてふ此見解の最も顯著なる證據は恐らく猶太人即ち神より撰ばれたる人民の歴史中に發見せらるべし。猶太人の國語は、フェニシアン、モアバイト其他近隣の種族の國語と大に異なるものにして、之を希臘方言の相互に異なるに比して其相違の程度稍や少きの差あるのみ。然れども耶和華の禮拜は、猶太人をして特殊の人民たらしむ、即ち猶太人は、假令其國語の上に於て、モアバイト人及びアルとアシュトレートの禮拜者と區別こそせられざれ、其信仰する耶和華神によりて、全然此等の人民と區別せらるべきものたり。イズラエルの水草を追ふ所の部落が變じて一國民となり團結するに至りたるは彼等が耶和華神を信仰せし其宗教的感情に職由するなり。

シエーリングの説

シエーリングの云ふ所によれば曰く、『部落の間に行はるゝ神話に關し、其部落的神話が確かに定めらるゝに至れば、茲に始めて部落は變じて一國民となるなり。故に此神話は國民的分離の惹起しけん後に發生したるものならずして又人民が既に一人民となれる後に生したるものにもあらず。且つ此神話なるものは、一國民が猶ほ未だ顯然たらざる一部分として全人類の間に隱然包含せられつゝあるの時に決して發生せざるものとす。實に神話の起原は一國民が其確固たる存在を有する以前、即ち人民が將に分離し、將に國民的組織をなさんとする其過渡時代に存するものたり。人民に於ける國語の起源亦同じ。即ち一國民の國語は、其國民が鞏固なる地位を占むる其の同時に於て確定せらるゝなり』と。

ヘーゲルの說

シエーリングの敵手たるヘーゲルも亦同一の結論をなせりき。即ち其歷史哲學中に於て述べけらく、『夫れ神の思想は、國民の依つて組織せらるゝ一般的基礎たり。宗教的形式に異なることあれば國家及び國家組織の形式にも均一の異狀あり。國家は宗教より發生す、アセニアン及び羅馬の國家は、此等人民の特殊なる異教によりてのみ存在す、實に現今天主教的國家（ローマンカトリック）は新教的國家（プロテスタント）と異なりたる天才を有し、且つ同一ならざる組織を有せり。一國民の天才は、種々なる方面に於て自己の特性を自覺するに至る所の一定有限なる個々の天才なりとす。即ち其國民の道德的生活政治的組織、藝術、宗教及び科學等の性質中に於て該國民の特殊性質を自覺する天才、是れ之を國民的天才と云ふ』と。

法律史學者の說

如上の說明は、唯是れ哲學者のみの思想にあらず。歷史家及び殊に法律の歷史を研究する學者の如き亦其研究の結果、之と同樣の結論に達せり。此等歷史家の或人々は、法律を以て社會組織の基礎なりとし、國民を結合する連鎖なりと信ず、然れども少しく歷史の眞相を考究する人々は、法律即ち少くとも古代の法律は、其權威と勢力、及び眞生命とを宗教より賦與せられたることを了せん。エッチ、メーン氏の說

ッチ、メーン氏が、嘗てマヌの法典を論ずるに當り、神が其法典の全部を人民に口述したるものなりてふことを以て、法律に於ける近代的起原の思想なりとして排斥せられたるは、疑ひもなく正當なりとす。さりながら法典の著者は、普通人民よりも一層密接なる關係を神に有すと云へる信仰は、或多種國民の舊古傳說中に普ねく行はれたりしなり。「ディオドルス、シクルス」中にある有名なる文句によれば、埃及人は其法律を以てヘルメスがムネビスに傳授したるものと信じクレタン人はミノスは其法律をゼウスより傳授されたるものと信じラセデイーモニアン人は又之をリクルグスがアポロンより受けたるものなりと信仰したりき。アリヤン人の信仰する所の如くば、その法律を作成したるザスラウステスは、之を善良なる精靈より授かれるなりと云ふ。又ゲティー人の信ずる所によれば、ザモルクシスは其法律をヘスティアなる女神より受けたりと稱し、猶太人の信ずる所にては、摩西がイアオなる神より其法律を受けたりと稱す。

古代に於て宗教は、神聖なる感化力として一切の生活的關係並に社會的組織の全般を支持し、且つ其基礎をなすものなりとの意見は、エッチ、メーン氏の說明

を得て初めて明確なるに至りぬ、そは此意見を强烈に主張し辨明せるもの、氏の如きはあらざるべし。即ち論じて曰く、『古代の制度、組織、國家、種族及び家族等を神聖にし、且つ統一結合せしめたる者は、實に超自然的の總括者たるべし』『群居の基礎は是れ、家族なり、家族の結合は一家をなし、一家の結合は種族をなし、種族の結合は國家をなす』と。『家族は同族によりて結合せらる』『一家、種族、國家亦推して知るべし、他人が此等の血屬團體に入らんには、彼等が此他人に同族たるを許したる上ならでは不可能なりき』。『爾來漸く文化に進むに從ひ、法律は宗教と分離を告げぬ』と。されど、當時に於てすら爐邊は彼等が最初の祭壇にして、父は最初の長者たり、而して其父の妻及び子孫並に奴隷等は、この神聖なる火即ちヘスティアと稱する家の女神を周匝圍繞したる最初の結合たりしことを證明すべき形跡尙宛然として存したりき。このヘスティアなる家の女神は、後遂に人民の女神たるに至りぬ。人事の大禮たる彼等の婚姻が、誓契以來受けたる所の宗教的性質を現時尙ほ能く保存しつゝあるなり。

此等の太古時代に於ける宗教とは、果して如何なるものなりしかにつき一言

せざるべからず、茲に所謂太古の宗教と云ふと雖も、そは或靜的勢力の意味にはあらずして、實に人民中に活動しつゝある所の勢力を指して稱せるなり。又茲に云ふ宗教とは外觀上接觸するを得て他人にも傳達し得べき所の確定せる且つ腹藏なく談話せられたるものゝ謂たり。此意味に於て其宗教の甚だ狹少なる範圍に限られたることを見るべし。神の名稱として承認せられたる二三の語、物質的意味より漸次高尙なる精神的階級に昇りたる二三の形容詞句、此等の語句は、もと身體の力、光明又は純潔を顯はすものなりしが、やがて偉大、善良、高貴等を意味するに至り、最後に變轉して犧牲、祭壇、祈禱、德、罪、身體、精神と云へるが如き思想を示す所の、多少宗教上の專門的言語とはなりつ。以上の所說は古代に於ける最初の宗教の外部的構造をなせるものとす。斯般の簡單なる宗教の表示を一瞥すれば、何故に宗教は此等の太古時代に於て、人類言語の神聖なる一方言なりと稱せられ得べきかを直ちに了解するを得べく、又何故に古代宗教と古代國語とは最も密接に結合し、且つ宗教が其外部的文句を得んが爲めに多少適當なる國語の材料によるかを了知し得ん。

言語學と宗教學との關係

若し夫れ古代宗教が國語によれるの事實にして理解すとせんか、次に述べん事實も亦勿論自明に屬すべし。即ち如何なる分類法が言語學上最も必要なりとせらるゝも、其方法は又宗教學に於ても等しく必要なることを證明せずんばあらず。各國語間に眞正なる原始的關係ありとせば、そが同一關係は又世界のあらゆる宗教少くとも最古の諸宗教を結合せざるべからざるなり。

諸國語の關係

この故に宗教の適當なる分類法を案出するに先ちて、須らく諸國語の原始的關係につき、吾人が現今有する所の知識の、事情に就て數言を費さゞるべからず。

亞細亞大陸と歐洲の主要たる半島とを限り研究する時は、その推送せらるゝ人類言語の廣大なる沙漠中に於て、三個のオーシスの形成せられたるを察知すべし。あらゆる歴史の開始せられし以前に當り、國語は此オーシスの中に於て傳說的となり永久不變のものとなれりき、即ち人類の常に動搖し、絶へず變化する言語其ものゝ本元性と全然同じからざる所の一の新しき性質を帶びたりしなり。此等三個國語のオーシスは、チューレーニアン、セミティック及びアリヤン即ち是れ。此等三個のオーシスの中央、殊にアリヤン及びセミティック族中に於て、

其國語は自然の發達を失ひ、妨壓せられ、永久不變的となり、固定的となり、歴史的言語たるに至りぬ。國語に於ける這般の集中と傳說的保守とは、宗教的並に政治的影響の結果たること前述の如し。是に於てか予は、今や宗教に於ける三個の獨立せる殖民地即ちチューレーニアン、セミティック及びアリヤンの明白なる證據の存しあること、即ち此等の宗教的三大殖民地は、國語の三大殖民地と相隨伴せるものなることを示さんとす。

支那古代の宗教

蓋し支那語は、チューレーニアン語の中にて最古の代表者たること、最早疑ふべき餘地なきを以て、予は茲に支那語につき研究を試むべし。支那には何等着色潤飾なく且つ詩的ならざる宗教往昔に存せり、予は此宗教を呼んで單綴音の語なりと云はん、何となれば此宗教は、空、太陽、暴風、雨、電光、山、河、を代表するなる精靈の一群を禮拜するものにして、此等の精靈は各自一方に分離峙立して、之を結合統一するに一層高尚なる主張なく、又相互間に何等の吸引力存在せざればなり。加之らず支那に於ては祖先の精靈又は死者の精靈を禮拜することあり、支那人は此等の精靈が人事の出來事を認知し得、善惡に對し活動すべき或特殊の勢力

を有するものと信ずるが故のみ。此自然的精靈を禮拜し、人間を禮拜するところの二重の禮拜は、實に支那に行はれたる古代の一般的宗教をなすものにして、餘勢今日に至るも消盡するなく、現に下層人民の間に蔓延しつゝあり。然れども此等下層人民の宗教の上に、半ば哲學的にして半ば宗教的なる信仰を奉ずる宗教存す、即ち二個の高尚なる勢力を信仰するもの是れにして、此二勢力を哲學の語を以て云へば形式及び材料を意味し、倫理學の語を以て云はゞ善及び惡を意味し、宗教並に神話學の古代語を以てすれば、天及び地と稱せらる。

孔子は述べて作らず

支那の古代に行はれたる一般の宗教は、孔子の著書若くは之よりも近代に屬する、教により知らるべきと誤りなし。孔子は一新宗教創立者なりと稱せらるゝと雖も、實は古き一宗教を新しく說敎したる人に過ぎざりしなり。故に孔子自身も熱心に謂つて曰く、『予は傳導者なり創設者にあらず』と、又曰く、『予は自己の知る所を人に敎へ、自家に存する眞理を他に傳ふるに過ぎず予は一の新事物を創造すること能はず唯古代の事物を信仰す、故に古代の事物を敬愛す』と。

閃族の古代崇拜

次にセミティック族の古代の崇拜は、數多の神の名稱を有するを以て、特に顯著なることを知るべし。此種の禮拜は、バビロニアン族、フエニシアン族、カーセヂアン族の多神敎並に猶太敎、耶蘇敎、回々敎の一神敎的信條中にも亦認められん。國語を異にし文學を異にし、一般文明を異にし且つ時代を異にするに從ひ、此等を異にする國民の宗教に特質を附加せんは、殆ど不可能のこととす。然れども全セミチック國民の禮拜、宗教の特質を一言以て示さんと試むる時は、則ち、歷史に於ける神の崇拜なりきと云ふも不可なきに似たり、別言すれば自然の勢力を支配するものとして神を崇拜するよりも、寧ろ個人、種族及び國民の運命を統御するものとして之を崇拜する所の、所謂「歷史に於ける神」の崇拜なりしなり。

セミティック族の崇拜せし神々の名稱は、殆ど皆道德的性質を表示せる言葉なり。此等の言葉は、强者、帝王、君主、優者など云へる意味を有し、稀にして神聖なる人格を有するものとなる、即ち其外觀に於て或一定の形式を有し、又は眞正なる戲曲的性質の顯著なる特性によりて容易に認めらるべき神聖なる一定の人格を有すること稀にしてあり。故に古代のセミティックの神々は、相共に混同するの弊ありて、單純なる神々の崇拜より獨一眞神の崇拜に移轉せんには、さまての

努力を要せざりき。單純なる神々の崇拜は、單調なる沙漠に於ては殆ど隱微の中に、一層著るしく一神の崇拜と變ずるに至りぬ。セミティックの諸宗教は神々の名稱に女性の名稱を用ゐず、又其男性的神々は古代の無性なる神々の漠々たる活動を代表したるものにあらずとのことを附言し得べしとせば、以上の事實や幾分の眞理を包含すべく、且つセミティックの宗教が、本能的に一神教なりしことにつき、ルナン氏の掲げしが如き多數の制限を要せざるべし。

阿利耶族の古代崇拜

最後にアリヤン族の古代崇拜を觀察せんに、該族の子孫は勇敢にして世界中到る所に分布し、或は印度の鄙間、或は獨逸の森林中に於ても、神なる共通稱によりて、直下に其アリヤンたるを承認し得られん。此神の名稱は、もと自然の勢力を表示したるものにぞありける。蓋し彼れの禮拜は、既に屢々論ぜし如く自然の崇拜にはあらず。然れども此宗教を一言以て覆へば、予は敢て「自然に於ける神」の禮拜なりと云はん。語を換へて之を云はゞ、人心の聖殿なる被物の後に隱るゝと云はんよりは、寧ろ自然の端嚴の背後に顯はるゝ神の禮拜即ち是れなり。アリヤン殿堂に祭れる神々は甚だ顯著なる特殊の性質を帶ぶ、故にアリヤン人

宗教の三種分類は國語の分類の如し

が一神教に改宗せんには甚だしき努力を要すべく、偶像の破壞的革命若くは哲學的失望を隨伴せずには、その効果の顯はるゝこと極めて稀少なりとす。

此宗教の三種類は、決して誤らざる、恰もチューレーニアン族、セミティック族及びアリヤン族の三國語の分類が決して誤らざるが如く然り。此等の三大種族は古代の世界史上に於て、特に三個の出來事を顯著ならしむ。謂ふ所の顯著なる出來事とは何んぞ、人類全般を決し、吾人の國語、思想及び宗教中に猶ほ其結果を殘留する所のものの是れ。

三種分類以外の宗教

國語、思想及び宗教中に此等の三大指導者たるチューレーニアン族、セミティック族及びアリヤン族が留めたる混亂は、其實全く混亂にはあらざりしなり。此等三種の水道が、依つて以て分出したる所の國語の源流は、滔々と流れ、又此等三種の祭壇の火が斯くして以て點ぜられたる宗教の神聖なる火は、假令灰と烟との中に隱れて見えずと雖も、尙ほ未だ消盡せず。世界中到る所に國語あり、宗教ありしと雖も、此宗教たり國語たりは自然に產出する野生のものにあらざりき。此等の宗教と國語とは歷史を有せず又歷史を殘さゞりき、されば支那人、セミティ

ック人、アリヤン人の國語及び宗教の研究に適用せらるべき所の、その特殊なる科學的取扱を受くること能はざるなり。

チューレーニアン族

國語を研究する人々が、何故に言語の部屬を分ちて三個以上となすことを得ざりしやを疑ふものあり、否な寧ろ國語研究者が單に之を二個の部屬に分類するに止まるやを疑ふものあり。爾かく國語を二分類する所以は、支那語がチューレーニアン語の二個の分派たる北部及び南部チューレーニアンの中心をなす所以の理にして、充分説明せられざる限り、尚ほ未だ嚴格なる種族の意味に於て、チューレーニアン族が一種族をなすと許すを得ざればなり。搗てゝ加へて支那語は實際上未だ以て確定せられざりし言語を最も夙く確定したりけるをや、斯かる未定の言語は、後代に及び漸次確定せられ、漸次傳説的となりぬ、即ち北部に於てはトゥングシック、モンゴリック、ダータリック及びフォンニック語となり、南部に於てはタイック、マレイック、ボーティヤ及びタムリック語となりたりとの事實を證明せられざる以上、チューレーニアン族は猶ほ嚴格なる家族の意味によりて、未だ一家族たらざるべければなり。

學者が二又は三種以上に分類するを發見せざる理由

何故に學者が、此等言語の二若くは三種の大種族以上のものを發見する能はざるかと云へる理由は極めて簡單なり。他なしこれより多くの家族存在せず、從つて又發見することを得ざるが爲めのみ。國語の種族は甚だ特殊なる組織なり。此等の種族は國語發達に於ける除外例にして、決して其原則にあらず。予の判斷し得る所によれば、人類の言語に野生的發達及び衰頽の原始的狀態を殘存せしめ得れども、而も斯る必要絶へてなかりしなり。

若し夫れ人類の言語なるものが、セミティック族、アリヤン族及びチューレーニアン族の祖先によりて純乎自然的の發達を遂成したるものにあらずとせんか、然らば則ち各國語は、總べて朝生暮死的に果敢なき運命を持續するものとなりなん。即ち其各時代に希望のまゝに、或時は得、或時は失し、又或時代の間稍や永續することあるべきも、或時期の後には又再び解放して宛ら地平下を流るゝ水によりて氷片の洗ひ去らるゝが如く、遂に舊態の存するなきに至るともなきにあらざるべし。果して然らば吾人の國語に對する觀念は、今現に抱持しつゝあるものと全然異なるものとなりたらんも計られじ。斯くして吾人は、今や如何な

る考を抱き、如何なることを研究すべきか。

社會的、宗教的、政治的又は其他の影響を受け、其自然の發達を阻碍せられたる此等の例外的國語よりして國語とは果して如何なる性質のものたるべきやとの思想を形成し得るものとす。斯くて此等二三の例外的國語の如く、總べての國語も亦爾かく變遷發達せざりしかの問題を研究せざるべからず。吾人が何故に一切の動物が家畜的ならざるかと疑ふは、又庭園に生したる白牡丹の外に、牧場、森林等に野生の發達をなす同一無數の白牡丹存在すべきかの理由を疑ふに等し。

チューレーニアン族の研究

アリヤン族及びセミティック族の中に於けるが如く、強大なる原始的中集力の存せざりしチューレーニアン族に於ては、其範圍こそ狹少なれ以て能く國語の自然的發達に於ける形跡を認むるを得べし。斯くの如く大結塊をなせる同種の言語より種々に殖民せるがあり、されど其れ等の分出的國語はヘブリュー語と亞剌比亞語並に希臘語と梵語との關係の如き確固たる特徴を示さず、唯た其分出的國語中には、獨立的發達の一新時機に次て生じたる原始的中集によりて說明さるべき、孤獨的符合と一般的構造の類似とを認め得るに過ぎず。若し夫れ北部チューレーニアンの諸國語に貫通したる特殊の性質を認めざらんか、則ち是れ自儘なる盲目なりと云はざるべからず、ハンガリアン、ラポニアン、エストニアン、及びフィンニッシュの各國語間に存する其符合點を說明せんと欲す、此等各國語の依つて分出したる言語の甚だ舊き中集作用を說明するにあらずんば、殆ど不可能たるべし。南部チューレーニアン族の諸國語中に、此等分出的國語の其以前の共有的性質を證明するに足る二三遺物の存在せることを了せん。南部チューレーニアン族の國語と北部族の國語との合一點は、實に支那語にあり。如何となれば、支那語が、滿洲、蒙古、暹羅並に西藏語の根底をなすと云へる事實は、エドキンス氏其他の學者の考證によりて刻々益々明白となり來れるを以てなり。

此等の疑問を明確に斷言すること急激ならざらんを要す。獨斷的懷疑論によりて擾亂せらるべき自由討究の進路を認許すべきにあらざるなり。吾人は事實の眞相より當然發見するを得ざる底の證據を求むべからず。殊に眞理の發見上、吾人を嚙着し去る所のものは、之を照破する所の眼鏡よりも必要なりと

亞弗利加の各種古言

云へることを承認すべきにあらず。

アリヤン語、セミティック語及びチューレーニアン語の本據地たる亞細亞大陸より、轉望一過せんか、等しく各種方言の比較研究は、亞弗利加に於ても亦該語の集中を明白に證明せずんばあらず。赤道地方の人民よりケイスカンマ人に至るまで一帶に談用せらるゝ所の同樣なるバーントゥの諸方言を見れば、以て此亞弗利加語の集中せる作用を察知し得べし。バーントゥ又はカフキル語の北部に當り、セミティック語の獨立せる殖民地を、ベルベル並にガルラなる方言中に發見せらるべく、又バーントゥ語の南部に當り、ホッテントット語とブシユマン語とを發見せられん。ブシュ語は未だ分析解剖せらるゝに至らずと雖も、ホッテントット語は北部亞弗利加に使用せらるゝ國語に關係あるが如く想像せられ、且つカフキル族の侵入によりて茲に北部亞弗利加語より分離するに至れる者なることを知らなん。或學者はホッテントット、ヌビアン方言及び古代埃及の語間に或關係の存するが如く想像する者あり、即ち此等の學者は、其眞正關係の如何を問はず、亞細亞大陸の外にあつて國語と宗教とに他の原始的殖民地の存

亞弗利加人の宗教

在せる國語を想像したるなりき。

亞弗利加大陸の諸國語は、以て亞弗利加の原始的住民の使用にかゝる原始的の音節を一般に吾人に認めしむることを得と雖も――そは國語中に何ものも破壞すること能はざる持續性存在するが故に――吾人は亞弗利加人の宗教の發達及び變遷につき多く知ること能はざるなり。亞弗利加の某々地方に於ては、回々教、耶蘇教の爲めに、古代の神々に關する紀念破毀せられ、彼れ宣教師及び旅行家が、ヅールー人又はホッテントット人の宗教的狀態を記載せんと試みたる時に於てすら、彼等は單に亞弗利加人の信仰の最新なる形式をのみ知ることを得るに止れり。而して此等の形式は、殆ど奇異なる諷刺畫に變更せられつ。古代亞弗利加の宗教に關し一の記錄存す、埃及の紀念碑是れなり。埃及には材料豐富且つ寺院の廢趾少からず、加ふるに無數の彫刻及び半ば讀み且つ解さるゝ其紙草より製せる紙片存すと雖も、吾人は猶ほ未だ此奇異にして而も偉大なるものに對し、嘗て生命を賦與したる心臟の鼓動に接近することの頗ぶる遠かるを白狀せずんばあらじ、換言すれば此等の偉大なる紀念物が、嘗て埃及に嚴然

米國の宗教

言語と宗教との材料の有無

宗教研究者の注意

として存在せし當時の狀態を、明白に認知することを得ざるなり。

亞弗利加に就て論じけん所は、移して以て亞米利加にも適用せらるべし。北亞米利加に於ては、往昔人民が移住せし證據として古代の國語を提供せられざるにあらずと雖も、古代の宗教に至りては何等の材料だもあるなし。南部亞米利加に於ては、二個の言語的及び政治的中心點あり、メキシコ及びペルーに於ては、以て吾人の信用を拂ふに足るものなきを常とするに拘らず、而も其奇異なる古代宗教の信仰並に禮拜の組織に關する傳說を發見することを得べし。

言語學が大切なる問題を提出するを得べきだけに充分なれども、而も此問題を解決すべく猶ほ充全ならざる材料を有する數個の場合に於て、宗教學は全然何等の材料をも供給せざるなり。古代の寺院は破壞せられ、古代の神々の名稱は明白に世界の或部分に於て全く忘れられたれども、此方の地域に於ては變化こそしつれ、最古の傳說を支持しつゝある方言の存留せるを見るべし。

若し夫れ以上の事實にして然らずとせんも、予の考ふる所の如くば、苟も宗教を研究する人々は、言語研究者の鑑に習ひ、且つアリヤン族、セミティック族の宗教の比較研究に從事することこそ最上の方法なれと信ず。アリヤン諸國民の宗教も亦彼等の言語の間に存すると等しき同一眞正の關係によりて結合せられ、そが同一形體より種々に變化したるものなることを證明し、猶ほセミティック族に關しても同一事實の證明せられ得るとせば、その研究せらるべき原野は頓に眼前に展開し來り、之を注意して清潔にし耕作せんには、必ずや數代に涉る學者の研究を俟たざるを得ず。予の信ずる所によれば此の原始的なる關係は、立證せられ得べし。祈禱(プレイヤー)、犧牲(サクリファイス)、祭壇(オールター)、精靈、法律、信仰と云ふが如き最も必要なる宗教上の要素を表示せる言葉、並に主要なる神々の名稱は、アリヤン族、セミティック族の各國民の間に保存せられたり、然り而して此等の遺物につきては一の說明を俟つて明了なるを得ん。此說明にしてなされんか、チューレーニアン族の宗教の比較研究は、一層能く成効を期待せらるべし、何ぞやセミティック、アリヤン、チューレーニアン族が、未だ分裂せず、其國語、宗教、國民的感情も亦未だ異にせざりし時に際し既に原始的なるアリヤン宗教及びセミティック宗教のみならず、チューレーニアン宗教をも共に存在したりきとの事實は毫も疑ひを容れざればなり。

阿利耶族

先づ吾人の祖先たるアリヤン族に就て論述せん。予が數年前、この場所に於て論究したりし講義中に於て、アリヤン族が未だ分裂せざりし以前に當り、アリヤン族の生命は、果して如何なるものなりしやに付き其梗概を擧示したりき。即ち梵語が印度に於て使用せられし以前、希臘語が小亞細亞及び歐洲に於て使用せられし以前に當り、そのアリヤン族の生命につき論ずる所ありたりしなり。此梗概の要略と其中に充滿せる着色とは、單に國語より借り來りたるものなりとす。若しも佛蘭西語、伊太利語並に西班牙語の中に同一の形式にて存在するあらゆる言葉をとりて研究すれば、伊、佛及び西語にも使用せざれ、此等のローマンス方言に先ちて起りたる國語を使用したる國民に、如何なる言葉が知られ、又如何なる事物が知られたるかを指示することを得べしとのことは予既に論じ了りぬ。斯の如き國語とは果して何ぞ、拉甸語即ち是れなり。然るに設し吾人が拉甸語を一語も知らず、羅馬史の一章だも了せずとするも、總べてのローマンス語に共通なる言葉を擧證となして以て、少くともシャーレマン帝以前千年の頃に伊太利に住したる人民の、主要なる思想並に職業は、そも如何なるものなり

家と都府と王との三語

しかてふ概畧の圖面を作製せられざるにあらず。吾人は容易に證明することを得、此等の住民が、王と法律、寺院と宮殿、車と船、公道と橋梁等を有し、其他文明的生活に必要なる此等の機關を全備しありたることを。既に述べけん如く、吾人は佛、西、伊語等に表はるゝ此等の事物の名稱を掲げ、且つ西語は佛語より其名稱を借るにあらず、又伊語は西語より爾かなせしにあらざりしが故に、此等の三國語たるや、その近代的三個のローマンス方言として表はれたる其源たりし以前の源泉に存在したりしや明なりと云へることを證明せば、前述の事實も亦從つて自明せん。

同種の議論を應用すれば、アリヤン人が分裂以前に有したる最古の文明に關する一種の剪嵌細工的圖畫を製作し得べし。希臘、拉甸、梵語、スラブ、ケルチック、チユートニック語に於て家と云へる同一の言葉を發見し得らるゝを以て、此等の各國語が少くともアガメムナン及びマヌに先立つ一千載、既に分離獨立せし以前に當り、アリヤン族の祖先は最早や天幕の下に住せずして永久的なる家屋を作造し茲に住居したりしとを、當然斷言せらるべしとす。又梵語及び希臘語

最高神の語

に於て都府なる同一語の存しあるを以て、この希臘語、梵語、の使用せられし以前、既にアリヤン人に都府なるものゝしられありしとを等しく斷定して可なり。又梵語、拉甸語、チユートニック、ケルチック語に於て、王なる同一名稱の存しあるを見れば、書契以前アリヤン族が既に王朝を設定し、之を是認したりしことを想像せらるべきなり。

予は更に再び原始的文明の全圖を製作するを欲せず。唯だ古代の國語を研究するに際して、そが最高なる神は、印度、希臘、伊太利及び獨逸等の古代神話中に同一名稱を存し且つ此名稱を保存して以て、或は、ヒマーラヤ山にて崇拜せられ、或はドヤナの槲樹の間、或は獨逸の森林の中、或はカピトル即ちヂユピターの廟堂に於て崇拜せらるゝものなりとの事實を示し、諸君の記憶に訴へ、懷想を引かんと欲するなり。予は嘗て論じたりき、神は梵語にてはドヤウス、希臘にてはゼウス、拉甸語にてはヂョビス、獨逸語にてはチユーと稱せらるゝことを。只だ此發見の不思議なる性質を熱心に主張すること能はざるを遺憾とす。此等の名稱は單純なるものにはあらず、歷史的事實たり、否な中古史の事實よりも一層信

古代禮拜の狀態

用すべく、一層直接なる事實なりとす。此等の言葉は單純なるものにあらずして、ホーマー及び吠陀の時代以前數千年の往古なる全アリヤン族の祖先が、その單語の中に於て發見し得たりし最良最貴且つ最も同一なる名稱即ち光明並に天空なる名稱の下に、肉眼に映射せざるものを禮拜しけん事實を正確明瞭に吾人に告示すること、宛として昨日起りたる事實を今日に見るが如し。

斯からん狀態は、畢竟これ自然崇拜及び偶像禮拜に過ぎずと速斷せば如何。後世に及び此等の自然崇拜、偶像禮拜に衰頽し行けりと雖も、當時の禮拜は決して然るが如き狀態にてはあらざりき。ドヤウスは青空を意味せず、又單に人格化せられたる蒼穹をも意味せずして、却つて其他の事柄を意味せしなり。吠陀にはドヤウス、ピタル、希臘語に Ζεὺς πάτερ（ゼウパター）、拉甸語にはヂユピターなる語あり。而して此等の國語が互に分裂しける以前に意味せし此等の語に相當する意味は、實に「天父」即ち是れとなす。此等の天父（ヘアンファーザー）なる二語は單純なる語にあらず、乃ち予の考ふるが如くば、最も古き詩歌なり、人類最古の祈禱たるなり。ポリネシア及びメラネシアの國語に存する神の祈禱を見れば、此祈禱はゼルザレムの國

語を以て、始めて捧げられたりしことを感ずべし、これと同じく梵語が梵語たり、希臘語が希臘語たりし以前に當り、其知られざる神に對して此名稱は與へられ、此祈禱は捧げられたることも確信して不可なけん。ホーマー又はオビッドによりてヂユピターなる名稱は、小言を云ふ良人、若くは不確實なる情人の意味に貶下せられしと雖も、吾人にして始めてヂユピターなる名稱を聞く時には、この神聖ならざる名稱の中に如何なる神聖の記錄包含せられあるかを殆ど考へざるべし。吾人は宗教學中に於て、再三同一なる教訓、即ち吾人の立てる位置は神聖なる土地なりと云へることを學ばずんばあらじ。アリヤン國民が四方に旅行せんとて、東西南北に分裂せし以來已に數千年の星霜を經閲せり。彼等は各自の國語を形成し、各自の帝國と哲學とを建設し、各自の寺院を創設し且つ之を破壞したりき。彼等は漸次成長して賢明となり善良となりぬ。されど其最も高貴なる且つ吾人に最も親愛なるものゝ名稱を求めたるの時に、彼等が恐怖と戀愛との兩者を示し、無限と有限との兩者を示さんと欲せし時に、彼等は無窮なる天空を仰ぎ、無窮に遠く且つ無窮に近き神の出現を感じつゝ、其祖先が嘗て、成

せしことを再び繰返さゞるを得ざりき。乃ち祖先と同一の語を結合し、再び原始的なるアリヤン族の祈禱を繰返さゞるを得ざりしなり。斯くて彼等は原始的なるアリヤン族の祈禱たる「天父」を永久持續すべき形式にて、「天にまします我等の父」と稱へぬ。

いてや是れよりセミティック族の古代宗教に就き研究せん。已に明なるが如く、セミティック語はアリヤン族の國語に比して一層密接に結合せられたり。セミティック語の比較文法は、梵語、希臘語、拉甸語の比較文法に著るしき心を牽引する底の性質を甚だ多く有せざるなり。セミティック語の學者は說明して曰く、『ヘブリユー、シリアック、アラビック、エスィオピック等の文法を比較するは極めて無價値の研究たり。如何となれば此等の國語に一の密接なる關係を示すが爲めには、唯だ之を相接近せしめ置くのみ煩を要するに過ぎざるを以てなり』と。予は此等の學者の言を以て全然眞理なりと考へず、レナン氏が其本來の希望を遂行し、セミティック族の文學的分派のみに止らず、フエニシア、亞剌比亞、バビロン、及びニネベの古代言をも包括して以てセミティック國語の比較文法を作成し、こ

阿利耶族語學者と閃族語學者との比較

れによりてポップ氏の大著たるアリヤン語の比較文法と比肩せらるべきに至らんことを希望して止まざるものなり。

然るに茲に最も驚くべき事實は、セミティック語學者が、アリヤン語學者の模範に從つて、種々なるセミティック語の方言よりヘブリユー、シリアック、並にアラビック語の猶ほ獨立分離せざる以前に存在したりし共通語を發見し、此等の方言よりしてセミティック族未分裂時代の主たる思想及び職業を究知せんとせざるにあり。材料はアリヤン語に比して豐富なるのみならず之を採取する更に容易なるものに似たり。アリヤン族の各國民間に存すなる共通語は、セミティック族の諸國民中にも存すべく、其他主要なる點に於て關係の程度兩種族殆相同じ。蓋しアリヤン族が其一家族の自然的家族たる父母、子女、兄弟、姉妹等は云はずもあれ、血緣薄き家族たる義父母、義兄妹等を認め且つ名付けたりしことにして、これを證明するは緊要事に屬すとせば、何爲れぞセミティック族の諸國民が摩西の法律存在以前、既に之と同程度の文明に達したる事實を證明せんとするに當り、豈同一の趣味を感ぜざるの理あらんや。

神の名稱

神の名稱の意義

吾人が研究の目的を更に直接なる範圍に限定せば、則ち容易にセミティック語も亦アリヤン語と等しく神の數種名稱を共有せしことを知らん、此等の共有なる神々の名稱は、實に南部族即ちアラビック、北部族即ちアラマイック、中部族即ちヘブライック族が、永久に分裂せんとする以前、業に已に存在したるなりき。此等の分裂前に存在せし共通なる神々の名稱を見れば、耶和華（エホバ）がアブラハムに崇拜せられ、バアルがフエニシア人に、又エルがバビロン人に禮拜せらるゝに至らざりし以前、夙に存在し、猶ほ嘗て統一せられたるセミティック族の宗教觀念の如何なりしかを窺ふに足らずとせんや。

既述しけん如く此等の神々の名稱の意味は、アリヤン族の夫れの本來の意味に比して更に一般的なりしなり。即ちセミティック族の神々の名稱は、有力なる、壯嚴（ベラフアル）なる、高貴なる、王（ロード）、君（ロード）、主等の意味を有す、故に此等の名稱はセミティック族の各部屬が各自の禮拜所に於て其神々に對し用ゐたる尊稱的獨立語なりしならんか。然れども又飜つてセミティック族の使用せし共諸國語中、偉大、强力若くは權威等を示す所の言葉は、其數幾何許存せしかてふ事實を研究すれば、シリアカルセー

ヂ、バビロン等に於て使用せられたる神の固有名詞と同種名稱の用ゐられたりし事實を僅かに一片の歴史的説明にかり之を了知し得べし。セミティック並にアリヤン族が嘗て彼等の崇拜せし神々の名稱を確定せし時代は、疑ひもなく歴史上存在すべく、且つ其時代は彼等が共に相分離して各自の國語及び宗教を建設したりし時代に先立つこと明確ならん。

神の最古の名稱

セミティック族所屬の各國民の祖先の崇拜せし神の名稱中最も舊古なるものゝ一は El なり。エルは強大を意味す。バビロン碑文に Ilu とあり、是れ神の意たり。されば Bab-il なる名は Il を祭れる門又は寺の意となるべし。ヘブリュー語にてエルは、強者、英雄なる一般的意味にも使用せられ、又神の名稱としても用ゐらる。即ち Beth-el なる語は神家の意味を有し、其他これに類する文字少からず。若し此エルなる文字が、冠詞と共に用ゐらるゝ時は Ha-El となり、強者若くは神と云へる意を示し、舊約全書には常に耶和華の名に使用せられ眞正なる神の名稱となせりき。然りと雖も此エルなる語は常に其總稱的なる力を有し、舊約全書中の所々に於て、猶太人ならざる異教徒の神々の名稱にも適用せられたるを見る。

このエルなる神は、ビブルスに於てフエニシア人により崇拜せられ、天地の子なりと稱せられたりき。エルの父は最高の神なるエリウンの子にして此エリウンは野獸の爲めに殺害せられたり。其子乃ちエリウンの後嗣となりたるも王位を退けられ、遂に我子エルに弑虐せられぬ。このエルなる神は、プキロの所謂希臘のクロノスと云へる神と同一の神にして、土星を支配する所の神なりと云へるもの是れなり。ヒムヤリティックの文字に於ても亦エルなる名稱發見せられつ。

プキロは Elohi の複數たる Elohim なる名稱と此エルなる名稱との間に或關係を連絡せしめんとしたり。氏の唱ふる所によれば、其父とエルとが合戰の砌に際し、エルの黨派のものはエロエイムと稱せられたることクロノスと連合したるものゝクロニオイとも呼ばれたりしか如しと。これ明白にエロアーなる語を説明するに人心を誘惑せしむべき字學を以てせるものなり。然れども予は最良なるセミティック語學者殊にフライシエル博士が此所説に反對せられけん如

く異見を狹むものなりと雖も、今茲には止むなく暫し此說に從ひ置かん。

エロアーは亞剌比亞語の上帝（イラー）と同一語たり。單級にてエロアーなる名稱はエルと同意義のものとして聖書中に用ゐらる。複數にて云はゞ一般に神々を意味し、又は眞正なる僞神を意味す、されど舊約全書に於ては、其形複數にして其意味單數に用ゐられ、眞正なる神の名稱として承認せらるゝに至りぬ。亞剌比亞語にてイラーに冠詞を附せずば一般の神なる意味を有すれども、これに又冠詞を附してアル、イラー若くはアラーと稱するときは、もとのイラーなる語が亞伯拉罕（アブラハム）及び摩西（モーゼ）の神の名稱なりしと等しく馬哈默（マホメット）の神の名稱となるなり。

エロアー又はイラーなる語の起原は、歐洲並に其本國の學者によりて屢々研究せられつゝ。カムースの傳ふる所にれば、此語につき嘗て二十種の異見ありしと云ひ、モハメッド、エルファーシの云ふ所によれば、三十種の意見ありたりと傳ふ、這般の研究上、予の大に信賴を呈するフレイシェル博士は、此エル即ち强者なる意味の語を說明して、「濃密にして太し」とか、「肉付能く强大なり」とか云へる意味を有する語根アールより出たる語なりとし、猶ほエロアー又はイラーを恐怖の

意味ある一の抽象的名詞なりと信じ、この語を以て全然異なれる語根即ちアラー（狼狽せる、混亂せる等の意味を有す）より導かれたるものなりと云ひ、乃ち恐怖を意味するが故に、從つて此エロアーなる語は恐怖若くは尊敬の目的物を意味するに至り遂に轉じて神の名稱とはなれるなりと云ふ。これと同樣なる說明を以てバチャッドなる語を了解すべきなり。此語は恐怖を意味し、遂に神の意味に用ゐらるゝに至れるもの。舊約全書創世記の第三十一章四十二節を見れば、「予の父の神即ちアブラハムの神と以撒（イサック）の畏る所の者は予と共に存したるを除き」と、又第五十三節に「雅各（ヤコブ）は其父以撒（イサック）の畏る所の者を指して誓ひぬ」とあり。アラヤイック語の恐怖の意味を有するダクラーは、神又は偶像の名稱として用ゐられてあるなり。

これと同じき古代の名稱は、アルラートと云へるが如き女性的名詞によりても表示せらるゝとあり。アルラートなる女神の有名なる寺院は、亞剌比亞のタイフにあり。この寺院はメッカ（マホメット）の靈場に次て尊重せられたるものなりしが、馬哈默（マホメット）の命令の下に破毀し去られぬ。されどアルラートを崇拜するは唯だ此

一場に限られざりき。且つヘロドトゥスの述べたるアリラットなる亞剌比亞の女神は、コラーン經の所謂アルラートと同一の神たりしや疑ひなけん。

セミティック族の過半國民中に行はれたる神の有名なる名稱は、此外に猶ほバアル又はベルなるものあり、アッシリヤ人、バビロン人、フェニシア人、カルセーヂア人、モアビット人、フキリスティン人及び猶太人等は、すべて此ベル若くはバアルなる名稱を用ゐて、「偉大なり」との意を示し、時としては崇高なる神と云へる意味すら表示せしめぬ。ヘブリュー豫言者の反抗に拘らず、ゼルザレムの並樹の中にて、絶へず此神を禮拜したりし猶太人は、此神を以て奇怪なる他國の神とは思惟せざりしならん。彼等は此神を以て家神となし、又セミティック族の神なりと感ぜり。彼等の祖先が大洪水の彼方に於て崇拜せし神々の中、最も緊要なる位地を占めたるものは恐らくは此神なりしなるべし。この神はもと一の人格を有したりしならんも、爾後地方的禮拜の感染する所となりて、數個の神聖なる人格に分たれたりき。而して「バアル、ツル」「バアル、ツィドン」「バアル、タルス」等の語あり、もとティレのバアル、シドンのバアル、タルススのバアルと云へる語より變化せしものならん。モルタ島に於て發見せられたる二個の數枝ある燭臺の上、ティレのバアなるメルカルトに奉納すと云へるフェニシアン語の奉獻語(ヴォティーフロン)あるを見る。シエチエムにては「バアル、ベリト」として禮拜し、而して此バアル神は和議の神として想像せられ、エクロンにてはフキリスチン人が「バアル、ゼブブ」として禮拜し、蠅の王なりと思惟せらる。又モアビット人並に猶太人も亦このバアルなる神を「バアル、ペオル」と稱したりき。フェニシアの貨幣の上に「バアル、シャーマイーム」なる語あり、此語は天の神なる意味を有し、フキロが稱してベエルサメーン(太陽)と云ひしものと同一の神たり。氏の所説の如くば、『熱度激甚なりしかば、フェニシアの古代の種族は、其手を高く天空なる太陽の方に捧げぬ。これ彼等が此神を唯一の神即ち天の神なりと信じ、此神を稱するに「ベエル、サメーン」と名づけたりしを以てなり。蓋し此「ベエル、サメーン」なる語は、フェニシアにて天の君となり、希臘にてはゼウスとして仰がるゝものなりき』と。又バアリーム若くは多數の神(ベエル)なる語を見ることあり。男神イラー又はアルラーなる名稱と、女神アルラートなる名稱とが相對照せらるゝが如く、女神バアルトはフェニシア人のバアル

ティスに對照せらるべし。セミティック國民及びアリヤン國民の中に於ける女神の原始的觀念は、もとより異なり、且つアルラー並にバアルの女性の名稱が、最初は單に神の勢力、活動若くは聚注力等を示すに用ゐられたること殆ど疑ひを容れじ。この見解は、カルセーヂの碑文に於てタニットなる女神が「バアルの面貌」と稱せられ、エシユムナザルの碑文に於てシドニアのアスタルテは「バアルの名」と呼ばるゝに之を見れば其確實なること論を俟たず。然れども時代の經過すると共に、此抽象的なる思想は女性的勢力なる思想に變ぜられ、遂に妻なる思想にまで變遷したり。フエニシア人、バビロニア人、アッシリア人等が崇拜せしバアルティスは即ち是れ此變遷を示すものなり。何を以て之を云ふか、オッペルト博士の說によれば、ヘロドトゥスの中にあるミリッタの名稱は、このバアルティスの單に變形せしものなりければなり。

この外猶ほアシユトレートなる女神あり、此名稱はアシユターなる男神を豫想したる名稱なりとす。此の男神及び女神の形跡は、バビロニア碑文とバルミレン碑文イシユターに於て發見せられ及びモアビット石のアシユターに於て發見せらるつ。然れども女神の方勢力盛大にして、啻にカルセーヂア人、フエニシア人、フキリスティン人等によりて崇拜せられたりしのみならず、猶太人が天帝を見棄てゝバアル及びアシユタロートなる神に奉仕しけん時には、この猶太人すら此女神を崇拜したりしなり。シリアン人は此女神をアシユタルテと云ひ、此名稱を以て希臘人、羅馬人にも亦等しく崇拜せられぬ。ヂエレミアーの「天の女王」と稱する神は、茲に謂ふ所のアスタルテ又はバアルティス女神の意味に外ならず。南部亞刺比亞に於てだに此古代の女神を崇拜せし形跡を留めたり。そはヒムヤリティック王國の古都たるサナーに於て嘗てヴエヌス（バイト、グムダー）この爲めに建立されたる巨大なる宮殿と寺院とありたりしを以てなり、而してアドタートなる名稱は、ヒムヤリティックの碑文中より發見し得。否な或場所などにては、此アドタートなる名稱の前に男性の動詞を置かれたるものすらあるなり。史蹟以前に遡りて、神の名稱として古く定められたる語は、ヘブリユー語のメレッチユなりとす、こはもと王の意味を有したりき。カルセーヂ、クリート及びロード島、其他ヒンノムの谿間に於ても共に崇拜せられたる神の名稱は、モロッ

チユと名づく。オリベット山に靈場を有するアンモニット人の崇拜したる神はミルコムと呼ばれ、ヘブリユー語のメレッチユと同一語たり。加ふるにアドランメレッチユ及びアナンメレッチユと云へる神は、之と同樣なる古代のセミティック偶像が唯だ地方を異にするにより變形したるに過ぎざるものにして、セファルビット人が自己の子供等を此神の爲めに火中に投じたりと云ひ傳ふる神なりとす。

アドナーイなる語は、ヘブリユー語にて「予の君」と云へる意味を有する名稱にして、舊約全書にては專ら耶和華（エホバ）として用ひらる。この語はフエニシアにては最上の神の名稱として用ゐられ、爾後度々神話的變形を受け、希臘の神話にあるアフロディテーに愛せられしが、遂にアレスの野猪に殺されたる美少年アドニスなる名稱によりて吾人に喧傳せらるゝに至りぬ。

エルヨーンなる語は、ヘブリユー語にて最高を意味し、舊約書にては神の性質を表顯する形容詞として用ゐられたり。故に此語は夫れ自身、耶和華（エホバ）の名稱として用ゐらるゝことあり。メルチゼデックは、エル、エルヨーンの僧侶即ち最高

なる神の僧侶なりと稱せらる。

されど此エルヨーンなる名稱は、ヘブリユーにのみ限られたるものにあらず、フエニシアの天地開闢說にてはエリウンと稱せられ、所謂天の父又は最高神の意にしてエルの父なり。オッペルト博士は此エリウンなる神をダマスシウスの記したるイルリヌスと同一の神なりと論ぜられたり。

時としてはエルと連結して用ひられ、又往々にして唯だ單獨に最高神の名稱として聖書中に用ゐられたる語は即ちシャッダイ是れなり。此語は有力なりとの意味を有す。このシャッダイなる語は、シエッドなる名詞及び其複數形たるシエディームなる名詞を作りたる類似の語根より出づ、而してシエッドはタルムッド語にて惡魔を意味し、シエディームは舊約全書にて僞神又は偶像と云へる意味に使用せらる。このシャッダイなる名稱は、時として象形文字の碑文にセット若くはセッドとして顯はるゝことあり。この語は牧羊者が神を稱するに用ゐたる語にして、此神の異名の一はバアルなりとす。此同一神シャッダイは古代のフエニシア人によりて崇拜せられたる神々の一柱なりしこと發見せら

れたり。

此等の神は、セミティック族の全部により、又は其最大多數者によりて共通に尊崇せられ、該族分裂の以前に當り、夙に存したる名稱なりしと雖も、此外猶ほ彼等の各部屬に特殊なる神々の名稱なきにあらざりき。

即ち耶和華とは猶太人に特殊なる神の名稱たるが如く、もとはヤーベーと發音せられたりしに似たり。リドゥスの有名なる文句中にイアオはカルディーア人の間に尊崇せられたる神の名稱なりとの說明をなせる、正當なるや論ずるまでもなし。然れども此イアオは、ヤーベー、耶和華又はヤー(例へばハレル、ヤー)と同一語なりきてふ事を承認せんには、カルディーア人によりて使用せらたるリドゥスなる語は單に猶太人のみを意味せざりしやベンリー、ローリンソン氏が主張するが如く、若し耶和華なる名稱にしてバビロニアの碑文中に顯はれたりしならんには、此語も亦セミティック族の分裂以前に於て夙く一定せられありしとを承認せざらんと欲するも得ざるべく、從つて予の想像も亦變更せざるべからざるに至るべし。耶和華はヘブリユー人に特殊なる神の名稱なりと云はんには、最早や之を證明すべき難しと雖も、而もこれもとヘブリユーの豫言者によりてセミティック族のあらゆる他の神々に對し獨一の眞神を表示すと定められたるものなりと云へることは正當にして且つ證明せられ得べし。

然りと雖も設し耶和華なる名稱を或は廣義に解し、或は狹義に解すとせんも、予の考ふる所の如きは、嘗てセミティック族の祖先等が猶ほ其國語と宗教とに差別を設けざりし時代に存したりしことを、充分證明するに足るべき材料は存在すと信ず。此時代はセミティック族中の何れの國民も之を夢想し回憶することを能はざる所にして、恰も印度人、希臘人又は羅馬人が、嘗て共有の國語を談用し、現今の如き梵語、希臘語、拉甸語等によらずして天帝を崇拜せし時代を夢想し、回憶し得ざらんが如し。而も予は此書契以前の時代を歷史的なりと稱するに躊躇せず。然る所以のものは他なし、若しも此時代にして眞正なる時代にあらざるものなりとせば、セミティック族の分裂後、各自主張したる各種のセミティック國民により使用せられし國語及び崇拜せられし宗教は、殆ど其意を解し得ざるに至るべきを以てのみ。ヘブリユー、シリアック並にアラビック等の國語は、梵語、希

臘語、拉甸語が共有語を有しけん如く、嘗て共通語を使用したるなりき。印度人、希臘人羅馬人及びチユートニック人が、彼等の主なる神の崇拜を其共通なるアリヤン族の殿堂盤場より誘致せしことを疑ふにあらずんば、是れと同じく全セミティック族にも亦嘗て最初の宗教ありたりしことを否む能はざるべく、バビロン人がバビロンにより、フエニシア人がシドン及びチルスにより、猶太人がメソポテーミヤ又はゼルザレムによりたる以前に當り、全セミティック族の祖先により天に在す強者エル神の尊崇せられたりしとを否認すると不可能なるべし。セミティック族の各國語の證明は、アリヤン族の各國語の證據と相同じく、種族を異にして而も兩者が其變遷の道程即ち結論に至りては異別あると能はざるなり。

チユーレーニアン族の國語と宗教

予は今やチユーレーニアンの中に行はれたる國語と宗教との研究に移らんとす。本問題や甚だ困難なり、されば吾人より遠く離れ、且つ大に其趣を異にする支那、蒙古、サモエッド人、フキン人、及びラップ人等の國民の宗教的觀念を研究する上に於て、果して成効するや否やを私に疑ふものなりと諸君の前に自白す。吾人がアリヤン及びセミティック族の古代史を讀むに當りては、自ら多大なる趣味を感ず、何となれば畢竟吾人は其國語に於てアリヤン的たり、少くとも或範圍までは其宗教に於てセミティック的たればなり。然れどもチユーレーニアン族、即支那人及びサモエッド人と吾人は如何なる所に共通點を有するや。即ち此共通點は一見頗ぶる僅少なるに似たりと雖も、其關係や甚だ大なり、何が故ぞ然る、彼我共に人類の上に於て共通の人々なるを以てなり。夫れ人間の人間たる所以のものは、皮膚の表面に呈せる黄色及び頰骨高く秀でたるが爲めにあらず。否な吾人にして此等の支那人の黑瞳を凝視する時は、則ち支那人の心と吾人の精神と人間に交感作用の惹起するを知るべく、支那人が崇拜する神も吾人の尊崇する神も同一にして、只だ支那人の神は其發語虛弱にして其禮拜不完全なるの差別あるのみなることを感ずべし。

支那の宗教

チユーレーニアン族崇拜の最古の代表者として支那の宗教を採り研究すれば、依つて起る所の疑問は、他のチユーレーニアン族たる滿洲、蒙古、韃靼人及びフキン人等の神話又は宗教に顯はるゝ神の名稱は又支那の名稱と同一なるや否やにあり。チユーレーニアン族の各國語の變化し變態する性質を考へ、又支那に於け

る最初の言語的、宗教的固定と、其後他のチューレーニアン諸族の間に起りたる漸次的にして且つ不完全なる結合との間には、年代の經過既に久しかりしことを考ふれば、アリヤン族のドヤウス、ピタル又はシエマイト族のエル及びバアルの如き名稱が、廣大なるチューレーニアン族の宗教的傳說中に殘留しけるならんとの予の希望は、前途甚だ有望なりと云ふべからざるものありと信ず。然れども吾人が何故に支那語蒙古語土耳古語等に於て、斯の如き名稱を探索せざるやに至りては、別に深き理由あるにあらず。又セミティック族及びアリヤン族の崇拜せる神の名稱中には、甚だ符合し一致するもの多きに比して、支那、蒙古、土耳古等の諸族に於ける神々の名稱の一致は爾かく顯著にして且つ明確ならざるにより、吾人が此等のチューレーニアン族の神々の名稱を冷々看過し去れるに至れるものにして、これ以上別に深き理由の原因とては存在せざるなり。此種の研究をなすに當りては、種々なる確實の程度を異にする結果を生すべく、予は自己研究の結果を擧げて等しく皆確實なりと稱することを得べき最後の研究者ならんと信ず。然れども吾人が其安全なる土地に達せんには、須らく心して暴突盲進すべきにあらず、若し階段を上昇し盡さんとせば宜しく第一段により躊躇始むるの覺悟なくして可ならんや。顧ふに支那語と他のチューレーニアン族の國語とに顯はれたる宗教的語句の間に存する一致點は、必ずや希臘語と梵語との間、又はヘブリュー語とフエニシア語との間に存する一致の如きものにあらざるべからんも、而も前者の一致は新科學の開拓者によりて等閑視去らるべきものにあらざるなり。

古代支那に行はれたる一般崇拜は、已に述べしが如く單純なる精靈、勢力、又は名稱の崇拜にして、即ち人間の生活に對し、善又は惡の影響を實行し得る所の自然的勢力の中にて、最も甚だしきものゝ名稱を尊崇したりしなり。天空、太陽、月、星、大地、及び山河等の精靈を信仰したりしも、當時猶ほ此世を去りたる死者の精靈につき何等の信仰なかりき。

百般のこと規矩に則り、整頓を好むの強き傾向を有する支那に於ては、一面能動的にして他は受動的に、一方は男性的にして他は女性的なる二勢力を認むるが如き組織あり、此性質相反せる二勢力の組織系統は、其中に萬般の事物を網羅

し、小人の上に超然として屹立せる聖賢の心中に於て乃ち此等の小人輩を壓倒したるものにぞありし。此二勢力は、自然界に存する正反の性質を有する萬般の事物の中にも下にも、亦其背後にも、到る所としてあらざる所なく、且つ往々にして天地と同一視せられたりき。

然れども此二者の中にて天の精靈は、最初より地の精靈に比して更に高尚なる地位を占めたるものなりしことを確認せらる。天地は萬物の父母なりと云へるは唯だ書經と名ぐる歴史的書卷中にのみ見出さるゝ議論なりとす。又唯天は是れ萬物の父母なりとは古代の詩に於て歌はる。此天の精靈は之を稱して支那人は天（ティエン）と云ひ、他の宗教に於て吾人がヂュピター若くはアルラーなど稱する最高神のことを、支那語にては蒼空の意義なる天と呼べり。この天は康熙字典に從へば、偉大なるものゝ意にして、高所に住し下界一切のものを支配するものとの義たり。もと虛空のことを意味したりし此天が、支那語に於て上下を通じ種々なる階級の人々に用ゐられ、此慣用によりてアリヤン語の天空（ディヤウス）なる語が、印度及び希臘の宗教、詩歌、神話並に哲學中に傳はれるに至りしことを知らな

ん。ティエン支那文字は天なり、此字は二個の記號より構成せらる、即ち大（ダイ）と一（イー）とより成れり。故に天空は唯一、無双偉大高貴なるものとして觀察せられたるなり。予は記憶す、支那の或書に、一の天空あり、豈何ぞ數多の神やあらんやと云へる文字ありしことを。實に天の精靈即ち天なるものを彼等が信仰せることは、取りも直さず支那語に於ける宗教的語句の全般を構成する基本なりとす。例せば、光輝ある天は光明と稱せられ、此天の光明は到る所に隨伴す。光輝ある天は放光し、此光は常に彷徨する所に隨伴す」と云へる語句あるを見る。天は一切萬物の祖先なりと稱せられ、一切萬有の最上位に居す。且つ天は偉大なる陶工者と呼ばる、天は土壤を以て種々なる陶器を作る人に比せらるゝが故なり。又支那語には、天聲、天心、天行、天命など云ふがあり。民人教導の聖賢は、總べて天より送られ、孔子自身は世界の木鐸として天より此世に降るべく命ぜられたる者なりと稱せらる。何人も能く孔子の說を信奉せざりしかば孔子が絕望の淵に沈沒しけるの時、自ら唯一の慰安を得たりき、慰安とは何ぞや「天は我を知る」と云へる語句即ち是れなり。孔子が天又は天の精靈を最高の神となし、此神は民人

の崇拜に係る他の諸神即ち空氣、山河、死者等の精靈を總括統御するものなりと考へたるの事實は、此他數種の語句を引きて立證すべき易し。此觀念はソクラテスが希臘の神話的群神に對して抱懷しけん觀念と其揆を一にせか。或時人より諸種の精靈は如何にして奉仕せらるべきものなりやとの質問を受けたる時、孔子答て曰く、『若しも吾人が多數人間に仕ふる能はざるものとせば、如何でか能く種々の精靈に仕へ、樣々なる神々を崇拜するを得べきぞ』と。又其後單簡にして意味深遠なる語句を以て述べて曰く、『神々をば尊敬せよ、而も之を遠ざくべし』と。

支那以外のチューレーニアン族

果して然らばチューレーニアン族の他の國民たる滿洲、蒙古、韃靼、フインランド人若くはラップランド人等の種族中に、この支那にて行はれたる天の信仰に關する形跡存するや否やを研究せざるべからず。チューレーニアン族の各種の方言にて、天空のことを種々に唱ふるが故に、吾人が支那語にて見出したるが如き語、即ち天と同一の名稱を此等の支那以外の種族中に發見せんと試むることは、絶へて其必要なかるべし。されど若し此天なる名稱の形跡が、些少にても蒙古及び韃靼の言葉中に發見せらるゝものとせば、吾人の論議は疑ひもなく頗ぶる有力なる根據を得たるものとす。蓋し比較神話學を研究する場合には、何れの場合にも斯の如き事情あるべし。印度、希臘、伊太利、及び獨逸等に同一なる觀念、同一なる神話的傳說等を發見し得んには、疑ひもなく彼等の間に共通的信仰の存せりしことを想像する材料となさるべけんも、而も吾人は想像以上に確固たる斷定を下すこと能はざるなり。然れども若し吠陀の神話と希臘、羅馬及び獨逸の神話とに於ける同一名稱ある神並に英雄の名稱を發見することを得れば、前例に比し多少確固たる研究の基礎を得たるものと云ふを得ん。此場合には最早や爭ふべからざる眞正なる事實を材料とせんを要し、而して此上にてなすべきことは、唯この眞正なる材料を說明すれば事足る。

されどチューレーニアン族の神話に於ては、這般の眞正なる事實の材料を容易に採用すべき難し。支那を除外してのチューレーニアン族の古代史は甚だ不明なるのみに止らず、彼等の現狀に就て吾人の了知する所も亦往々にして偏見なる觀察者より出でたるもの多し。加ふるに彼等の當て奉仕したりし異教は、佛

教、回々教、耶蘇教が漸次茲に侵入し來る以前に於て、已に早く消滅に歸したりき。然るに中央及び北部亞細亞を旅行したる最も信用すべき旅行家殊にカストレーンの注意深き觀察に之れを見れば、トウングジック蒙古、韃靼及びフキンランド人の宗教の散在せる記錄により、最も顯著なる一致符合せる點の其間に存してあるを認めずんばあらざるなり。即ち此等の種族間には、到る所に自然の精靈、死者の精靈等の崇拜せらるゝを見るべく、其崇拜の上に、更に或る高尚なる勢力に對する信仰すら起りつ、而して此高尚なる信仰は、或は父或は老人、或は世界の創造者、保護者にして、常に天に住する久遠實在者なりと稱せらるゝなど云ふ其名稱一にして足らず。

支那史中の外國傳

支那の歷史家は、實に此等のチューレーニアン族の上古史に關する物語を吾人に傳ふる所の唯一の著書をものしき。殊に匈人及び土耳古人の歷史に就て支那に負ふ所多く、支那の歷史家は、前者を匈奴と云ひ、後者を突厥と呼べり。その云ふ所によれば匈人は日月、天空、地球並に死者の精靈を尊崇禮拜し、匈の僧侶即ち沙門は、雪、霰、雨及び風を起すことを得て、雲を支配する力を有しけるとぞ。

土耳其人

バイザンタインの史家メナンダーは土耳古人のことを述べて曰く、『予と同時代に於て、土耳古人は火、水及び地球を尊崇し、同時に世界の創造者たる神を信仰し、駱駝、牡牛、羊等の犧牲を此神に供したり』と。

蒙古人

此時代より稍や後にして、中古の旅行家たりしプラノ、カルピニ及びマルコ、ポーロ等の人々より更に新しき報知に接しぬ。曰く、蒙古種族は、太陽、火、水を禮拜すされど又一層有力にして偉大なる上帝を信じ、之を呼んでナタガイ又はイトガと稱しきと。

トウングジック及サモエッド族

近世に及んでは、主としてカストレーン氏の報告に信賴せざるを得ず、故如何となれば、氏は多くの旅行家が多く着目理解することを得ざりし貴重なる材料を多く吾人に傳達するを得たる旅行家なりければなり。氏はトウングジック族のことに關し記して曰く、『彼等は日月、星辰、地球、火、其他森林、河川並に神聖なる場所の精靈を禮拜し、偶像並に米國土人などの神として崇拜する所のものたる鷄、蛇、熊又は石、齒、木、貝殼等までも尊崇せり、然れども此等のものを尊崇禮拜するに拘らず、ブカと稱する最上の神を信仰したりき』。なほ更に述べて曰く、『サモエッ

芬蘭人

ド族は、偶像其他の種々なる自然物を禮拜したりと雖も、常にヌムと稱する所の高尚にして神聖なる力を崇拜すと自白せり』と。

此ヌムと稱せらるゝ神は、又サモエッド族によりてヂュマとも呼ばれ、フキンランドの大なる神話にてヂュマラと稱せらるゝものと同一の神なりとす。フキンランドの神話は、他のアルタイック族のそれに比して殊に能く保存せられ、口碑的傳說を以て數世紀の間保維せられたる古代の詩歌に之を見れば、則ち天空の神たるヂュマラの壯大なる記事を知るに足りなん。

ヂュマラとは素と天空を意味す。此語はカストレーンの說明せりし如く、ヂュマ即ち雷なる語とラ即ち場所、換言すれば雷の居る場所にして、取りも直さず天空を意味する所の二語より構成せられたるものなり。此語たる第一に天空を意味し、第二に天空の神、第三には一般に神なる意味に使用せられたりき。各國語の聲音的規則によりて多少變化を受けたるの外、此語と全然相同じき名稱は、ラップ、エストニア、シルヂェン、チエレミッシア、及びボートヤク人等の中に發見せらる。

アルタイック種族の宗教思想を所々に於て多少發見し得ると等しく、件の天帝の發生及び其變化に就きても亦多少の發見をなし得べきなり。カストレーンが嘗てサモエッドの年老たる一婦人に向ひ、汝は嘗てより祈禱をなしたることありやと尋ねけるに、彼女答て曰く、『毎朝天幕より起き出てゝ太陽の前に首を低れ、太陽の昇りまさん頃に妾も臥床より起き上るべし」と唱へ、毎夕「太陽の沒し給はん頃に妾も臥床につきて休息すべし」と唱ふるなり』と。此文句は是れ彼女の唱ふる祈禱にして、恐らく彼女が宗教的儀式の全部なりしならん。此祈禱給はたるや、吾人より之を見れば物足らぬ心地すれども、彼女にとりては爾か思はざりしなるべし、何を以て之を云ふ、此祈禱あるが爲めに彼女は毎日少くも二度此下界を離れて遠く天上を仰ぎ見たりければなり。即ち此祈禱によりて彼女は崇高偉大なる生活を吹き込まれたるなりき。彼女をして此世の生活たる日々の課業と、神聖なる太陽の光輝とを一身に集めしめたるものは此祈禱にぞありける。彼女は此祈禱を以て極めて高大のように思惟しつゝありき、故如何となれば、彼女は自ら正者なりと云はんばかりの語調を以て最後に『此世の中には、毎

朝毎夕祈禱を捧ぐることをなさゞる粗野なる人間少からず存せり』と云ひたりしを以てなり。

斯からん場合に天空の神は、太陽によりて表示せらるゝが如く、ヂユマラの神もまた種々なる場合に應じ海の神なりと思考せらるゝことあり。或る夕、サモエッドの水夫と共にボーラル海邊を逍遙しけるの時、カストレーン氏は此水夫に問ふて曰く、『幸に予に告げよ、ヌム(即ちヂユマラ)は何處に在すかを』。時に水夫は些の躊躇だもせず、遙に暗黑なる海を指し示しつゝ答ふらく、『神は彼處に在せり』と。

又叙事詩カレバーラの中に云へることあり、ボーヂョラの女主人が(旅館の)仕事を有せるの時、乃ちヂユマラの神に向ひ、謂つて曰く、『ヂユマラの神よ、今ぞ來ませ沐浴に來ませ溫湯に、おゝ虛空(エヤー)の神(ロード)よ』と。

又ヂユマラは虛空の神なり、次に掲ぐる詩歌中に、この神に祈るの語あるを見るべし。

今ぞ早く御身を鎧ひ、御身の馬を武裝し給へ、ヂユマラの神よ、

おゝ虛空の支配者よ、

御身の疾驅せる競走者たる駿馬を出し、陸離なす粲色を有する槌をかり給へ、われ等の骨、我等の踝、そが震ふなる我等の肉を擧げて破れつらんと思ふばかりに我等の血管を通じて、通行せしめつゝ、馬を驅り、槌を驅り給へ。

われ等の肉と骨とを共に結びつけ、血管と血管とを、いや更に堅く結びつけられよ。

われ等の關節に銀を滿たしめ、血管には金をもて流れしめよ。

以上述べたる時宜に應じて祈らるゝ所の神は皆同一なり、他なし、天空の神即ちヂユマラ是れのみ。されど此神の性質は頗ぶる不明にして、果して虛空の神なるや、太陽の神なるや海の神なるや、そも又自然の萬象によりて仰がるゝ最高の神なるかを斷定し易からざるなり。

ヂユマラなる神の名稱と、天なる支那の天空の神との間に何等か類似の名稱なきやと云へる問題は必然提出せられん。ヂユマラの共通的崇拜は、北部亞細

支那と他族との比較